

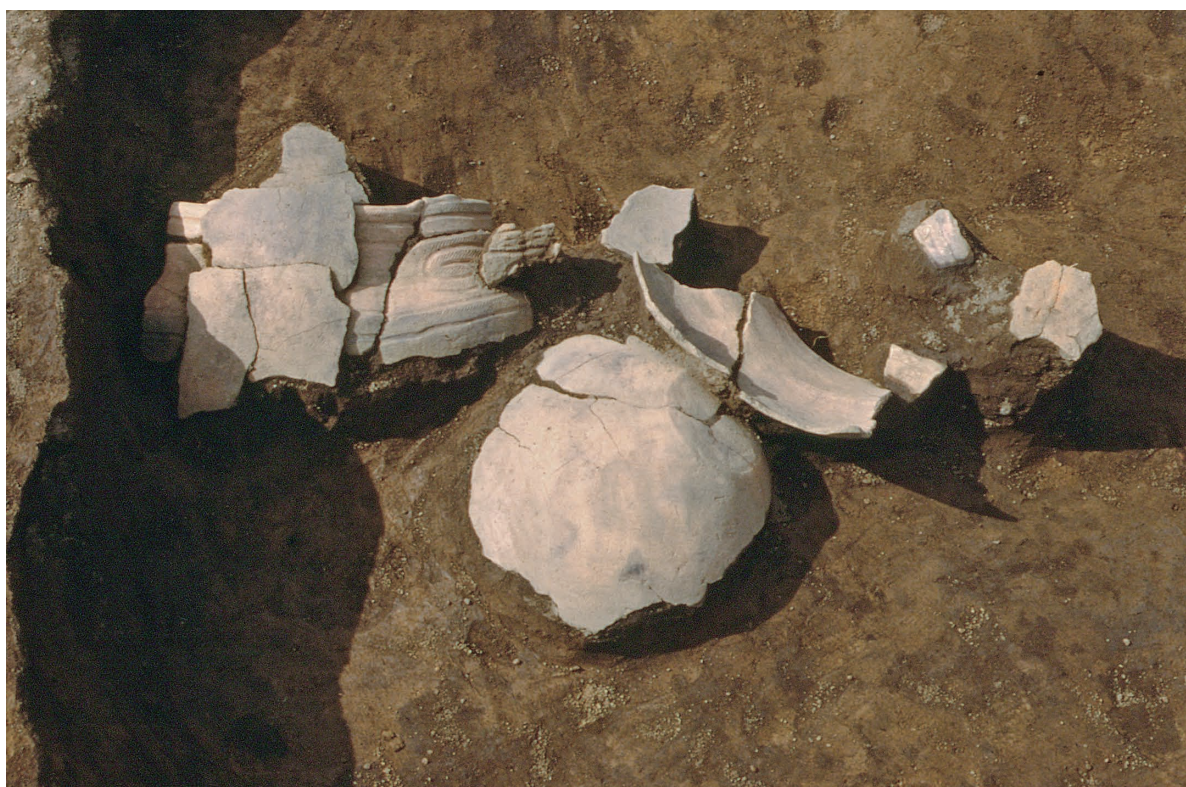
白岡市埋蔵文化財調査報告書第23集

前田遺跡 (第2地点)

市内遺跡群発掘調査報告書XXI

2014

白岡市教育委員会



第10号土坑遺物出土状況

卷頭図版2



第15号土坑遺物出土状況

序

このたび白岡市教育委員会では、『前田遺跡（第2地点）』の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

白岡市は都心への通勤圏ということもあり、近年は住宅建設をはじめとする各種の開発が相次いでいます。こうした社会背景を受け、平成24年10月には市制を施行いたしました。

一方で、郊外にはまだ緑豊かな田園風景が広がっており、前田遺跡もそのような田園地帯の一角に存在しています。

前田遺跡は蓮田市と境を接する実ヶ谷地区に所在する縄文時代中期から晩期にかけての集落遺跡で、ご報告する第2地点では、今から約2,300年前の縄文時代晩期の「土坑」と呼ばれる穴が多数見つかり、たくさんの土器や石器が出土いたしました。これらの土坑は、縄文時代の人々が葬られたお墓であった可能性が高いといえます。

また、これらのお墓から見つかった土器のなかには、東関東や東北地方の影響を色濃く反映したものが多数見つかるなど、当時の人々の広範囲の交流や、造形豊かで彼らの精神観に迫る貴重なものも含まれています。

こうした新たな発見を積み重ねていくことの重要性を再認識するとともに、本書をもってその全容をご報告できますことを誠に喜ばしく存じます。

教育委員会では、地域文化の特色を生かしながら、あらゆる機会と場所での生涯学習を目指す「白岡らしさの発見と創造」を目標に掲げております。この報告書が市民の皆様や学校等関係機関の方々に広く活用され、郷土白岡の再発見と埋蔵文化財保護の理解につながれば幸いに存じます。

最後に、今回の発掘調査及び報告書作成にあたり、事業主様や地域の方々には格別のご支援とご理解を賜りました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

白岡市教育委員会
教育長 福原良男

例 言

- 1 本書は、埼玉県白岡市内に所在する前田遺跡（第2地点）の発掘調査報告書である。
- 2 調査地点は、白岡町（当時）大字実ヶ谷字前田186-3である。
- 3 発掘調査は、白岡町教育委員会（当時）が主体となって実施した。調査費用および整理作業費用は白岡町教育委員会が負担し、一部は国庫及び県費補助金を受けて実施した。
- 4 調査期間は、平成11年5月24日から平成11年6月29日（国庫補助事業）である。
- 5 指示通知番号は、以下のとおりである。
発掘届は平成11年5月18日付け教委第250号で進達、発掘調査の指示は平成11年5月31日付け教文第3-138号で受けた。発掘調査通知は、平成11年5月24日付け教委第279号である。
- 6 発掘調査は、松崎 慶喜と奥野 麦生が担当した。
整理作業及び報告書作成作業は、奥野と杉山 和徳が担当した。
- 7 遺物の実測は、奥野が担当し、杉山と青木 美代子、増田 香織の補助を得た。
- 8 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱを杉山が、Ⅲ・Ⅳ・付編を奥野が担当した。
- 9 遺跡原点は、日本測地系平面直角座標第9系 $X = -63.000$ 、 $Y = -13,440.000$ である。使用した基準点は白岡町1級多角点8A コウ191 ($X = -137.582$ 、 $Y = -13,551.697$)、8A コウ988である。なお、巻末抄録の経緯度は遺跡原点を世界測地系に変換したものである。
- 10 本書で掲載した図版の縮尺は原則として以下のとおりである。
遺構：1/60 遺物：土器拓影図・石器実測図1/3、1/2、2/3、土器実測図1/3、1/4、1/6
- 11 挿図及び表中での遺構の表記は以下のとおり略号を用いた。
H：住居跡 SK：土坑 SD：溝跡 P：ピット
- 12 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、地権者である草薙 道子様のご御理解、御協力を得て実施した。また、下記の諸氏及び諸機関から御指導と御助言を賜った。
青木 秀雄、金子 直行、河井 伸一、小宮 雪晴、鈴木 敏昭、田中 和之、中野 達也、長谷川 清一、白岡市文化財保護委員会、東部地区文化財担当者会（50音順、敬称略）
- 13 発掘調査及び整理作業にあたっては、下記の方々のご参加協力を得た。
青木 美代子、石井 匠、石津 薫、桂 都、坂田 玲子、末次 雄一郎、高橋 安代、竹内 玖仁代、田中 玉緒、寺岡 あゆ美、鳥海 恵子、増田 香織、水沢 和子、渡邊 宏士朗、渡辺 英子（50音順、敬称略）
- 14 調査組織は以下のとおりである。
調査組織（平成25年度）
調査主体者 白岡市教育委員会
事務局 教 育 長 福原良男
教 育 部 長 黒須 誠
生涯学習課長 河野 彰
生涯学習課長補佐 黒須 靖之
学習支援担当/
文化振興担当主査 奥野 麦生（調査担当） 同主事 杉山 和徳（調査担当）

目 次

巻頭図版	(1) 住居跡	7	
序	(2) 土坑	7	
例言	(3) 溝	39	
目次	(4) ピット	40	
	(5) グリッド出土遺物	41	
I 調査の概要	1		
1 調査に至る経緯	1	IV 調査のまとめ	77
2 調査の経過	1	1 墓壙群の調査	77
II 立地と環境	2	付編 内田重郎氏寄贈資料	83
1 遺跡の立地と地理的環境	2	1 土器	83
2 歴史的環境	2	2 土製品	89
3 調査地点の概要	5	3 石器	89
III 調査の成果	7	写真図版	
1 遺構と遺物	7	報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 前田遺跡と周辺の遺跡分布図	3	第15図 土坑出土遺物 (5)	28
第2図 前田遺跡の位置と発掘調査区	4	第16図 土坑出土遺物 (6)	29
第3図 前田遺跡第2地点全測図	6	第17図 土坑出土遺物 (7)	30
第4図 第1号住居跡	8	第18図 土坑出土遺物 (8)	31
第5図 第1号住居跡出土遺物	9	第19図 土坑出土遺物 (9)	32
第6図 土坑実測図 (1)	10	第20図 土坑出土遺物 (10)	33
第7図 土坑実測図 (2)	12	第21図 土坑出土遺物 (11)・溝出土遺物	34
第8図 土坑実測図 (3)	15	第22図 土坑出土遺物 (12)	35
第9図 土坑実測図 (4)	19	第23図 土坑出土遺物 (13)	36
第10図 土坑実測図 (5)	22	第24図 溝・ピット実測図	38
第11図 土坑出土遺物 (1)	24	第25図 溝出土遺物	39
第12図 土坑出土遺物 (2)	25	第26図 ピット出土遺物	40
第13図 土坑出土遺物 (3)	26	第27図 調査区出土土器 (1)	42
第14図 土坑出土遺物 (4)	27	第28図 調査区出土土器 (2)	43

第29 図 調査区出土土器 (3)	44	第46 図 調査区出土土製品 (1)	66
第30 図 調査区出土土器 (4)	46	第47 図 調査区出土土製品 (2)	67
第31 図 調査区出土土器 (5)	47	第48 図 調査区出土土製品 (3)	68
第32 図 調査区出土土器 (6)	49	第49 図 調査区出土土製品 (4)	69
第33 図 調査区出土土器 (7)	50	第50 図 調査区出土土製品 (5)	70
第34 図 調査区出土土器 (8)	51	第51 図 調査区出土石器 (1)	73
第35 図 調査区出土土器 (9)	53	第52 図 調査区出土石器 (2)	74
第36 図 調査区出土土器 (10)	54	第53 図 調査区出土石器 (3)	75
第37 図 調査区出土土器 (11)	55	第54 図 墓壙群分類図	78
第38 図 調査区出土土器 (12)	56	第55 図 内田重郎氏寄贈資料 (1)	84
第39 図 調査区出土土器 (13)	58	第56 図 内田重郎氏寄贈資料 (2)	85
第40 図 調査区出土土器 (14)	59	第57 図 内田重郎氏寄贈資料 (3)	86
第41 図 調査区出土土器 (15)	60	第58 図 内田重郎氏寄贈資料 (4)	87
第42 図 調査区出土土器 (16)	62	第59 図 内田重郎氏寄贈資料 (5)	88
第43 図 調査区出土土器 (17)	63	第60 図 内田重郎氏寄贈資料 (6)	89
第44 図 調査区出土土器 (18)	64	第61 図 内田重郎氏寄贈資料 (7)	90
第45 図 調査区出土土器 (19)	65		

表 目 次

第 1 表 周辺遺跡地名表	4	第 4 表 調査区出土石器計測表	72
第 2 表 土坑出土石器計測表	37	第 5 表 前田遺跡墓壙一覽表	79
第 3 表 土製円盤計測表	71		

写真図版目次

卷頭図版1 第10号土坑遺物出土状況	状況・第6号土坑遺物出土状況・第4号土坑
卷頭図版2 第15号土坑遺物出土状況	
図版1 調査区遠景	図版4 第5・6号土坑・第8号土坑・第7号土坑・第14号土坑・第9号土坑遺物出土状況・第9号土坑
図版2 第1号住居跡・住居内土坑遺物出土状況 炉跡・第1号土坑・第1号土坑遺物出土状況	図版5 第10号土坑・第10号土坑遺物出土状況・第15号土坑遺物出土状況 (1)・(2)・第15号土坑
図版3 第2号土坑・第11号土坑遺物出土状況・第3・11・13号土坑・第5号土坑遺物出土	図版6 第15号土坑遺物出土状況 (3)・第18号

- 土坑・第16号土坑・第19号土坑遺物出土狀況・第19号土坑
- 図版7 第19号土坑遺物出土狀況・第20a・20b号土坑遺物出土狀況・第20a号土坑遺物出土狀況・第21号土坑・第21号土坑遺物出土狀況・第22号土坑～第24号土坑
- 図版8 第25号土坑・調査風景・墓壙群分布狀況・第1号住居跡出土土器(1)・(2)
- 図版9 第1～4号土坑出土土器・第1号土坑出土土器・第2号土坑出土土器・第5号土坑出土土器・第1・5号土坑出土土器
- 図版10 第5～8号土坑出土土器・第6号土坑出土土器(1)・(2)・第8号土坑出土土器・第9・10号土坑出土土器
- 図版11 第9号土坑出土土器・第10号土坑出土土器・第11～17号土坑出土土器
- 図版12 第10号土坑出土土器・第11号土坑出土土器(1)～(3)・第15・16・18号土坑出土土器・第15号土坑出土土器(1)
- 図版13 第15号土坑出土土器(2)・(3)・第18号土坑出土土器・第19～21号土坑出土土器
- 図版14 第19号土坑出土土器(1)～(3)・第20a号土坑出土土器(1)・(2)・第20b号土坑出土土器
- 図版15 第21号土坑出土土器・第22～25号土坑・第1号溝出土土器・土坑出土石器(1)・(2)
- 図版16 第1号溝出土石器・調査区出土土器(1)・(2)
- 図版17 調査区出土土器(3)～(5)
- 図版18 調査区出土土器(6)～(8)
- 図版19 調査区出土土器(9)～(11)
- 図版20 調査区出土土器(12)～(15)・調査区出土土製品(1)～(3)・調査区出土土器(1)
- 図版21 調査区出土石器(2)～(5)・内田氏寄贈資料(1)・(2)
- 図版22 内田氏寄贈資料(3)～(8)

I 調査の概要

1 調査に至る経緯

白岡市は埼玉県東部に位置する総面積24.88km²の市で、東西約10km、南北約6kmと東西方向に長い。市域の中央部を南北にJR宇都宮線（東北本線）、東北新幹線、東北自動車道等が貫き、JR白岡駅・新白岡駅周辺や主要地方道（県道）さいたま・栗橋線沿いに市街地が形成されている。一方で市街地外縁には水田や畑地、特産の梨の畑等が営まれ、水と緑の豊かな光景が広がる。

昭和29年に篠津村と大山村及び日勝村の3村合併により誕生した白岡町は、当初純農村的な町であったが、昭和33年の東北本線の電化、同40年代初頭の県道大宮・栗橋線（現さいたま・栗橋線）や国道122号など主要道の開通などをきっかけに、都心から40km圏内という地の利も手伝いベッドタウン化が顕著となった。平成以降は駅周辺にマンションや集合住宅が目立って増え、山林や農地は分譲宅地に姿を変えつつある。中高層のマンション開発も進み、今後も市域における開発の激化が予想される。

また、平成22年度には、市域北部で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）と東北自動車道を接続するジャンクション建設（久喜白岡ジャンクション）が完了し、交通網の発達が目ざましい。人口の増加を背景に、平成24年10月には市制を施行した。

このような情勢のなか、白岡市教育委員会では公共及び民間の開発事業と埋蔵文化財保護の調整に努めてきた。開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）に該当する場合は事前に試掘調査等を行い、遺跡の破壊が免れない場合には事前に発掘調査による記録保存を実施している。今回報告する前田遺跡（第2地点）の発掘調査は、以下の経緯で調整された。

2 調査の経過

前田遺跡第2地点の発掘調査は、個人住宅建設の計画に関する紹介を受け、平成11年4月22日に試掘調査を実施した。その結果、地下に埋蔵文化財の包蔵が確認され、表土の浅い部分では住宅建設による文化財への影響が免れないことから、原因者と協議のうえ国庫・県費補助事業として発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることとなった。

なお、建設予定地の旧地形は、南東へ向かって傾斜することが確認され保護層の確保が可能であるため、南東側の一部では盛土保存を併用することとした。

発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

平成11年5月24日	調査区北西側表土除去、周辺環境整備、基準杭設定
5月31日～6月16日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月18日	排土反転、調査区南東側表土除去
6月21日～28日	遺構確認、遺構掘削、写真撮影、実測作業
6月29日	調査終了

II 立地と環境

1 遺跡の立地と地理的環境

前田遺跡の位置する地域は、近世村名をとって実ヶ谷地区といわれ、地形的には大宮台地白岡支台の東縁部近くにあたる。白岡支台の北端は久喜市除堀付近から、当市の篠津地区、白岡地区、小久喜地区を経て、南端は蓮田市黒浜付近まで南北約9kmにわたって展開している。支台の東側に広がる沖積地は「日川筋」と呼ばれる利根川水系の旧河道である。西側には元荒川の沖積低地が広がっている。この白岡支台の特徴は、北部と南部で標高や低地との比高差が異なることである。北部では標高12m、低地との比高差は1mほどと低平なのに対し、南部では標高約15～16m、比高差5～6mと明瞭な崖線を形成する。これは埼玉県加須市を中心とする関東造盆地運動に起因するといわれている。また、支台の東縁と西縁の台地形状も対照的で、東縁は沖積低地との差が不明瞭なのに対し、西縁は支谷が発達し切り立った崖線を形成するという特徴がある。

当遺跡の載る白岡支台東縁部は、台地東側にあたる日川筋の沖積地に緩やかに没している。この日川筋は、大宮台地の白岡支台と慈恩寺支台とを隔てている。前田遺跡は日川筋から派生する支谷に南面した台地上の平坦部から、一部沖積低地を含む約80,000㎡に及ぶものと推測され、名実ともに周辺の代表的な縄文遺跡と呼べよう。

2 歴史的環境

大宮台地白岡支台上に展開する遺跡の内、前田遺跡周辺の代表的な遺跡を通時的に概観する。

旧石器時代の遺跡としては、ブロックこそ確認されていないものの、山遺跡をはじめ、入耕地遺跡やタタラ山遺跡及び南鬼窪氏館跡などで、ナイフ形石器や角錐状石器等が出土している。

縄文時代では早期から晩期までの遺跡がみられる。縄文時代早期燃糸文期では、タタラ山遺跡などで土器片が採集されている。続く沈線文期の遺跡は未確認であるものの、早期後半の条痕文期になると遺跡数、遺構確認例が急増する。山遺跡や茶屋遺跡、タタラ山遺跡で炉穴群や住居跡、竪穴状遺構が高密度で検出されるほか、蓮田市黒浜地区の天神前遺跡では、炉穴に伴ってハイガイ、マガキの貝層が検出されている。元荒川の谷への縄文海進の影響や、これに伴う生業活動である漁労への傾斜が窺われる。

縄文時代前期初頭の花積下層式期になると、タタラ山遺跡では50軒を超える住居跡や炉穴群が検出され、埼玉県下でも屈指の規模の集落であったことが明らかとなってきている。同遺跡の豊富な遺構、遺物量、ことに造形性豊かな石製ペンダント類の出土は、今後の該期文化の研究を強力に推進するものとなる。

前期後半になると、蓮田市黒浜地区の地点貝塚群が卓越するようになる。関山式後半から黒浜式期にかけて形成される貝塚を伴う集落が、大宮台地における該期の拠点の一つであったことに疑問を差し挟む余地はない。続く諸磯b式期になると、茶屋遺跡やタタラ山遺跡で住居跡や土坑等が検出されるものの、集落規模は縮小傾向にある。元荒川の谷に入り込んでいた「海」の後退を如実に物語っている。

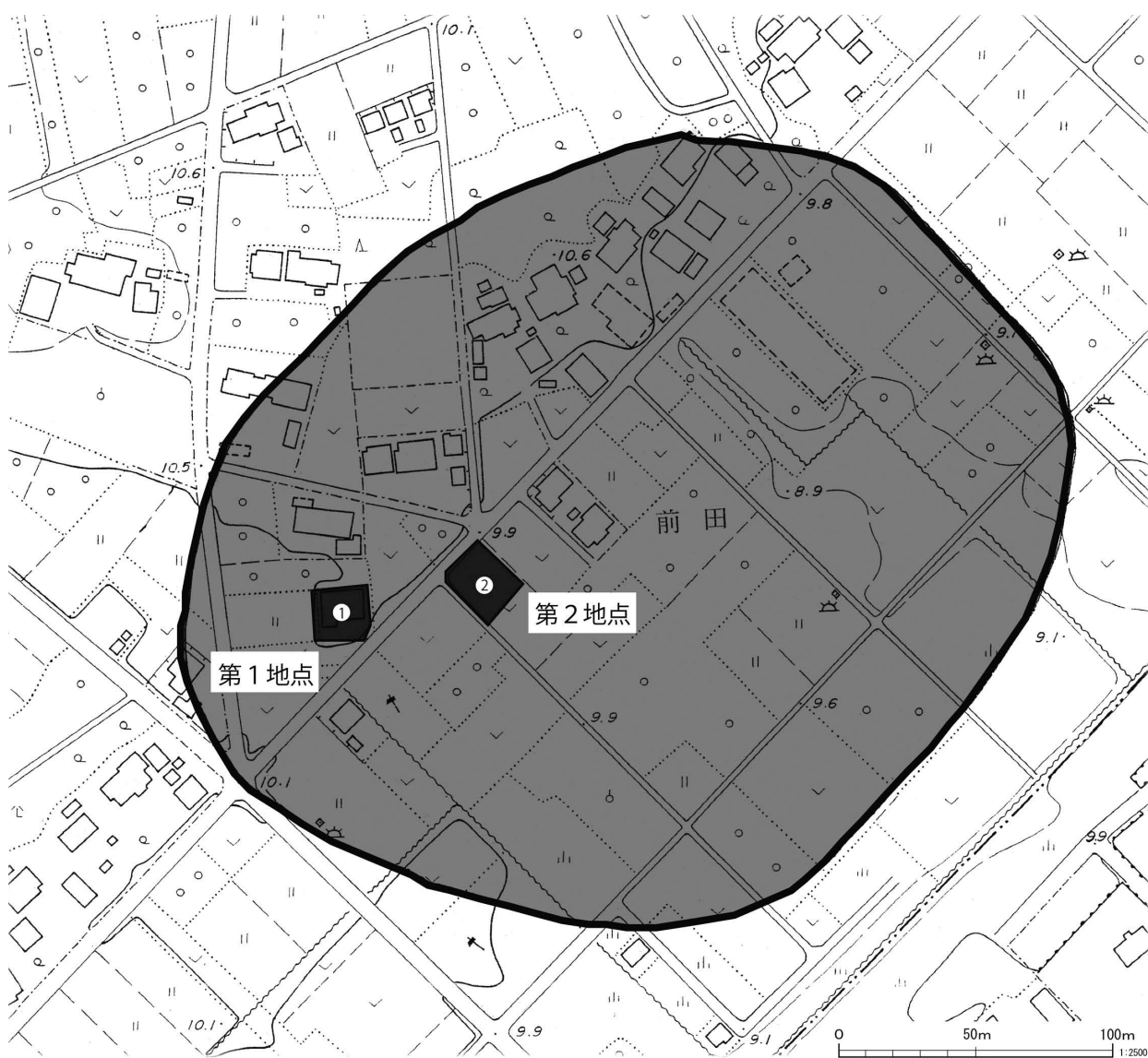
再び集落遺跡が確認されるようになるのは、縄文時代中期後半の加曾利E式期からで、市内では山遺跡をはじめ、タタラ山遺跡、沖山西遺跡などでも一定規模の集落の展開が明らかになっている。



第1図 前田遺跡と周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	時代	発掘調査(年度)
1	前田遺跡	実ケ谷字前田・東・寺裏	縄文中・後・晩	平成元・11
2	沖山遺跡	小久喜字沖山	縄文中	平成20
3	八幡遺跡	千駄野字八幡・迎	縄文中	
4	四ツ谷西遺跡	千駄野字四ツ谷	縄文中	
5	四ツ谷遺跡	千駄野字四ツ谷	古墳	
6	川端遺跡	実ケ谷字川端・西ノ谷	縄文中	
7	西ノ谷西遺跡	実ケ谷字西ノ谷	縄文前・中	
8	西ノ谷遺跡	実ケ谷字西ノ谷	縄文中、平安	
9	西山遺跡	実ケ谷字西山	縄文中	
10	宮前西遺跡	実ケ谷字宮前・川端	縄文前・中・後	
11	宮前遺跡	実ケ谷字宮前	縄文中	
12	東遺跡	実ケ谷字東	縄文中・晩、近世	
13	鶴巻遺跡	実ケ谷字鶴巻・東・宮前	縄文中、奈良、平安、中世	平成元・17
14	寺裏遺跡	実ケ谷字寺裏	縄文前・中・後、古代	

第1表 周辺遺跡地名表



第2図 前田遺跡の位置と発掘調査区

縄文時代後期から晩期になると、一遺跡において膨大な量の遺構や遺物を伴う事例が増える。前田遺跡自体がその代表例であるが、入耕地遺跡においても環状盛土遺構の存在が明らかになるとともに、数多くの遺物の出土が認められている。

弥生時代から古墳時代にかけては遺跡分布が希薄になる。奈良・平安時代も、新屋敷遺跡やタタラ山遺跡で数軒の住居跡が確認されるに留まるが、山遺跡や南鬼窪氏館跡、沖山西遺跡において8世紀末から9世紀代の炭焼窯が検出されている点が注目される。白岡支台における古代の鍛冶遺構の存在を窺わせる事例として、蓮田市の椿山遺跡や荒川附遺跡などの製鉄関連遺跡が存在する。また、大宮台地主台部の事例として伊奈町の大山遺跡において大規模な鍛冶炉が発見されている点も特筆される。

中世では、入耕地遺跡で堀に囲まれた14～16世紀の館跡とともに舶載陶磁器類をはじめとする中世遺物が多数出土している。白岡支台は中世の埼玉郡に属し、武蔵七党の野与党の有力一族、鬼窪氏が本貫地としたといわれる。遺跡近辺に存在する白岡八幡宮や正福院などは、その草創や社殿造営に同氏との関わりを伝承している。

3 調査地点の概要

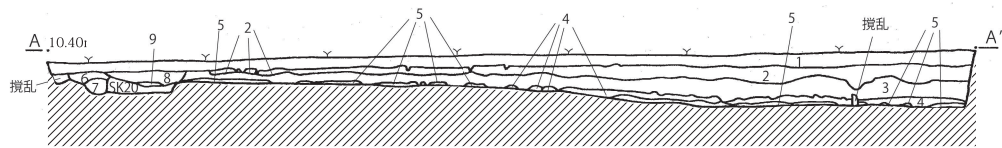
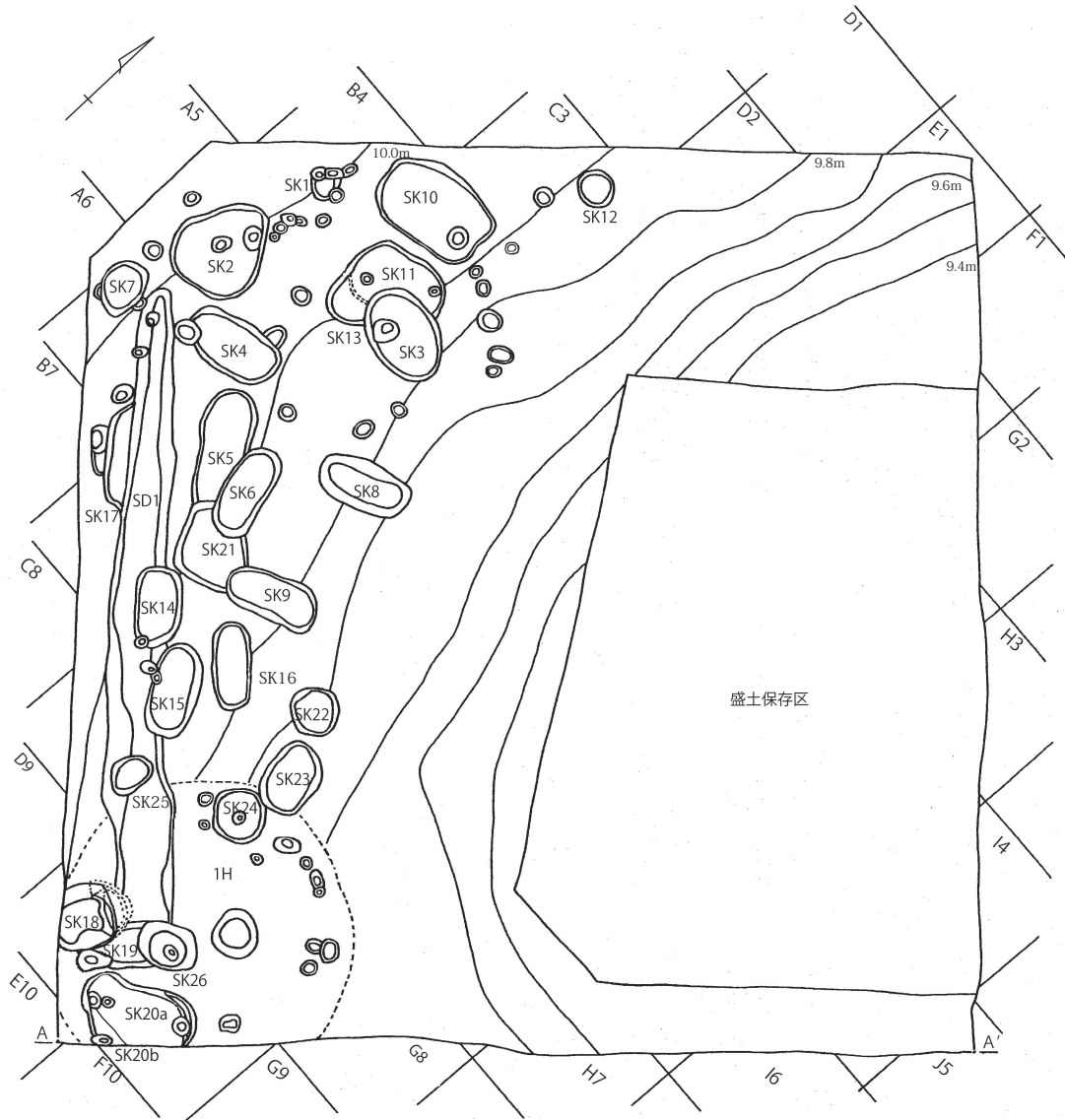
前田遺跡第2地点の現況は平坦な農地である。第1地点の調査区とは、市道を挟んで僅かに50mほどの距離である。第2地点調査区の南西側から第1地点調査区の西側にかけて埋没谷が形成されていることが把握されている。

今回の調査地点では、西隅では地表下20cmで遺構確認面のローム層が検出されたのに対し、東隅では深さ130cm以上にも達し、なだらかに東側に向かう傾斜があることが明らかとなった。第3図に示した等高線は緩やかな弧を描いており、第2地点調査区の東方に中心を置く直径60～80m程度の円形の窪地の存在を示唆しているようである。おそらく、この窪地を囲むようにいわゆる環状盛土が存在したのと思われる。今回の調査で検出された墓壙群はその内縁の盛土裾部に形成されていたと見ることができよう。

前田遺跡における遺跡の継続期間は、今回検出された第1号住居跡の形成される縄文中期の後半期を上限として晩期後半に及ぶことがわかる。

これは、今回付編として併せて報告した内田重郎氏の寄贈資料からも裏付けることができる。内田氏の耕作地は、第2地点調査区の南東100m足らずの位置に当たり、採集された資料は加曾利EⅢ式期から安行3d式期に及ぶ。第1地点では確認されたものの、第2地点の発掘調査で得られなかった堀之内1式期の良好な資料なども含まれている。

今回の調査範囲は、狭小であり出土遺物の主体をなす晩期安行式期の住居跡の形成された集落エリアがどこに当たるのかを把握することはできなかった。日川低地を挟んだ大宮台地慈恩寺支台に形成された清左衛門遺跡では、墓壙群に接して集落エリアが確認されており、前田遺跡でも近辺に同時期の集落が営まれていた可能性は低くないと思われるが、遺跡内でのゾーニングの復元は、環状盛土の規模や遺跡内での位置、あるいは、遺跡の西側を画すと思われる埋没谷等との関係を整理しながら今後総合的に検討すべき課題と言えそうである。



基本土層

- 1 暗灰褐色土 比較的多量の橙色粒子 (1~2mm) 及び、少量の灰白色粒子 (1~3mm) を含む。しまり良好。
- 2 暗茶褐色土 少量の橙色粒子及び、微量の灰白色粒子 (1~2mm) を含む。ややボソボソする層位。
- 3 黒褐色土 少量のローム粒子 (微~15mm) 及び骨片を含む。部分的にローム粒子が集中しブロック状 (30~40mm) を呈する部分あり。しまり良好。
- 4 暗茶褐色土 少量のローム粒子 (1~2mm) を含む。3層と同様なブロック状の部分が僅かにみられる。しまり良好。
- 5 褐色土 比較的多量のロームブロック (10~30mm) 及び、炭化物ブロック (10~30mm) を含む。しまり良好。
- 6 暗褐色土 少量のローム粒子 (1~20mm) を含む。しまり良好。
- 7 褐色土 比較的多量のローム粒子 (1~2mm) 及び、少量の炭化物粒子 (1~2mm) ・赤褐色粒子を含む。

- SD1

- 8 黒褐色土 少量のローム粒子 (1~20mm) 及び、微量の炭化物粒子 (微~1mm) を含む。しまり良好。
- 9 褐色土 比較的多量の炭化物粒子 (10~20mm) 及び、微量のローム微粒子を含む。しまり良好。

第3図 前田遺跡第2地点全測図

Ⅲ 調査の成果

1 遺構と遺物

(1) 住居跡

●第1号住居跡 (第4・5図)

調査区南端のE8・9、F8・9グリッドで検出された。住居跡の掘り込みは、後晩期の墓壙群の造営や環状盛土の形成などに伴う地形改変等によって、床面まで既に失われており情報量は多くない。炉跡、埋甕を伴う土坑及び弧状に展開するピット等から全体像を推測せざるを得なかった。

住居跡の推定規模は、直径6.4mから6.7m程度を測るものと思われ、炉跡と埋甕を結ぶ線の中軸とすると北東方向に出入り口を持つ構造と推定できる。

炉跡は、直径1m、短径0.9mほどの不整楕円形で、しっかりと火を受けた火床面は短径に沿うように展開していた。この部分では焼土の下のローム土の被熱硬化も明瞭に把握できた。

出入り口付近と思われる位置に形成された住居跡内土坑からは、小型のキャリパー型土器 (5図2) がやや傾きながら逆位で出土した。

本址に伴うと思われるピットは15基を数える。炉と出入り口を結ぶ中軸線の北西側に連なるP1、P4～P7及び、住居跡南東部に当たる20号土坑にかかるP12～P15等は壁柱穴の一部であろう。住居内土坑に近接するP8、P9は出入り口に付属する施設であろうか。やや小規模ながら位置的にはP3やP10等が主柱穴に当たる可能性がある。

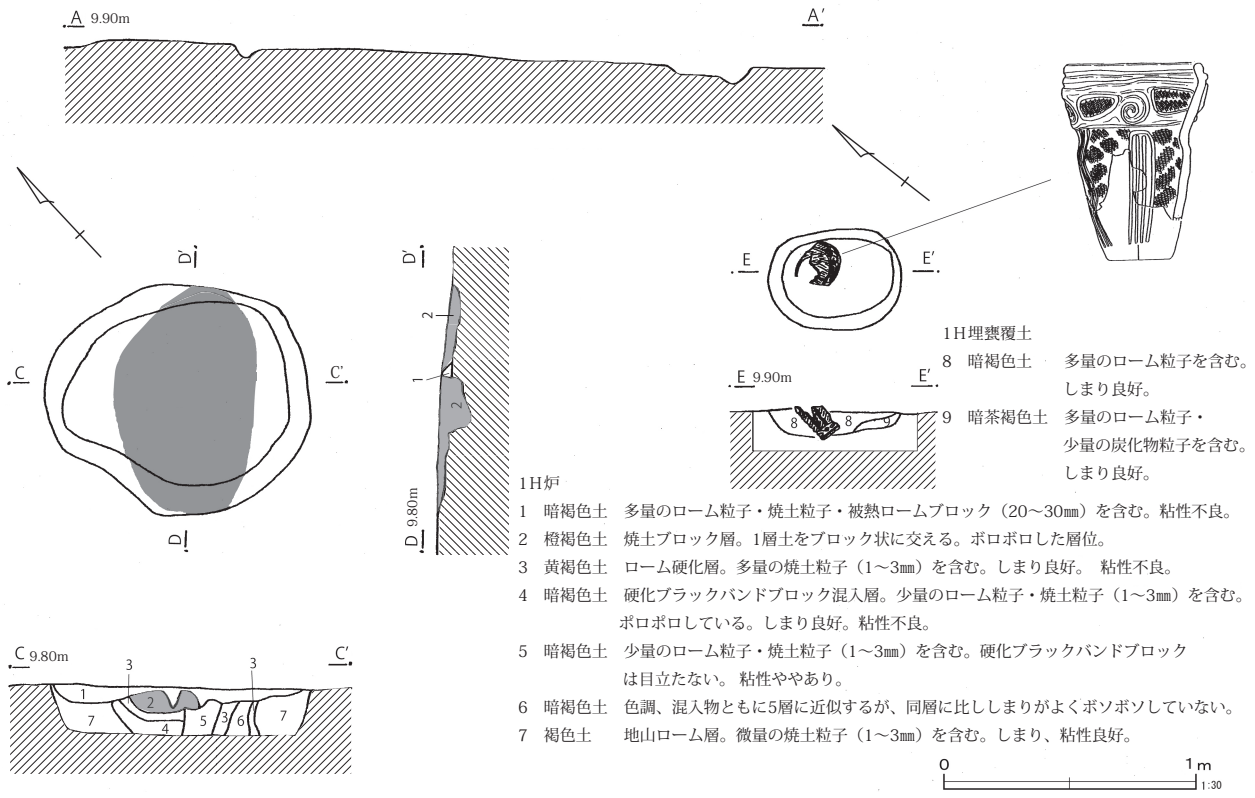
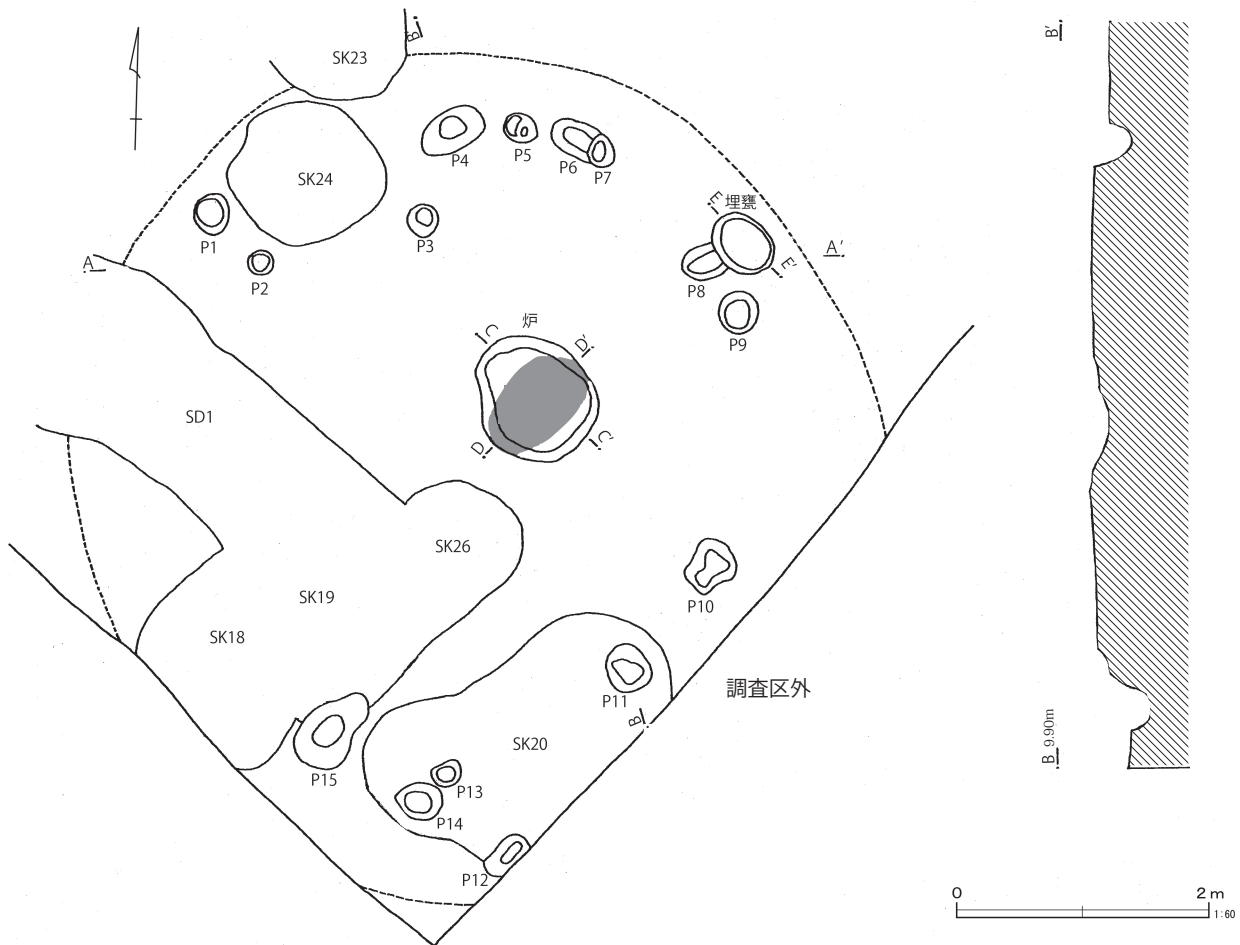
出土遺物 (第5図)

土器 1は、推定口径で、57cm、残存高36cmほどを図る大口径のキャリパー型深鉢の胴上半部資料である。口縁部は上下を隆帯で区画し、渦巻文と横位展開の楕円形の杵状文が展開するものと思われる。棒状施文具による縦位の沈線が充填される杵状文は、口唇部から斜行する隆帯によって区画される部位も認められる。頸部には無文帯が形成され、相互刺突文で上端を画す胴部は、頭部を蕨手状とする垂下沈線と蛇行隆帯によっていくつかに縦位分割される。地文は単節LR縄文を縦位回転させている。2は、住居内土坑からやや傾斜を持つ逆位で出土した小型のキャリパー形深鉢である。口径14.5cm、推定高22cmほどと思われる。口縁部には、不整楕円形の窓杵状文と隆帯による渦巻文が交互に展開する。1条の隆帯とこれに沿う沈線で区画された胴部には、2本の沈線に被せるようなキャップ状の沈線モチーフや3本1組の蛇行沈線が垂下する。地文は単節LRで、条が縦方向に現れるように斜位回転されている。3は、底径7cmを図る無文の底部資料、4は、横走する2条の単沈線間に2段の刺突列が観察される晩期安行式期後半の胴部資料であろう。

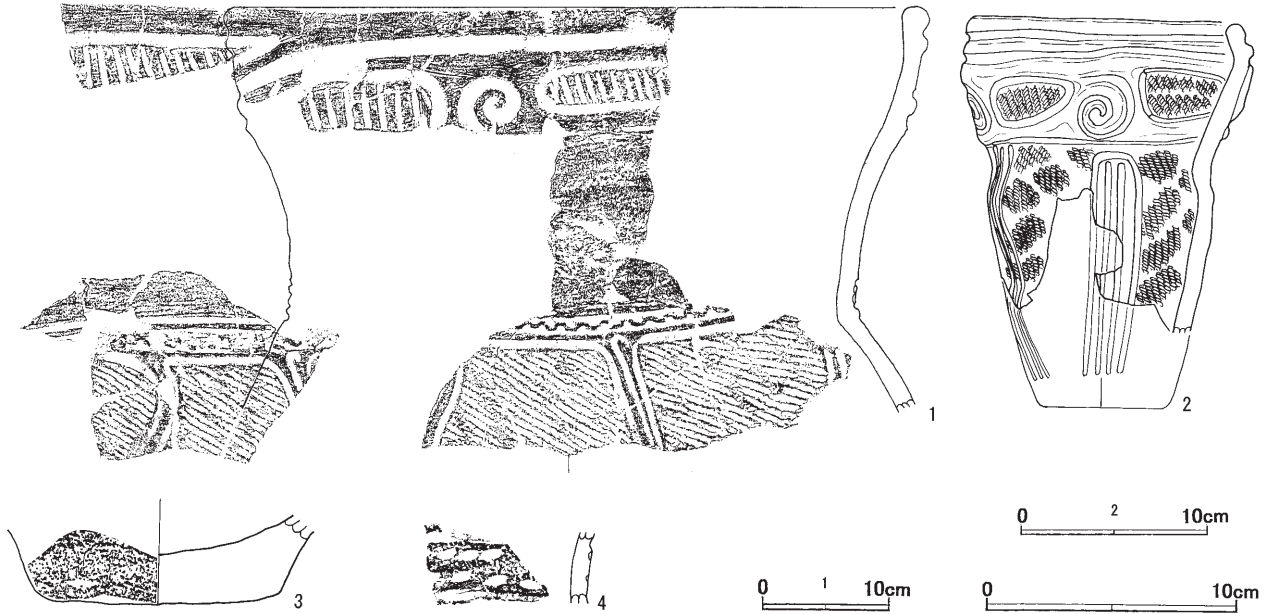
(2) 土坑

●第1号土坑 (第6・11・13図)

調査区北西のB4グリッドから検出された、比較的小規模な土坑である。数基のピットと切り合っており正確な規模は不明であるが、長軸0.8m、短軸0.6m、深さ0.2mほどを測る。底面は概ね平坦で、立ち上がりもしっかりとしたものである。ほぼ中央から、大洞式の注口土器と思われる大破片 (13図1) が出



第4図 第1号住居跡



第5図 第1号住居跡出土遺物

土した。

土器 第11図1、2は無文の胴部資料、3は底径4.5cmほどと推定される無文の底部資料である。

第13図1は、胴部最大径16.2cm、残存高11.5cmを測る大洞式系譜の注口土器または、小型の壺形土器と思われる。底部は丸底でやや厚みを持って安定感のある作りとなっており、きれいな曲線を描きながら立ち上がり、同上半に半肉彫りのやや崩れた羊歯状帯を形成する。無文となる頸部は極めて薄く整形され、外面はよく磨かれている。内面には指頭による横位のなでと底部からの立ち上がり部を中心とする押さえの痕跡が明瞭に残される。地文は細かな単節LR縄文で、基本的に1指幅で横位回転されている。

土製品 第11図4は径3.6cmほどの土製円盤で、1条の沈線と単節RL縄文の観察される土器片を素材としている。

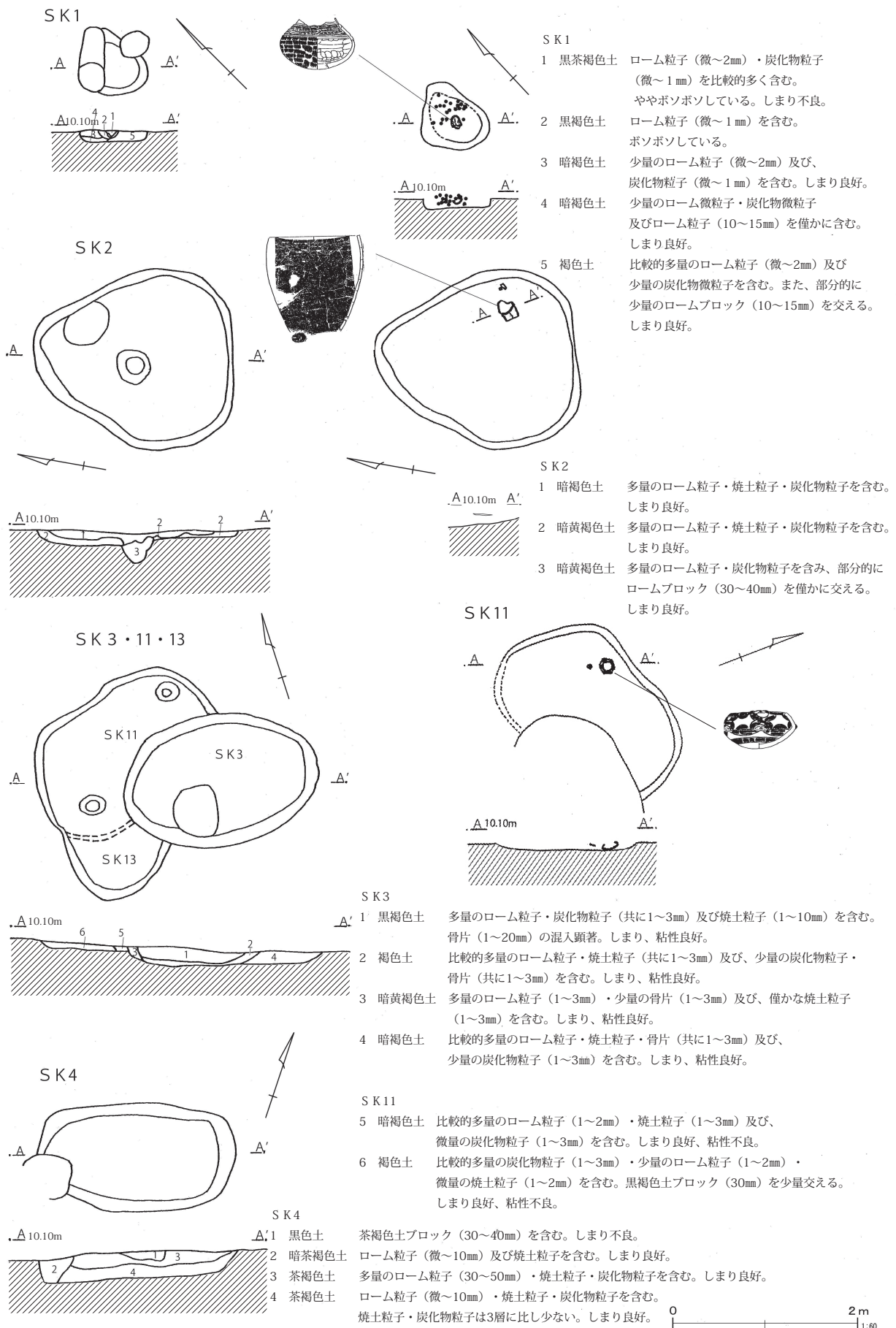
●第2号土坑 (第6・11・13・22図)

調査区西端のB5グリッドから検出されたもので、長軸2.2m、短軸2.0m、深さ0.2mほどを測る不整三角形の平面形状を成す。底面は概ね平坦で、中央付近に径0.35m、底面からの深さ0.25mほどの小穴を持つ。覆土には炭化物粒子が目立った。土坑東端から、無文の粗製土器が出土している。

土器 第11図5は、単節LR縄文の施された平縁の口縁部資料、6は、口唇外削とする無文の口縁部資料、7は、縄文地に曲線を描く2条の沈線が観察されるもの、8は、無文地に左下がりとなる曲線3条を見て取れる資料、9は、無文の胴部資料である。

第13図3は、口径26cm、残存高29cmを測る無文の深鉢形土器である。横位の輪積痕が消されずに残されやや凹凸がある。底部付近を欠くが、胴部から口縁部にかけては7割から8割程度遺存しており、同様の土坑に比較のみられる大破片を入れる事例ではないものと思われる。

石器 第22図1~4が該当する。1は、有茎石鏃である。先端部を僅かに欠損する。右側縁を中心に細かく丁寧な押圧剥離が観察される。2は、比較的厚みのある縦長の剥片を素材とする小型の石器である。打面側を基部とし、両側縁に調整加工を施す。第1地点調査報告(1998)において「石鏃様石器A類」としたものである。3も同様であるが、あるいは石錐である可能性も否定できない。4は、2次加工剥片である。



第6図 土坑実測図（1）

貝殻状の剥片を素材とし、打面を剥ぐように細かな2次加工を施している。

●第3号土坑（第6・11・22・46図）

調査区東端寄りのC4・C5グリッドで検出された、長軸2.2m、短軸1.4m、深さ0.25mほどを測る長楕円形の土坑である。中央南側をピットによって切られ、西半部で、第11号・第13号土坑を切っている。本址の覆土には焼けた骨片が多量に含まれており、切り合い関係の把握は容易に行うことができた。底面は概ね平坦で、東端の立ち上がりがややなだらかであるが概ね角度を持った明瞭な立ち上がりを示す。

土器 第11図10～39が該当する。10は、平縁で口縁に沿って巡る沈線と右下がりの沈線が見え、この間に縄文の充填される区画が窺えるものである。11は、口縁部に引かれた2条の沈線間に縦に引っ搔くような刺突が認められるもの、12は、口縁に斜めの貝殻腹縁による刺突が施され、刺突帯下端を1条の沈線で画すものである。13～16は、口縁部にやや幅のある沈線で直線や曲線三叉文等が描出されるものである。17～21は無文の口縁部資料で、18では輪積痕を意図的に残し、口唇部には円形の刺突列を配するものである。22は胴部に横走る沈線を引き、その上部にいわゆる細密沈線文の施されるもの、23～26は13～16等の一群の胴部に該当しよう。27は、2条の横走沈線間に刺突を配し以下に縄文を施すもの、28・29は、横走る2条の沈線間に刺突を施すもので、前者ではこの上部に沈線文帯があることが窺える。30は、細かな撚糸文を横位に施す薄手の土器、31は、右下がりの集合沈線の施されたもの、32～36は無文の胴部下半の資料、37・38は前者の底部資料である。

土製品 第11図39は、長径2.9cmほどを測る土製円盤で、横走る沈線を持つ土器片を素材としている。第46図1は、推定口径8cm、残存高4.5cmほどのミニチュア土器である。体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がるもので、口縁部がやや肥厚する。

石器 第22図5は、チャート製の2次加工剥片で、やや縦長の剥片を素材とし、打点と対向する辺に押圧剥離による2次加工を施している。

●第4号土坑（第6・11図）

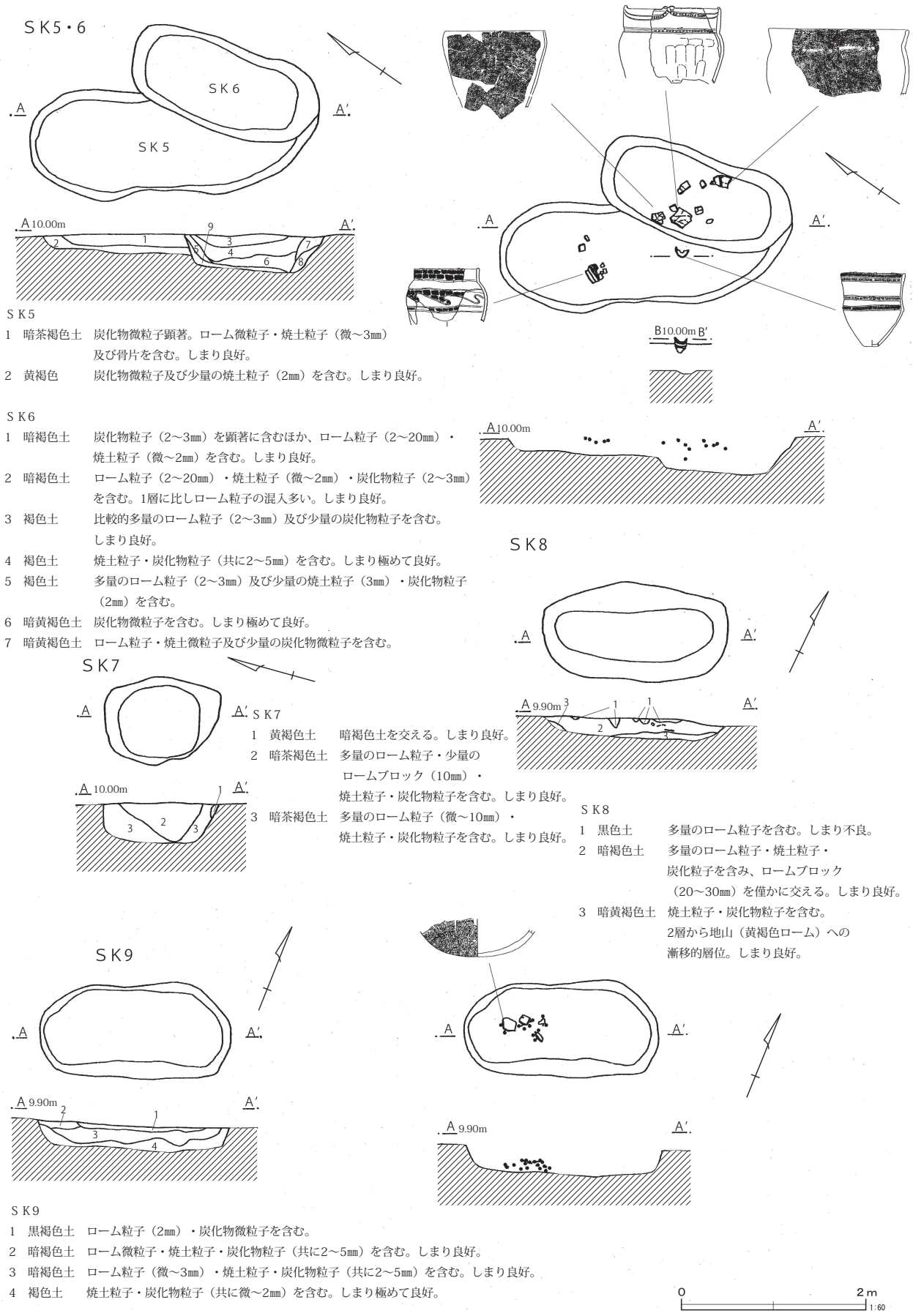
第2号土坑の南東、後述の第5号土坑の北西に位置する。長軸2.2m、短軸1.2m、深さ0.3mを測る隅丸長方形の土坑である。東端部をピットによって切られるが、土坑同士の重複は認められない。底面は平坦で、立ち上がりは、東辺でややなだらかに開くものの、残る3辺は角度を持って直線的に立ち上がる。

土器 第11図40～43が該当する。40は、外反する口縁部資料で、口縁部に沿って刻みを持つ隆帯が施される。後期前葉の資料である。41は、緩波状縁を呈する浅鉢の口縁部資料で、口縁に沿う刺突文帯と三叉状入組文が看取される。42は、連弧文の末端を見ることのできる胴部資料、43は、横位によくなでられた無文の胴部資料である。

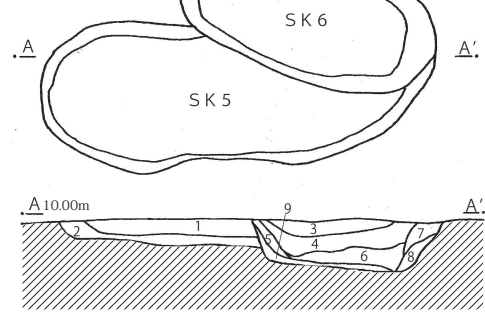
●第5号土坑（第7・12・13・22図）

調査区西寄りのC7グリッド付近で検出された、長軸3m、短軸1.2m、深さ0.2mほどの長楕円形の土坑で、南東側を後述の第6号土坑に切られる。底面はやや南東側が低くなるものの概ね平坦で、やや開き気味に立ち上がる。土坑北東寄りから広口の壺形土器の大破片が、中央やや南寄りから小型の深鉢形土器が出土した。

土器 第12図1～10と第13図4・5が該当する。12図1は、内湾する口縁部資料で、口縁部に沿う帯縄文や丈の高い貼瘤がみられるもの、2は、口縁に沿う細密沈線帯がみられる資料で、口唇部には棒状施文具を押しあてたような刻みが残される。3は、右下がりの刺突文帯がみられる口縁部資料、4は、レンズ状



SK5・6

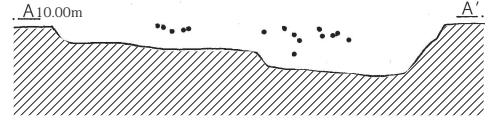


SK5

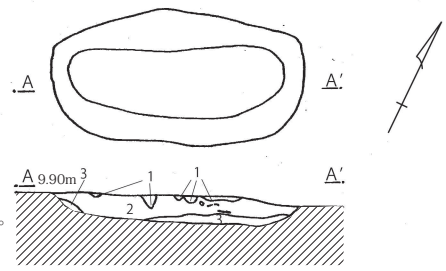
- 1 暗茶褐色土 炭化物微粒子顕著。ローム微粒子・焼土粒子（微～3mm）及び骨片を含む。しまり良好。
- 2 黄褐色 炭化物微粒子及び少量の焼土粒子（2mm）を含む。しまり良好。

SK6

- 1 暗褐色土 炭化物粒子（2～3mm）を顕著に含むほか、ローム粒子（2～20mm）・焼土粒子（微～2mm）を含む。しまり良好。
- 2 暗褐色土 ローム粒子（2～20mm）・焼土粒子（微～2mm）・炭化物粒子（2～3mm）を含む。1層に比しローム粒子の混入多い。しまり良好。
- 3 褐色土 比較的多量のローム粒子（2～3mm）及び少量の炭化物粒子を含む。しまり良好。
- 4 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子（共に2～5mm）を含む。しまり極めて良好。
- 5 褐色土 多量のローム粒子（2～3mm）及び少量の焼土粒子（3mm）・炭化物粒子（2mm）を含む。
- 6 暗黄褐色土 炭化物微粒子を含む。しまり極めて良好。
- 7 暗黄褐色土 ローム粒子・焼土微粒子及び少量の炭化物微粒子を含む。



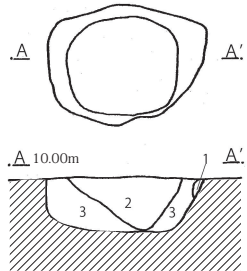
SK8



SK8

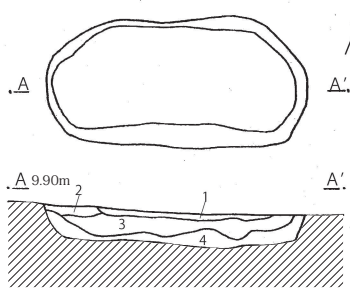
- 1 黒色土 多量のローム粒子を含む。しまり不良。
- 2 暗褐色土 多量のローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含み、ロームブロック（20～30mm）を僅かに交える。しまり良好。
- 3 暗黄褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を含む。2層から地山（黄褐色ローム）への漸移的層位。しまり良好。

SK7



- SK7
- 1 黄褐色土 暗褐色土を交える。しまり良好。
 - 2 暗茶褐色土 多量のローム粒子・少量のロームブロック（10mm）・焼土粒子・炭化物粒子を含む。しまり良好。
 - 3 暗茶褐色土 多量のローム粒子（微～10mm）・焼土粒子・炭化物粒子を含む。しまり良好。

SK9



SK9

- 1 黒褐色土 ローム粒子（2mm）・炭化物微粒子を含む。
- 2 暗褐色土 ローム微粒子・焼土粒子・炭化物粒子（共に2～5mm）を含む。しまり良好。
- 3 暗褐色土 ローム粒子（微～3mm）・焼土粒子・炭化物粒子（共に2～5mm）を含む。しまり良好。
- 4 褐色土 焼土粒子・炭化物粒子（共に微～2mm）を含む。しまり極めて良好。



第7図 土坑実測図 (2)

の沈線が引かれる口縁部資料である。5・6は無文の口縁部資料で、後者は、推定口径5.5cmほどの小型の資料である。7は、刺突文帯の窺われる胴部資料、8・9は細密沈線の施される胴部資料、10は、無文粗製の深鉢の胴下半資料である。

第13図4は、口径14cm、推定高16cmを測る小型の深鉢形土器で、本址中央南寄りの覆土中から正位で出土した。口縁部と胴部に単節LR縄文を施す帯縄文を持ち、口縁部縄文帯直下と括れ部に刺突文帯を持つ。口唇部には丈の低い突起が3単位施される。無文部は丁寧に整形される。胎土は洗練され、きめの細かい砂粒を少量含む。焼成も良好で全体に黒褐色を呈する。5は、推定口径19cm、残存高15cmほどの広口の壺形土器である。直立する口縁部には、単節LR縄文が施される。頸部は1条の沈線で画され、内湾する肩部は無文とされ、よくなでられている。胴部には横S字状沈線をつなげた波状の沈線を引き上部には単節LR縄文を充填している。胴部文様帯下端区画となる縄文帯にも上2帯と同様の縄文が充填される。焼成は極めて良好である。

石器 第22図6～9が本址出土の石器である。6・7は、チャート製の2次加工剥片で、やや縦長の剥片を素材とし、打点と対向する辺に押圧剥離による2次加工を施している。8は石錐である。不整縦長剥片を素材とし、打点と対向する1辺に押圧剥離による2次加工を施し錐部を作り出している。9は先端部を欠損する無茎石鏃である。基部の抉入はほとんど見られず、僅かに窪む程度である。

●第6号土坑（第7・11・13図）

第5号土坑を切って構築された、長軸2.2m、短軸1.0m、0.4mを測る隅丸長方形の土坑である。底面はやや南に傾斜するものの概ね平坦で、立ち上がりは、角度を持って直線的に立ち上がる。土坑中央付近からまとまって遺物の出土を見た。

土器 第12図11～22と第13図6～8が該当する。11は、波状縁浅鉢の口縁部資料である。波頂部には粘土紐を複雑に貼付し加飾する。12は、「く」の字に屈曲する壺形土器の口縁部である。口縁部内側はやや内湾気味に立ち上がる。13は、振幅の大きな鋸歯文のみられる口縁部資料で、口唇部には彫りの深い沈線が引かれる。14は、推定底径13cmを測る無文の底部資料、15は、口縁部に沿う刺突文帯の施された平縁資料で、口唇部には細かな刻みがみられる。16～18は大洞式系の土器群で、16は半肉彫りの梯子状の沈線が観察されるもの、17・18は雲形文に類する磨消縄文のみられる資料である。19は、ステッキ状入組文のみられる広口壺の胴部資料、20は、レンズ状の沈線文の描かれた胴部資料である。21・22は無文の底部資料である。後者は、急速にすばまる安行式に特徴的な底部形態を示す。

第13図6は、平縁の深鉢形土器で、口唇部に双頭の突起が4単位付される。突起を起点として弧状の刺突文帯が口縁部を巡り、頸部にも同様の刺突文帯が巡る。丸みを持つ胴部は篋状工具によって粗くなでられたような整形痕を残す。推定口径は28cm、残存高は22cmである。7は、推定口径28cm、残存高25cmを測る無文の粗製深鉢である。底部を欠くが、胴下半部から直線的に立ち上がり口縁部に至りゆるく内湾する。8は、推定口径40cm、残存高20cmを測る深鉢形土器で、球胴と外反する口縁部を持つ。器面は丁寧に磨かれ、黒色を呈する。

土製品 第12図23・24は土製円盤で前者は長径3cmを測り、1条の沈線と単節縄文の施されたもの、後者は、1条の沈線と刺突のみられるものである。

石器 本址出土の石器は、第22図10～12である。10・11は、チャート製の2次加工剥片で、打点と対向する1辺に調整加工を施す一群に含まれる。後者は、やや厚みがあり打点を切除するとともに右側縁にも

加工を施す点で10などとはやや趣を異にする。12は、やや厚みのある横長の剥片を素材とし、両側縁に押圧剥離による丁寧な調整加工を施し先端を尖らせるもので、第1地点調査報告（1998）において「石鏃様石器B類」としたものである。

●第7号土坑（第7・12・22図）

調査区西端のB6グリッドに位置する、比較的小型の土坑で、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.5mほどの土坑である。底面の形状は1辺0.8mほどの隅丸方形とみえる。底面は平坦で、立ち上がりは四辺ややばらつきがあるもののやや南北方向に広がり気味に立ち上がる。

土器 第12図25は、横位のなでの上に刺突列を施した口縁部資料で地文は単節LR縄文である。26は、無文の胴部資料である。

石器 第22図13は、2次加工剥片であるが、石錐未成品である可能性が高い。チャート製の不規則剥片を素材とし、正面は、両側縁からソフトハンマーによって加撃し脚の長い剥離を重ねるとともに縁辺には押圧剥離による規則的な調整加工を施し錐部を作り出している。

●第8号土坑（第7・12・14・22図）

土坑群の中では、最も東寄りのD5・D6グリッド付近で確認されたもので、長軸2.0m、短軸1.1m、深さ0.3mほどを測る長楕円形の土坑である。底面は概ね平坦で、周囲は開き気味になだらかに立ち上がる。

土器 第12図27は、大波状縁となる波頂部資料で波頂部に沿う沈線と刺突列が観察されるほか、鉢巻状の粘土紐が付される。28は、2条の沈線が垂下する口縁部資料、29は、口縁部がやや屈曲する無文の資料、30は、胴部に引かれた横走沈線とこれを起点とする弧線との間に刺突を充填するもの、31は、やや右に傾斜する集合沈線がみられるものである。

第14図1は、推定口径28cm、残存高26cmを測る粗製の深鉢形土器である。口縁部は緩やかに内湾する。全体に2～3cm単位の輪積痕を顕著に残す。同上半は横位の、下半は縦位のなでが加えられる。胎土には、1mm～5mm程度の鮮やかな茶褐色の粒子を多量に含む。

土製品 第12図32は、長径2.8cmを測る土製円盤である。縦位の沈線が引かれた土器片を素材とする。

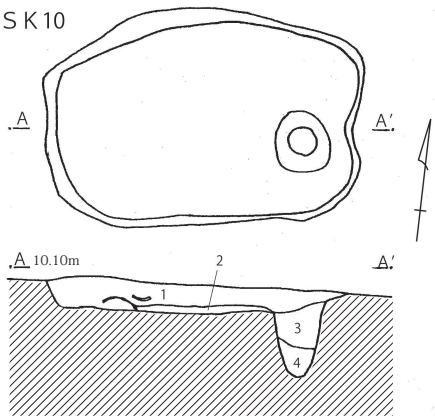
石器 第22図14～17が本址出土資料に該当する。14・15は石鏃で、前者は、右側縁方向に打点を持つ横長の剥片を素材とするもので、表裏に素材剥片の主剥離面を残す。調整加工は周縁部からの丁寧な押圧剥離による。基部の抉入は浅い。後者は、凹基無茎石鏃の脚部とみられる。製作途中での欠損品であろうか。16は、チャート製の2次加工剥片で、縦長の素材剥片の打点、打瘤を除去するように丁寧な調整加工を施すほか、正面右側縁にも細かな押圧剥離を加える。先端を作り出していることから、石鏃様石器A類に分類できる。17は、定角式磨製石斧の残欠である。

●第9号土坑（第7・14・15・22図）

調査区中央西寄りのD6・D7グリッド付近に位置する、長軸2.1m、短軸1.0m、深さ0.35mほどを測る長楕円形の土坑である。底面は概ね平坦で、やや湾曲しながら立ち上がる。土坑西寄りからややまとまって遺物が出土した。復元可能な個体資料こそ含まれていないが、15図27の無文の大型の底部資料は、皿に見立てた資料であるものと思われる。

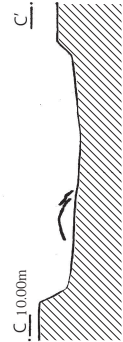
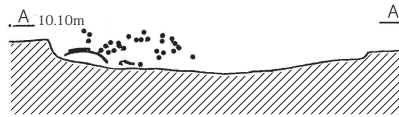
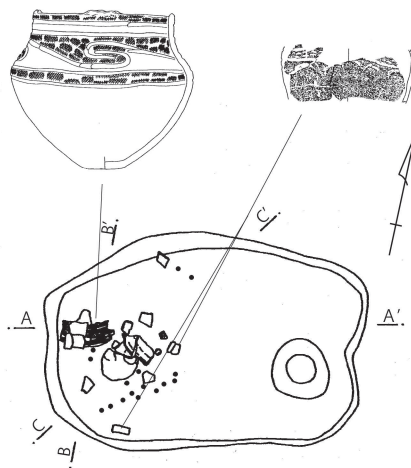
土器 第14図3は、推定口径18.5cm、残存高5cmを測る広口壺形土器の口縁部資料である。外反する口縁部には、刺突文帯による縦位分割が4単位で施されるものと思われる。この縦位分割を挟むように弧線が向き合い、この間隙を埋めるように口縁部から下向きの三角形区画が設けられる。いずれの区画内も刺突

SK 10

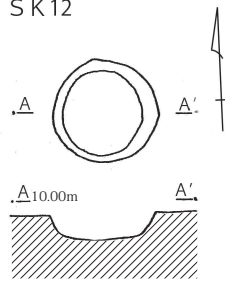


SK 10

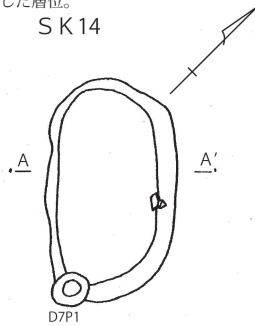
- 1 暗褐色土 比較的多量のローム粒子（微～2mm）及び、少量の焼土粒子・炭化物粒子（共に微～1mm）を含む。しまり良好。
- 2 暗褐色土 比較的多量のロームブロック（10～20mm）及び、焼土粒子を僅かに含む。しまり良好。
- 3 暗茶褐色土 比較的多量のローム粒子・焼土粒子（共に微～3mm）・少量の炭化物微粒子を含む。しまり良好。
- 4 暗褐色土 微量のローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。含有物が比較的小さい安定した層位。



SK 12



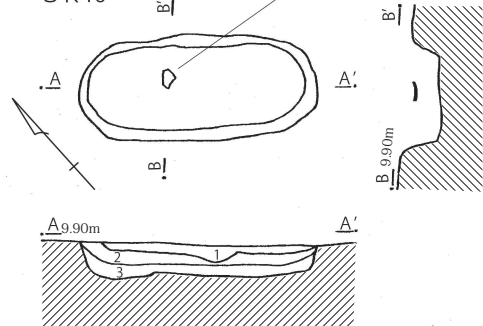
SK 14



SK 14

- 1 暗褐色土 焼土微粒子・炭化物粒子（微～2mm）を含む。しまりやや不良。
- 2 褐色土 焼土粒子（2～10mm）顕著。ローム粒子・炭化物粒子（共に2～5mm）を含む。しまり良好。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子（2～10mm）・焼土粒子（微～3mm）・炭化物粒子（2～3mm）を含む。しまり極めて良好。

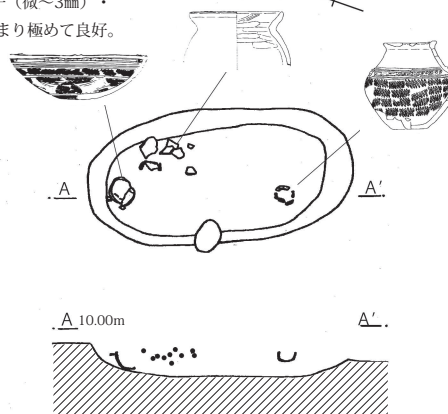
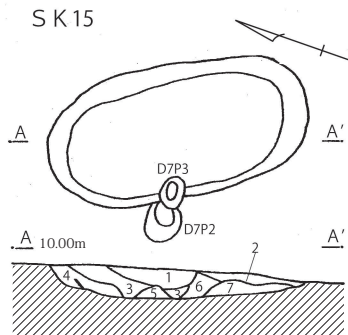
SK 16



SK 16

- 1 暗茶褐色土 極めて多量のローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子を含む。しまり良好。
- 2 暗茶褐色土 多量のローム粒子（微～10mm）・炭化物粒子（3mm）を含む。炭化物粒子は1層に比し大粒。しまり良好。
- 3 茶褐色土 焼土粒子・微量のローム粒子・炭化物粒を含む。しまり良好。

SK 15



SK 15

- 1 暗灰褐色土 ローム粒子（2mm）・焼土微粒子・炭化物粒子（微～2mm）を含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子（微～5mm）を含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子（共に微～2mm）を含むしまり良好。
- 4 褐色土 少量の焼土粒子（2～3mm）・炭化物粒子（2mm）を含む。しまり極めて良好。
- 5 暗黄褐色土 多量のローム土から構成され、3層ブロック・炭化物粒子（2～3mm）を含む。
- 6 褐色土 4層に近似するが、炭化物粒子（微～3mm）が顕著。しまり良好。
- 7 茶褐色土 ローム粒子（2mm）・焼土粒子（微～3mm）を含む。炭化物粒子は目立たない。しまり極めて良好。



第8図 土坑実測図 (3)

が施される。外面には炭化物の付着が顕著である。

第15図は1~30が本址出土土器である。1・2は細密沈線文の充填される口縁部資料で、前者では、僅かに膨らむ口唇部に5条の刻みが付される。18・19はこれらの胴部資料である。3は、1・2と類似する構成で縄文の充填されるもので、20はその胴部である。4~7は沈線文の引かれた口縁部資料で、4は、緩波状縁となるものと思われ、波底部には中央に刺突を施す円文がみられる。8は、横位に整形された口縁部に刺突列が巡るもの、10~12は外反する口縁部無文帯の下端を沈線で縁取る刺突文帯で画すもので、15もこれに類する資料であろう。9と14は無文の口縁部資料である。13は、砲弾形深鉢の内湾する口縁部資料である。16は、横走隆帯のみられる資料で、その上下にはいわゆる角押文がみられることから、縄文中期前葉の資料であるものと思われる。17・21は、刺突文帯のみられる胴部資料、22は2条の横走沈線で下端を閉じられた文様帯の中に縄文の充填された曲線モチーフが窺われる。23は沈線と半肉彫り風の隆線が重畳する大洞式系譜の小破片である。24~30は無文の資料である。27は、大型の丸底の底部資料である。表裏とも粗い横位のなでが施される。28は、推定口径9cm、残存高6cmほどの小型の壺形土器である。口縁部は外反する。

土製品 第15図31・32は、土器片素材の土製円盤である。いずれも無文で、後者はやや内湾する。

石器 第22図18~23が該当する。18・19は2次加工剥片で打点に対向する辺に2次加工を施す。20~22は、チャート製の縦長剥片を素材とし、1側縁に押圧剥離による細かな調整加工を施すもの、23は横長剥片を素材とし、2側縁に調整加工を施したものである。

●第10号土坑（第8・14・15・16・22・23・51図）

調査区北西部B4・C4グリッド付近に位置する比較的大型の土坑である。長軸2.4m、短軸1.7m、深さ0.3mを測る。土坑東端に径0.45m、深さ0.5mほどの小穴が穿たれている。この小穴付近の東辺がやや内側にたわむ傾向がみられるが、覆土の状況から複数基の重複等の兆候は見なれなかったため比較幅のある1基の土坑と認識した。底面は中央が僅かに窪むものの概ね平坦で、立ち上がりは東側がやや開き気味となるほかは直線的に立ち上がる。土坑西端からは数個体の土器がまとまって出土している。

土器 第14図2は、推定口径19cm、器高8cmを測る浅鉢形土器である。口縁部と底部に横走する刺突文帯を配し、この間に横位に展開する「S」字状に入組む刺突文帯が配される。底面にも弧線に縁取られた刺突文帯がみられる。4は、推定胴径28cm、残存高12cmほどの胴部資料で、胴部最大径付近に横位展開する刺突文帯とその下の連弧文の窺える資料である。5は、口径29.5cm、胴部最大径38.5cm、器高33cmを測る広口の壺形土器である。直立する口縁部と最大径を測る胴部付近に縄文帯を配し、内傾する頸部に幅の広い沈線で「S」字状入組文を施す。入組文の上部には縄文が充填される。

第15図33は、振幅の大きな波状縁土器の波頂部資料で、鉢巻状の隆帯のほか両脇にも口唇部をまたぐように粘土紐による加飾が施される。34は、縄文帯を持つ内傾する口縁部、35・36は、刺突文帯の窺われる口縁部資料である。37は、口縁部に先の尖った篋状施文具によって刺突文列を施す波状縁の土器で口唇部には刻みが施される。緻密な胎土で薄く焼成の良好な資料である。38は無文の口縁部下端を画す横走沈線の下に円文やレンズ状文の配されるもの、39~41は、三叉状の入組文が施されると思われる一群、42は、「く」の字に屈曲する無文の口縁部を持つもの、43は、砲弾形の胴部を持つ深鉢の内傾する口縁部、44・47は無文となる口縁部資料、49は外傾する口縁部と球胴を持つ広口壺である。48は、双刺瘤のみられる胴部資料、45は、半肉彫りの沈線の引かれる小破片、46・52・53は帯縄文のみられる大洞系の土器群、

50は、刺突文帯による縦位分割線の窺われる胴部資料、51は、胴部文様帯の下端区画となる刺突文帯の窺われる資料である。

第16図1は、口縁部に太めの沈線で三叉状入組文が2段に施される深鉢形土器、2は、口縁部に5条の沈線を施し、半肉彫り状の刺突を施す大洞系の土器、3・4は無文の底部資料である。

土製品 第16図5～17は、土器片を素材とする土製円盤で、10は、底部付近の破片を素材とする厚手のもの、15は、素材破片の沈線文が窺われる資料である。

石器 第22図24～33、第23図1～3が該当する。24・25・1・2は2次加工剥片である。25は、不規則な横長剥片を素材とする三角形の資料で、3辺に2次加工が施される。26・27・31は縦長剥片を素材とし2側縁に調整加工を施す一群、29・30は縦長剥片を素材とし2側縁に調整加工を施すもの、3は横長剥片を素材とし1側縁に調整加工を施すものである。28・32・33は多角錐状となり素材剥片の向きを把握できないが、周囲の1側縁ないし2側縁に調整加工を施し尖頭状をなすものである。

第51図1はチャート製の石核である。表裏に節裏面を残し、左側縁を中心に裏面を打面とした剥片剥離作業が始められている。107.2gを測る。

●第11号土坑（第6・16・17・23図）

C4・C5グリッドに位置し、第3号土坑に切られると同時に第13号土坑とも重複関係を持つ。長軸2.2m、短軸1.4m、深さ0.2mほどの浅い土坑である。底面は平坦で、立ち上がりはやや開き気味で直線的なものである。土坑中央北寄りから小型ながら完存する浅鉢形土器（17図1）が出土している。

土器 第16図18は垂下する3条の沈線と、そこから横位に派生する4条の弧線がみられるもの、19は垂下する2条の沈線が窺われる胴下半部の資料である。両者とも後期前半の資料であろうか。

第17図1は、口径12cm、胴部最大径16cm、器高8cmを測り完存する算盤玉状の浅鉢である。口唇部は角頭状をなし、底部は丸底を呈する。口縁部に沿って1条の沈線を配し帯縄文とし、胴部最大径に合わせて引かれた沈線で口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画する。胴部区画線に合わせ双頭の貼瘤を配し、上下の文様の起点としている。胴下半には器面を1周する帯縄文が施される。内傾する口縁部文様帯は、3頭となる突起と中央に配された三叉文を軸に展開するA～Fの6単位の雲形文由来の対弧状モチーフと、その間隙を埋め、上下の区画線と接する弧状モチーフによって構成される。対弧状モチーフAは、口唇部の突起と三叉文の配置がB～Fの構成と大きく異なる部分である。両脇に配され胴部沈線に接する伏せた弧線文には双方とも縄文が充填される。BとCは同様の構造を持ち、対弧状モチーフと両脇に縄文の充填される伏せた弧線文という構造である。Aと対向するDでは、対弧状モチーフの右側の伏せた弧線文には縄文が充填されることがわかる。Eでは、対弧状モチーフの両脇の弧線文ともに縄文が充填されない。そしてFでは、Eとの間となる対弧状モチーフ左側の弧線文には縄文が充填されない。また右側Aとの間では、口縁部縄文帯の下端区画線に接して上を向く縄文の施された弧線文が見受けられる。AとDを結んだ線を引くと右側となるA－D間がモデルであるのに対しD－A間は「崩し」であり、巨視的にはこの2面構造だとみることができる。しかし本資料には明確な縦位分割線がないため、文様単位をどこで区切るかによって解釈が異なることになる。むしろそれが本資料の文様帯構造の本質であるともいえ、文様単位の区切り方による連鎖構造を形成しているとみることが可能である。そして、この連鎖構造をすべてひとくくりに行っているのが口縁部の突起であり、1周すべてで1単位であると主張しているのかのごとくに受け取れる。

石器 第23図4は、横長剥片を素材とし、2側縁に調整加工を施すものである。

●第12号土坑（第8・16図）

調査区北部のC3グリッド付近で検出された小型円形の土坑である。径0.8m、深さ0.2mほどを測る。規模や形状から一連の墓壙群とは一線を画すものである可能性が高い。遺物も少量で判然としないが、縄文時代の所産であろう。

土器 第16図20は、無文となる口縁部の下に縄文帯の施される資料である。21は、意図的に輪積みを残す粗製土器の内傾する口縁部資料である。

●第13号土坑（第6・16・23図）

C4・C5グリッドに位置し、第3号土坑に切られる土坑である。南側の一部が残存するにとどまっており、明確な規模は把握できなかった。第11号土坑との先後関係に関する調査時の所見では第13号土坑→第11号土坑→第3号土坑であるが、前2者の関係については判然としない。

土器 第16図22は、右下がりの太めの沈線2条が確認される口縁部資料である。

石器 第23図5・6は2次加工剥片で、打点と対向する1辺に調整加工が施されるものである。7は、磨石の残欠である。使用面は両面に及び、残された小口面には敲打痕がみられる。

●第14号土坑（第8・16・23図）

調査区南西のD7グリッドに位置する、長軸1.8m、短軸1.0m、深さ0.4mほどの長楕円形を呈する土坑である。南西側の上層を第1号溝によって切られるが、覆土中層以下は残されていた。底面は平坦で、壁は心持ち湾曲しながら立ち上がる。土坑南端を小穴によって切られている。

土器 第16図23は、やや肥厚する帯縄文の口縁部を持ち以下に2帯の帯縄文と2帯の磨消文帯とを重畳させるもの、24は、帯縄文を持つ口縁部に配された刺突を持つ貼瘤の窺える資料、25は無文の口縁部、26は、丁寧な器面整形と半肉彫り風の沈線及び刺突列の観察される大洞系土器の胴部資料である。

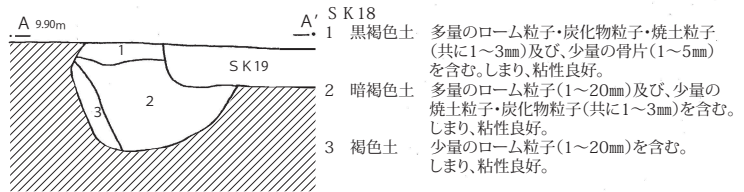
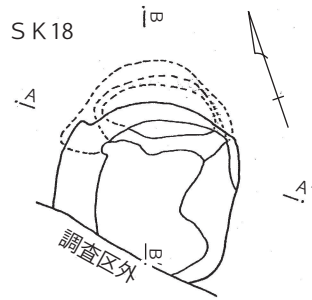
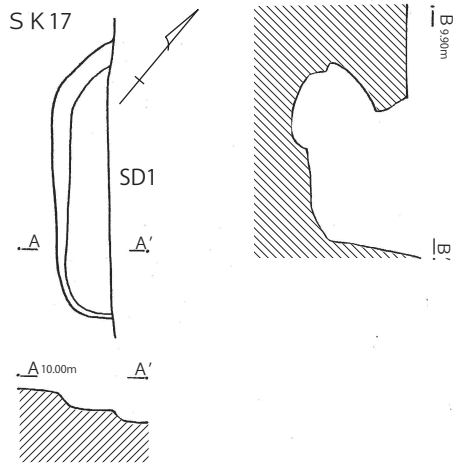
石器 第23図8は、打点に対向する1辺に調整加工を加える2次加工剥片、9は、縦長の不規則剥片を素材として、2側縁に丁寧な押圧剥離を加え尖頭部を作出したもので、石鏃様石器A類に該当する。

●第15号土坑（第8・16・18・23・47図）

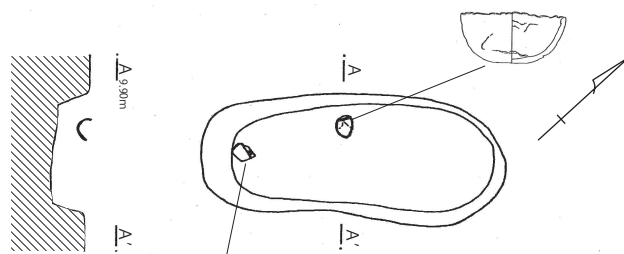
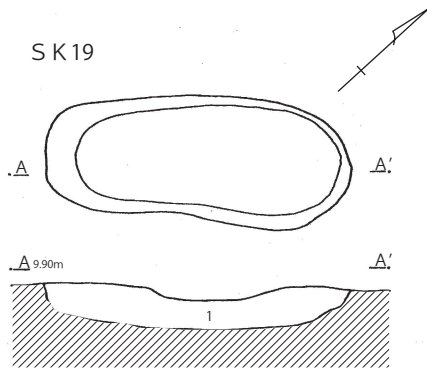
D7・D8グリッド、第14号土坑と後述の第16号土坑との間に接するように掘り込まれている。長軸2.1m、短軸1.1m、深さ0.3mを測る長楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。土坑北端付近から大洞系の浅鉢形土器が、南端付近から同じく大洞系の小型の壺形土器が出土した。

土器 本址出土土器は第16図27～34、第18図1～4が該当する。27・28は平縁で無文の口縁部資料で、前者は破片下端に1条の沈線が窺われる。29は、内傾する帯縄文を持つ口縁部資料で、太めの沈線や口縁部内面の施文から前浦式系統の土器群であることがわかる。30は、小型の細密沈線文系土器群の胴部資料、31は、単節縄文の地文上に垂下する沈線がみられる資料、32は、無文の胴部資料、33は強く内傾する壺形土器ないし注口土器の頸部付近の資料、34は胴部を巡る沈線と、これに向かう左下がりの沈線の描出された胴下半の大型破片資料である。

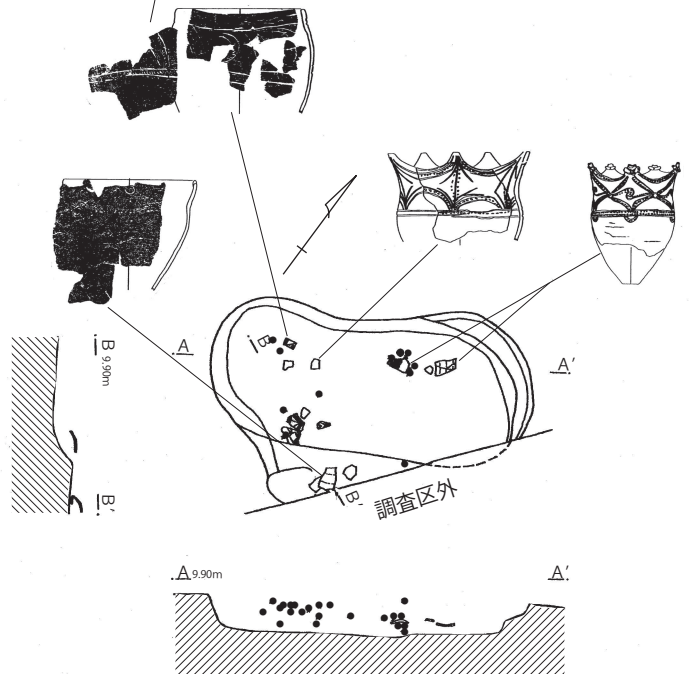
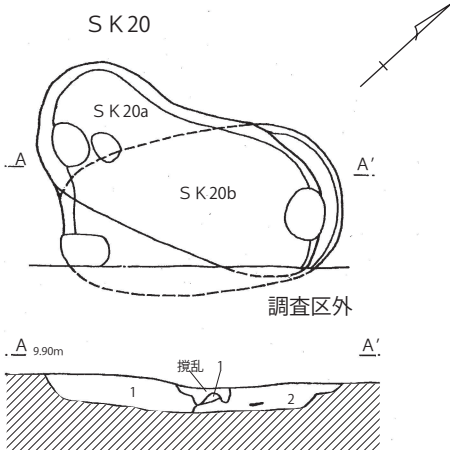
第18図1は、口径22cm、器高7cmを測る大洞系の浅鉢形土器である。外面は全体に丁寧に磨かれており、丸底となる底部を巡るように縄文帯が配される。胴部中央に引かれた横走沈線と底部縄文帯との間に、単節LR縄文の充填される「盃」状のモチーフが4単位配される。このモチーフ間にできる算盤玉状の無文



- A' SK18
- 1 黒褐色土 多量のローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子 (共に1~3mm)及び、少量の骨片(1~5mm)を含む。しまり、粘性良好。
 - 2 暗褐色土 多量のローム粒子(1~20mm)及び、少量の焼土粒子・炭化物粒子(共に1~3mm)を含む。しまり、粘性良好。
 - 3 褐色土 少量のローム粒子(1~20mm)を含む。しまり、粘性良好。



- SK19
- 1 暗褐色土 多量のローム粒子(1~3mm)・炭化物粒子(1~3mm)及び少量の焼土粒子(1~3mm)を含む。しまり、粘性良好。



- SK20
- 1 暗褐色土 比較的多量のローム粒子(1~10mm)及び少量の炭化物粒子を含む。しまり良好。
 - 2 褐色土 少量のローム粒子(1~2mm)及び炭化物粒子を含む。しまり良好。



第9図 土坑実測図 (4)

部は極めて丁寧に磨かれる。「盃」状のモチーフの中央付近には三叉文や菱形状の磨消部が配される。口縁部には4条の沈線が引かれ上段2条間には刺突列が配される。刺突列は4つのブロックに分かれ単位性を示すが、「盃」状のモチーフとは必ずしも一致しない。口唇部には双頭となる突起が3単位で巡る（▼部分）。立面図の裏側（平面図下側）の口縁部には焼成後穿孔の小孔2孔が穿たれる。2は、大洞系の小型の壺形土器である。口径8.5cm、胴部最大径14.5cm、器高14cmを測る。外反する口唇部には1条の沈線が巡る。口唇部の残存率は75%ほどであるが突起等の加飾は残存部では見られない。頸部無文帯は丁寧に磨かれ、胴部縄文帯との間に形成される沈線文帯は不規則な刺突を施し半肉彫り風に磨き出している。3は、無文の広口壺形土器で、推定口径15cm、残存高9cmを測る。やや外削となる口唇外面は部分的に稜を持つ。頸部から胴部上半は横位の比較的丁寧な帯が施される。内面は、外反する口縁部は横位から斜位に丁寧になでられ、頸部は粗い横位の帯で整形の痕跡が残される。4は、推定口径24cm、残存高16cmほどの砲弾形の深鉢形土器である。肥厚する口縁部に縄文帯を置き、以下に太めの沈線で画す杵状の磨消文帯と帯縄文とを2帯ずつ重ねる。胴部は右下がりに斜行する条線文となる。

土製品 第47図11は中実の遮光器土偶の肩部資料である。頸部を巡る刺突文と肩部や胸部に施された渦巻文が観察される。

石器 第23図10は、チャート製の石錐である。両側縁表裏から丁寧な押圧剥離による加工を加え、断面菱形となる錐部を作り出している。11・13は、チャートの縦長剥片を素材とし2側縁に細かな調整加工を施す資料、12は、打点と対向する辺に調整加工を施す2次加工剥片である。

●第16号土坑（第8・16・18図）

第15号土坑の東側に隣接する長楕円形の土坑で、長軸1.9m、短軸0.8m、深さ0.3mを測る。底面は、北寄りに僅かに段を持つものの概ね平坦で、壁は角度を持って直線的に立ち上がる。土坑中央北寄りの覆土中から深鉢形土器の大型破片が出土している。

土器 第16図35は、平縁の口縁部から弧線を描き口縁部に刺突文帯を形成するもの、36は、1条の沈線を巡らせ口縁部を無文帯とし以下に三叉状入組文を配するもの、37は縄文の施される口縁部資料、38・39は、横走る直曲線の窺われる胴部資料、40は、内面に刻目文帯の施される後期後葉の資料である。

第18図5は、推定口径19cm、残存高13cmほどの胴部の張る深鉢形土器である。肥厚する口縁部を帯縄文とし、1帯の無文帯の下部に縦横の区画線と区画内に施す曲線で縄文帯を構成する土器である。細密沈線で施される部分はない。

土製品 第16図41は、無文の土器片を素材とする土製円盤で径2.8cmを測る。

●第17号土坑（第9・16・45図）

調査区西端部のB6・C6・C7付近に位置する長楕円形を呈するものと思われる土坑で、長軸2.2m、深さ0.2mほどを測る。長軸方向東側を第1号溝によって切られており短軸は不明である。底面は平坦で、壁はやや広がりながら直線的に立ち上がる。残存度は50%に満たないものと思われる。

土器 第16図42は、山形の区画の中に大柄な三叉状入組文の配される口縁部資料、43は無文の胴部資料、44は、縄文の施される小片である。

第45図8は、同安窯系の青磁椀の胴下半部資料である。蓮弁を表したと思われる掻目が観察される。

●第18号土坑（第9・18・19・23図）

調査区南端のE9グリッドに位置する。第1号住居跡を切って構築されており、第19号土坑に切られる。

また、南端は調査区外に延びている。規模は、長軸1.6m以上、短軸1.4m、深さ0.9mを測る。底面は丸底で、壁も丸く弧を描きながら内湾して立ち上がる。北側には一部横穴状に延びる部分がある。遺物の19図17の蓋や沈線文観察される12・18や比較的底径の大きな19・20などを評価すれば、堀之内式期の所産といえようか。

土器 第18図6は、推定口径26cm、残存高11cmを測る粗製の深鉢形土器である。口縁部を肥厚させ胴部には輪積痕を残す。焼成やや甘く脆弱である。

第19図1～5は、横走する刺突文帯や沈線などで飾られる口縁部資料である。1・2では口唇部に突起が付され三叉状入組文がみられる。10・11はこれらの胴部資料である。6は口縁部の外反するもの、7は口縁部に沈線が引かれるもの、8・9は輪積痕を顕著に残す無文の口縁部資料である。12・18は、沈線によって垂下するモチーフの描かれるもの、13・14は縄文の施された胴部資料、15・16は無文の胴部、19・20は無文の底部資料である。17は推定径14cm、推定高3cmほどの無文の蓋形土器である。12～20が本址の年代を反映する資料であろう。

土製品 第19図21～28は土器片素材の土製円盤である。28では、刺突の施される丈の低い隆帯が窺われる。

石器 第23図14～18が該当する。14は横長の不整形剥片の両側縁に調整加工を施すもの、16・18は小型であるが縦長の剥片の両側縁に調整加工を施すもの、17は多角錐状に成形し先端部を中心に両側縁に加工を施すものである。15は縦長の剥片を素材とし2側縁に加工を施しながら尖頭部を作出するものであるが、調整加工は正面中央の稜から行われるものである。

●第19号土坑（第9・19・20・23・46図）

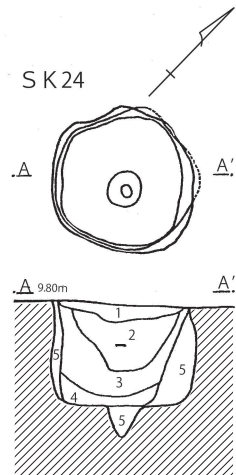
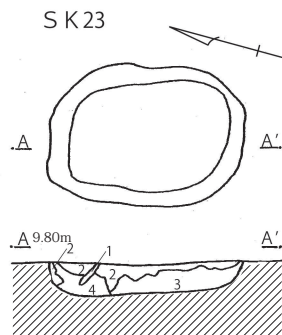
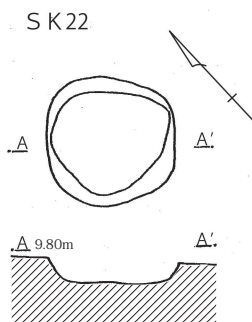
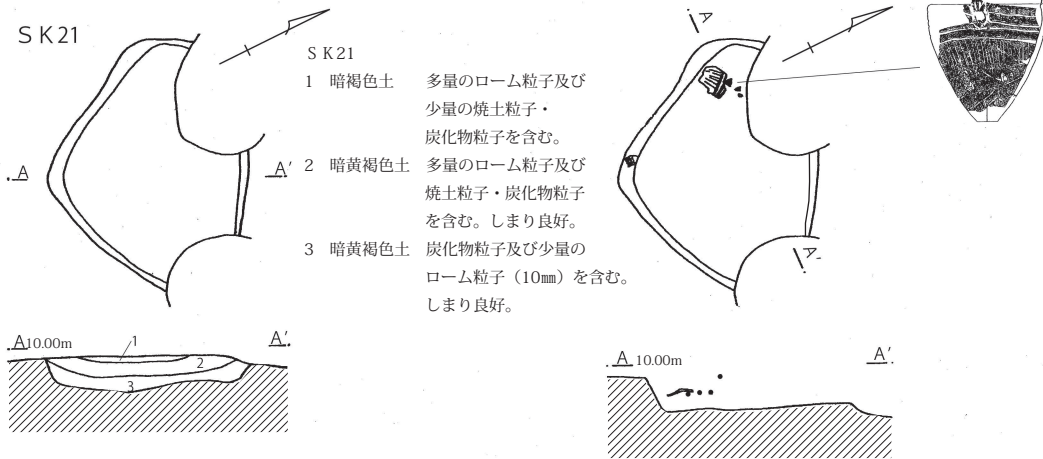
調査区南端E9グリッドに位置する。西側で第18号土坑を、東側で第26号土坑を切って構築されている。長軸2.4m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。底面は、僅かに中央が窪むものの概ね平坦で、壁は、やや開き気味ながら直線的に立ち上がる。土坑南西端から大型の粗製深鉢片が、中央北西寄りから無文の浅鉢形土器が出土した。

土器 第19図29は細密沈線文の施される口縁部資料、30は右下がりの刺突文帯がみられる口縁部資料、31は、刺突を伴う三叉状入組文が観察される内湾する口縁部資料、32は、刺突を伴う「S」字状の入組文が観察される資料、33は細密沈線文の胴部資料、34は無文の胴部資料である。

第20図1は、推定口径16.5cm、器高8cmを測る無文の浅鉢形土器である。口唇部は漣状をなし、体部から底部にかけて輪積痕が残される。2は、推定口径17cm、推定高5cmほどと思われる緩波状縁の浅鉢形土器である。波頂部には小さな瘤となるような突起が配され、中央に焼成後穿孔の小孔が穿たれる。外面は横位の丁寧な調整が施される。5は、推定口径27cm、残存高16cmほどを測る砲弾形を呈する粗製深鉢である。口縁部と胴部に爪形に似た刺突と持つ刺突文帯を配し、この間隙に三日月状や斜行する刺突文モチーフが施される。本資料は後述する第20a号土坑出土資料1点との接合関係が認められる。

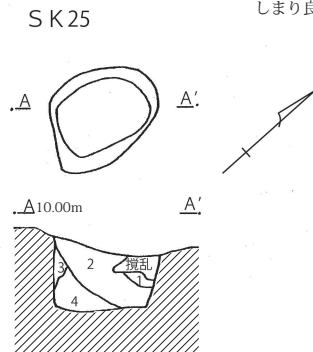
第46図11は、加曾利B式の浅鉢形土器の口縁部装飾突起と思われる。内面側の円孔を中心とする渦巻がよく残存している。

石器 第23図19は、やや厚みのあるチャートの剥片に周縁部から大ぶりの剥離を加えたのち、押圧剥離による不規則な調整を行っている。石鏃未成品と思われる。20は、磨石転用敲石である。磨石としての使用は進行しておらず、磨面中央付近に細かな敲打痕がみられる。また欠損した小口を敲打面として使用

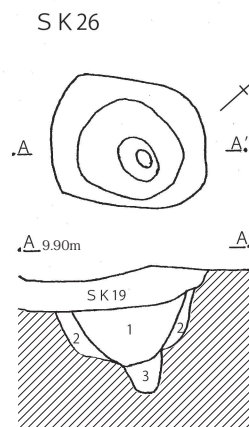


- SK23
- 1 暗黄褐色土 ローム粒子(微~30mm)主体で構成されるボソボソの層位。
- 2 暗褐色土 極めて多量のローム粒子を含む、しまり弱くボソボソする。
- 3 暗黄褐色土 少量のローム粒子(微~10mm)・炭化物粒子を含む。しまり良好。
- 4 黄褐色土 3層に近似するが同層に比し含有物の少ない安定した層位。しまり良好。

- SK24
- 1 暗褐色土 ローム微粒子・炭化物粒子(微~2mm)を含む。しまり良好。
- 2 暗褐色土 1層に比し色調明るい。ローム粒子(2~5mm)の混入顕著。焼土粒子(2mm)・炭化物粒子(2~3mm)を含む。しまり良好。
- 3 褐色土 ローム粒子(微~2mm)・炭化物粒子(微~3mm)を含む。しまり極めて良好。
- 4 暗黄褐色土 多量のローム粒子(微~20mm)・炭化物粒子(2~5mm)を含む。しまり良好。
- 5 黄褐色土 多量のローム粒子(微~5mm)を含む。



- SK25
- 1 褐色土 少量のローム粒子(1~3mm)及び、微量の炭化物粒子(1~3mm)を含む。しまり、粘性良好。
- 2 暗褐色土 多量のローム粒子(1~3mm)及び、微量の炭化物粒子(1~3mm)を含む。しまり、粘性良好。
- 3 褐色土 多量のローム粒子(1~3mm)及び、微量の焼土粒子(1~3mm)を含む。しまり、粘性良好。
- 4 暗褐色土 2層に近似するが、同層に比しローム粒子(1~3mm)及び、炭化物粒子の混入少ない。しまり、粘性良好。



- SK26
- 1 暗褐色土 多量のローム粒子(1~10mm)・微量の焼土粒子・炭化物粒子(1~3mm)を含む。しまり、粘性良好。
- 2 褐色土 1層に近似するが色調明るく、ローム粒子の混入少ない。しまり、粘性良好。
- 3 黒褐色土 ローム粒子(1~3mm)を多く含む。しまり不良、粘性良好。



第10図 土坑実測図(5)

していることがわかる。

●第20a・20b号土坑（第9・19・20・23図）

調査区南端のE9・F9グリッドに位置する不整楕円形の土坑である。規模は長軸2.5m、短軸、1.3m以上、深さ0.3mほどを測る。本址は東端に段を持つことから2基の土坑の切り合いである可能性が高い。本址の西端部もやや不自然に湾曲しながら調査区外へ延びており、この部分の底面が一段高いこともこれを裏付けている。エレベーション図で深さのある土坑を20a号、両端に残された浅い土坑を20b号土坑とする。出土遺物は20aが20bを切っていることもあり、20bに帰属する遺物は少ない。明らかに20bに帰属する資料は、第20図6が挙げられる。それ以外の資料は2基一括して報告する。

土器 第19図35・36・38は、口縁部に帯縄文を置く資料で、35・38は波状縁をなす。38では波頂下に単沈線による菱形の縄文区画が配され、波底部には刺突を伴う円文がみられる。37は、波頂部に鉢巻状の粘土紐を貼る大波状縁深鉢で、口縁に沿う刺突文帯と波頂下に配された「S」字状入組文が観察される。39は、口縁部を巡る沈線と垂下する3条の沈線とがみられる口縁部資料、40は、連弧文の窺われる胴部資料、41は、胴部を巡る刺突文帯の観察される資料、42は、条線文の観察される胴下半資料、43は、破片上端に沈線の窺われる胴部資料、44は、無文の底部付近の資料である。

第20図3は、推定口径20cm、推定器高25cmほどを測る5単位波状の深鉢形土器で、波頂部には鉢巻状の粘土紐が貼られる。口縁部に沿う刺突文帯と、胴部を巡る刺突文帯との間に形成される胴上半部の文様帯では、波頂下に刺突文帯による菱形区画を、菱形区画同士が交わる波底部には円文を配置している。波頂下の菱形区画内には、刺突の沿うステッキ状の入組文が配される。胴部刺突文帯の下部には波状縁に合わせるように半円形の刺突列が配される。4は、推定口径30cm、残存高17cmを測る5単位波状の深鉢形土器である。波頂下には胴上半部文様帯を貫く縦位分割線が引かれる。本資料を飾るモチーフは、この縦位分割線の上下両端を起点とする。分割線の両脇には刺突列が配されるとともに、分割線を中心に菱形区画を意識した沈線が引かれる。この分割線同士を結び口縁部に沿うように配された上開きの弧状の刺突文帯と胴上半部文様帯下端区画となる刺突文帯に接する下開きの弧状の刺突文帯とが波底部で背合わせの弧線区画を形成する。両者は、20a号土坑に帰属するものと思われる。

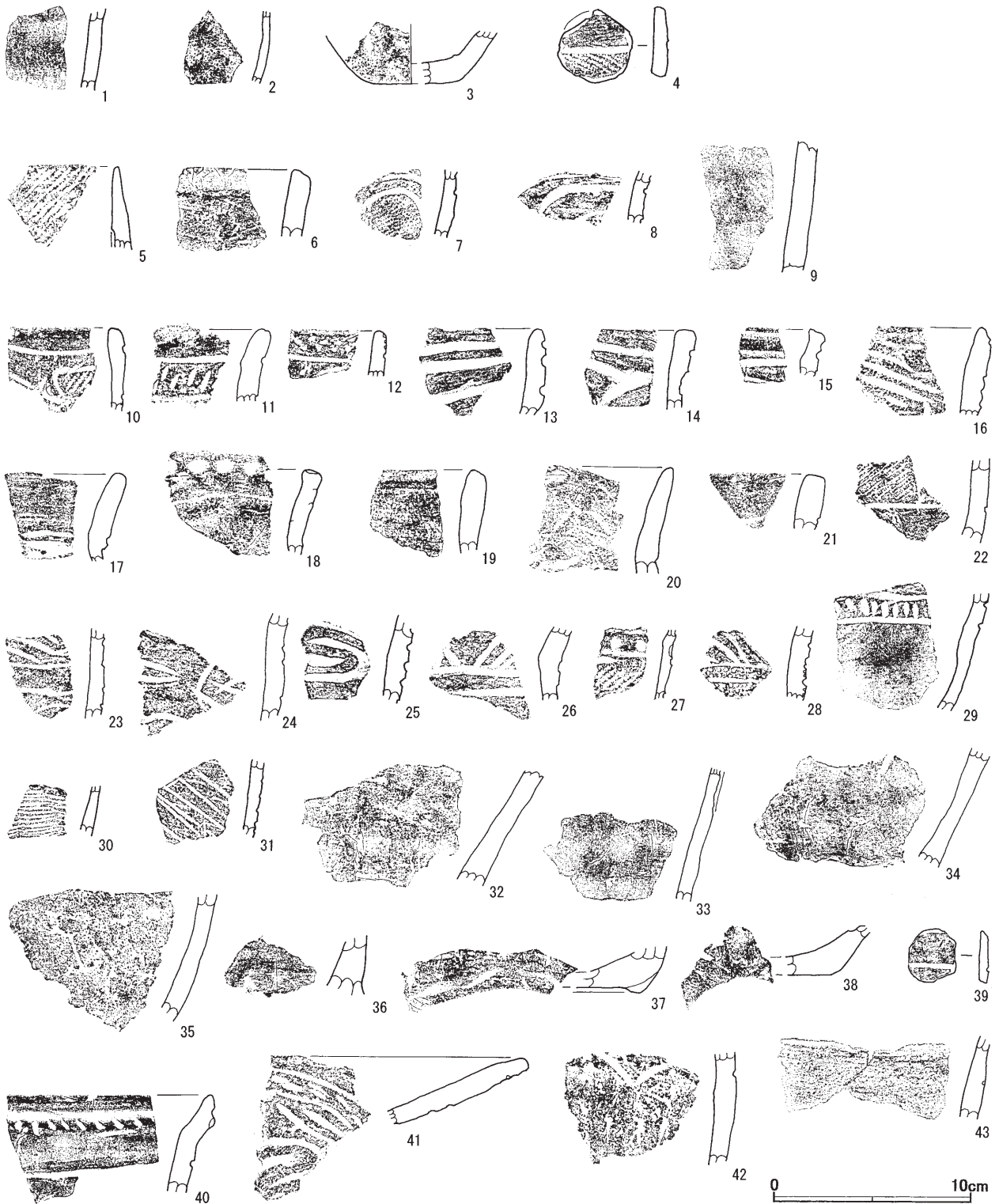
第20図6は、20b号土坑に帰属するものである。推定口径28cm、残存高26cmを測るものである。平縁の土器であるが、図中央の円文の上は欠損しており、突起が付されていたものと思われる。これとは別に小突起が配されることがわかる。胎土には、細粒砂を含むが焼成は良好で脆弱な感じは受けない。整形は胴上半では粗い横位のなで整形が、下半では縦位のなでが施される。

土製品 第19図45・46は土器片素材の土製円盤である。前者は右下がりの沈線が、後者は縄文が観察される。

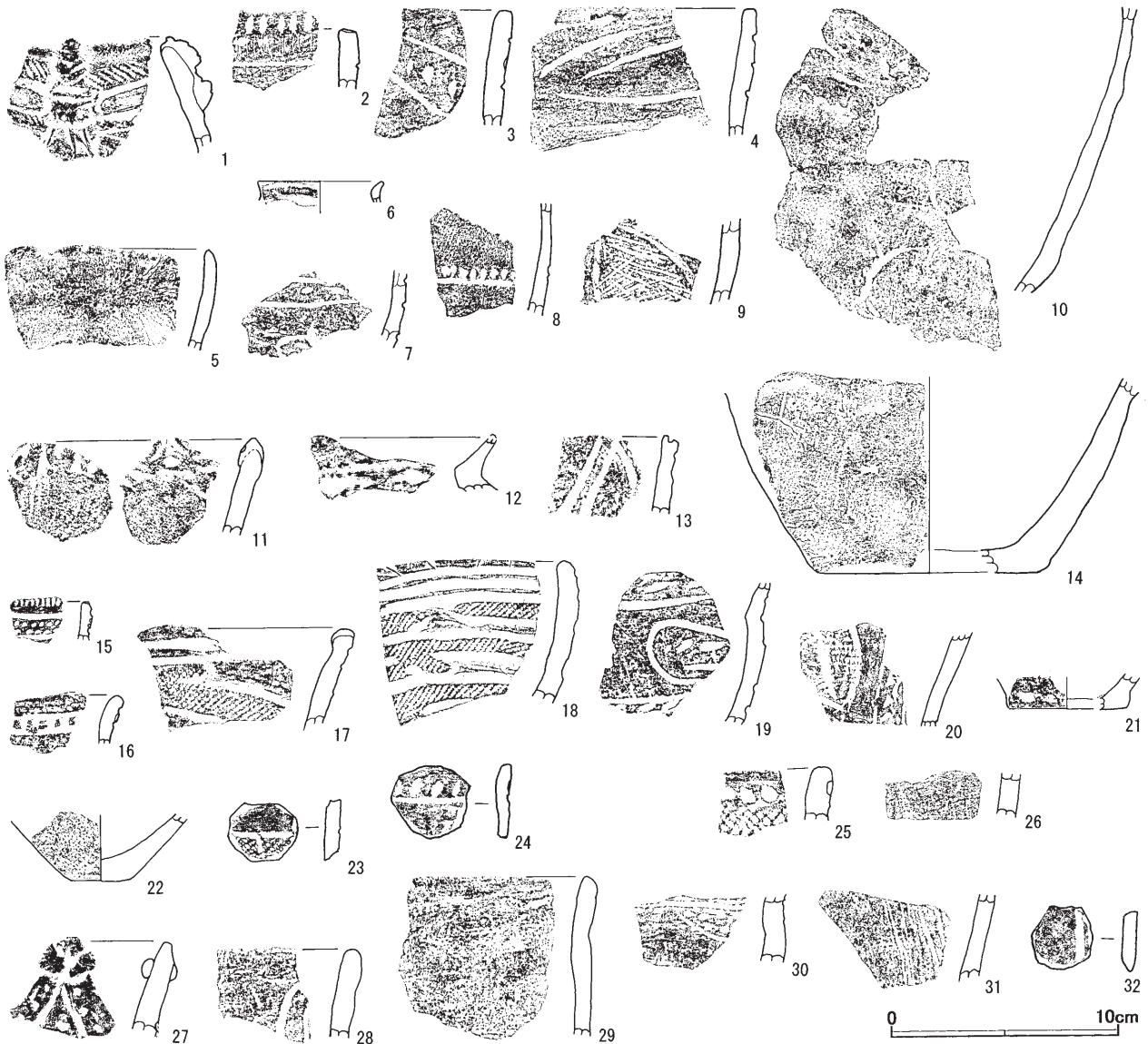
石器 第23図21・24は縦長の剥片を素材とし2側縁に調整加工を施す一群、23は横長の剥片を素材とし1側縁に調整加工を施すものである。22は、先端が欠損するが石錐と思われる資料である。

●第21号土坑（第10・19・20・23図）

帯状に展開する墓壇群のほぼ中央付近に位置し、第5号・第6号・第9号土坑と重複関係を持つ不整形の土坑である。規模は、長軸1.8m、短軸1.3m、深さ0.3mほどを測る。底面は、中央付近が僅かに窪むもののほぼ平坦といえ、立ち上がりは直線的で角度を持つものである。土坑北西端から深鉢形土器の大破片（20図7）が出土している。



第11図 土坑出土遺物 (1)

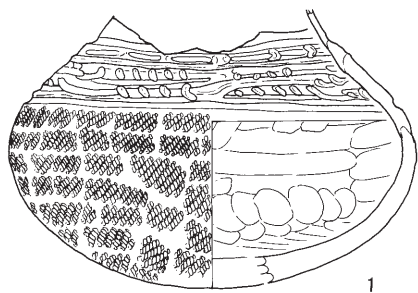


第12図 土坑出土遺物(2)

土器 第19図47・48は、帯縄文の施される口縁部資料で、前者は横位に刻みの施される貼瘤が付される。49・50は、砲弾形を呈する粗製土器の口縁部で、肥厚する口縁部には刺突列が配される。51は無文の口縁部、52は無文の胴部、53は、無文の底部資料である。54は、振幅の大きな鋸歯状区画の中に三叉状入組文が配される深鉢形土器である。

第20図7は、推定口径25cm、推定器高27cmほどと思われる深鉢形土器である。口縁部に縦位の刻みのある突起を配し肥厚する口縁部に帯縄文を置く。以下には突起を結ぶ杵状の磨消文帯と、その下を閉じる帯縄文もう1帯の無文帯が観察されるが、最下段の縄文帯は下端区画線を消失しており、これにかぶせるように縦位の条線文帯となる。胴部下半は無文化し斜位の整形痕が残される。

石器 第23図25は、貝殻状の剥片を素材とし、対向する1辺に調整加工を施している。特に正面左隅には、正面からの押圧剥離を加えた細かな加工が施されることがわかる。26は、縦長剥片を素材とし2側縁に調整加工を施すものである。



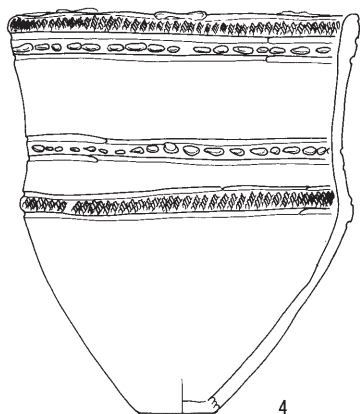
1



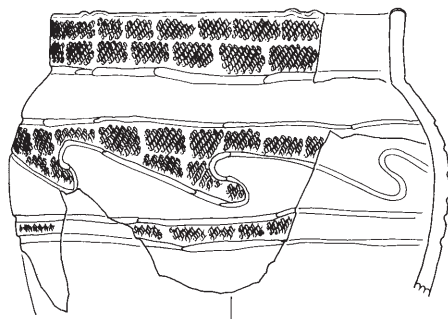
2



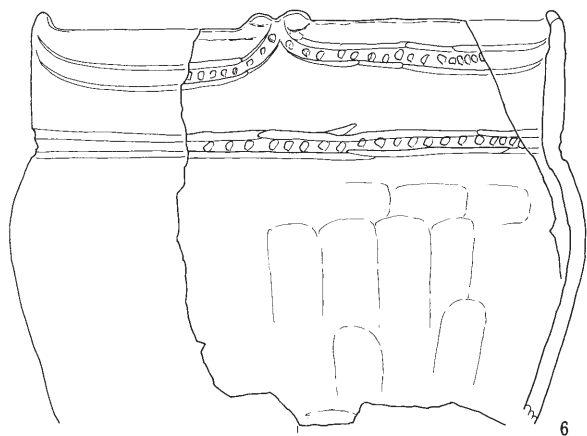
3



4



5



6



7

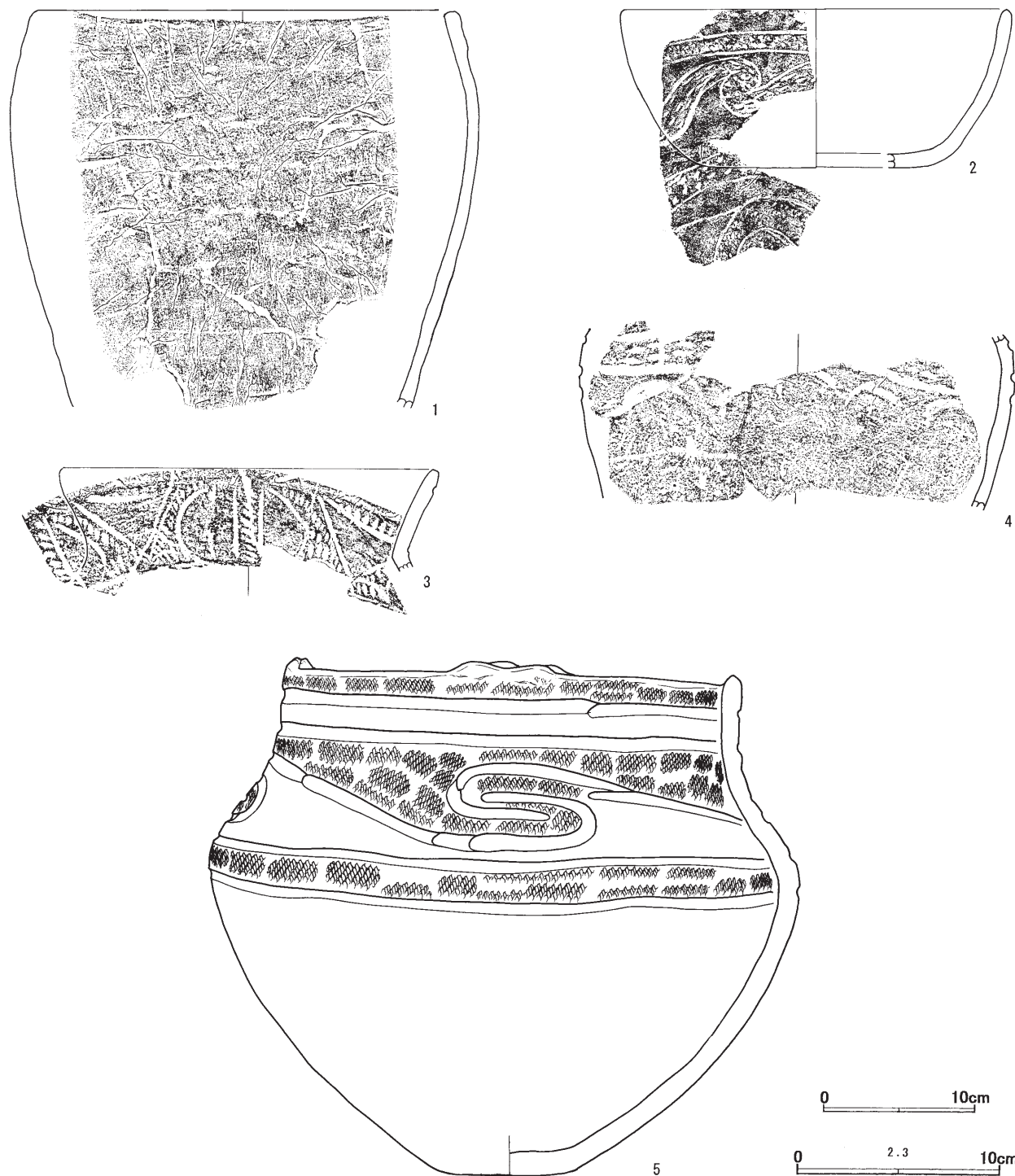


8

0 10cm

0 1.4 10cm

第13图 土坑出土遺物 (3)

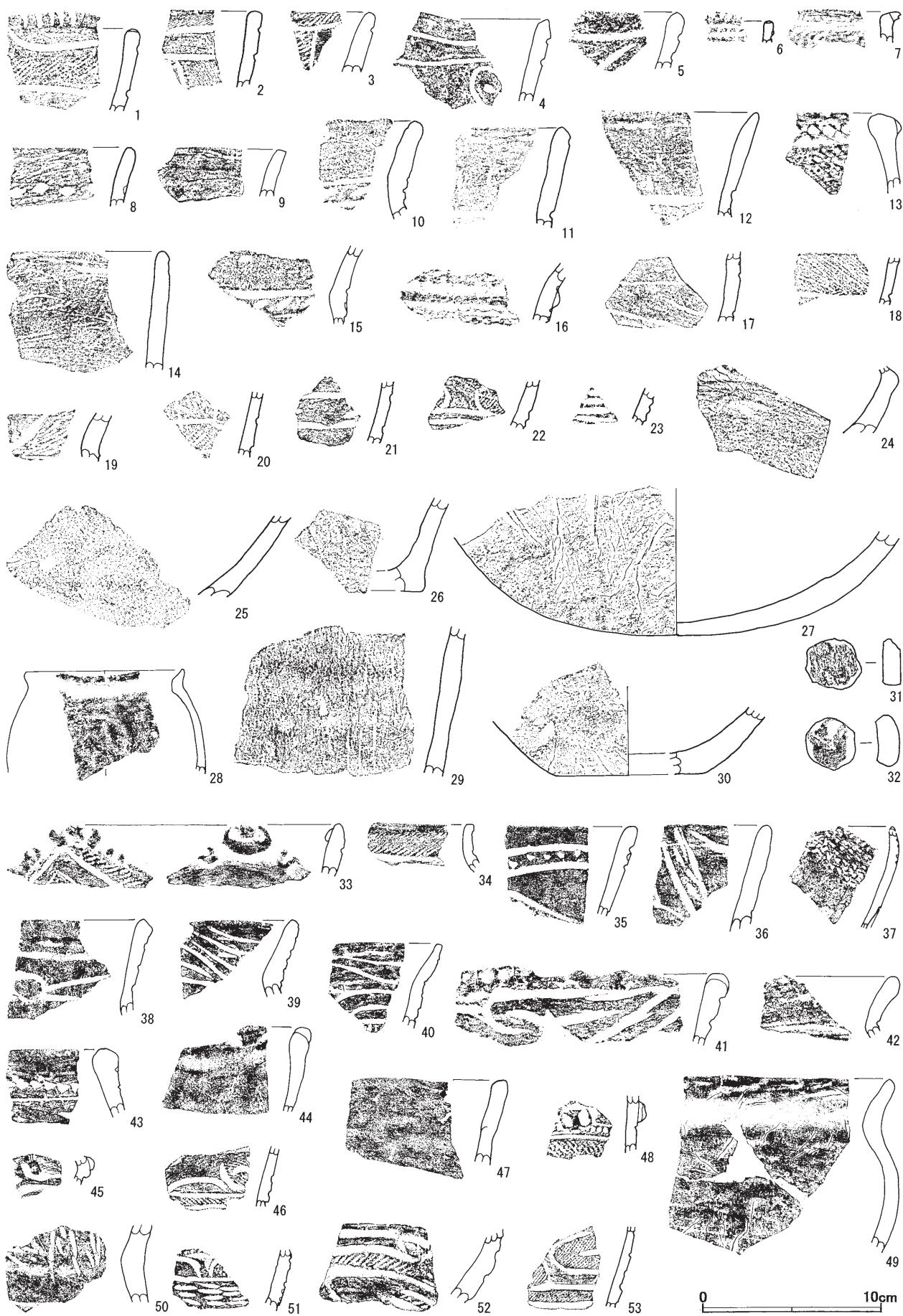


第14図 土坑出土遺物(4)

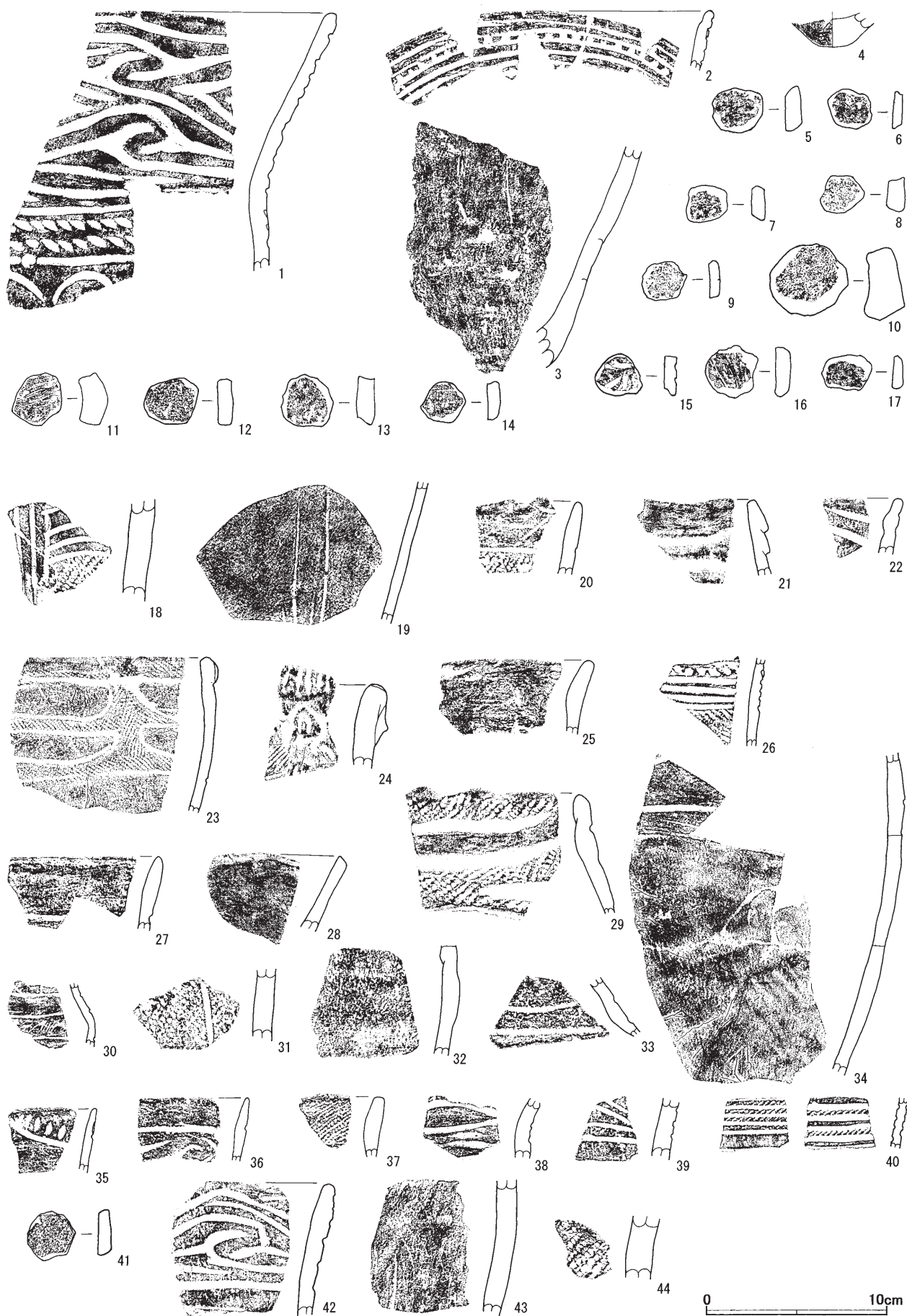
●第22号土坑(第10・21・23図)

調査区南部E7グリッドに位置する径1.0m、深さ0.2mほどのほぼ円形を呈する土坑である。底面は平坦で、壁はやや湾曲しながら立ち上がる。

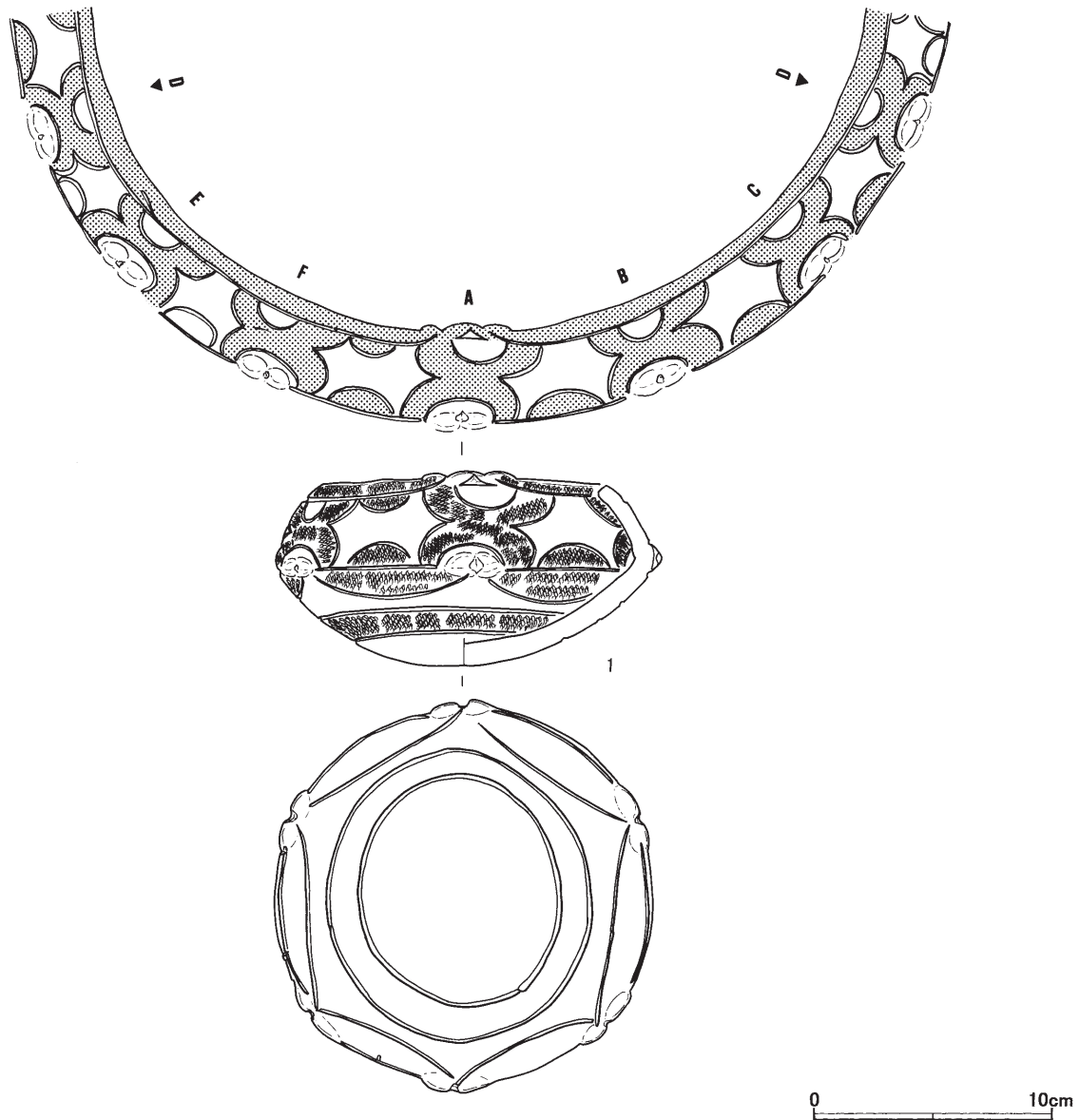
土器 第21図1は口縁外面に1条の沈線が引かれるもの、2は、細密沈線が施される胴部資料、3は縄文の施される資料、4は無文の胴部資料である。



第15图 土坑出土遺物 (5)



第16图 土坑出土遺物 (6)



第17図 土坑出土遺物 (7)

石器 第23図27は、横長剥片を素材とし2側縁に調整加工を施す小型の石器、28は、横長剥片を素材とし、打点と対向する1側縁に調整加工を施すもの、29は、丸く成形された小型の磨石である。

●第23号土坑 (第10・21・23図)

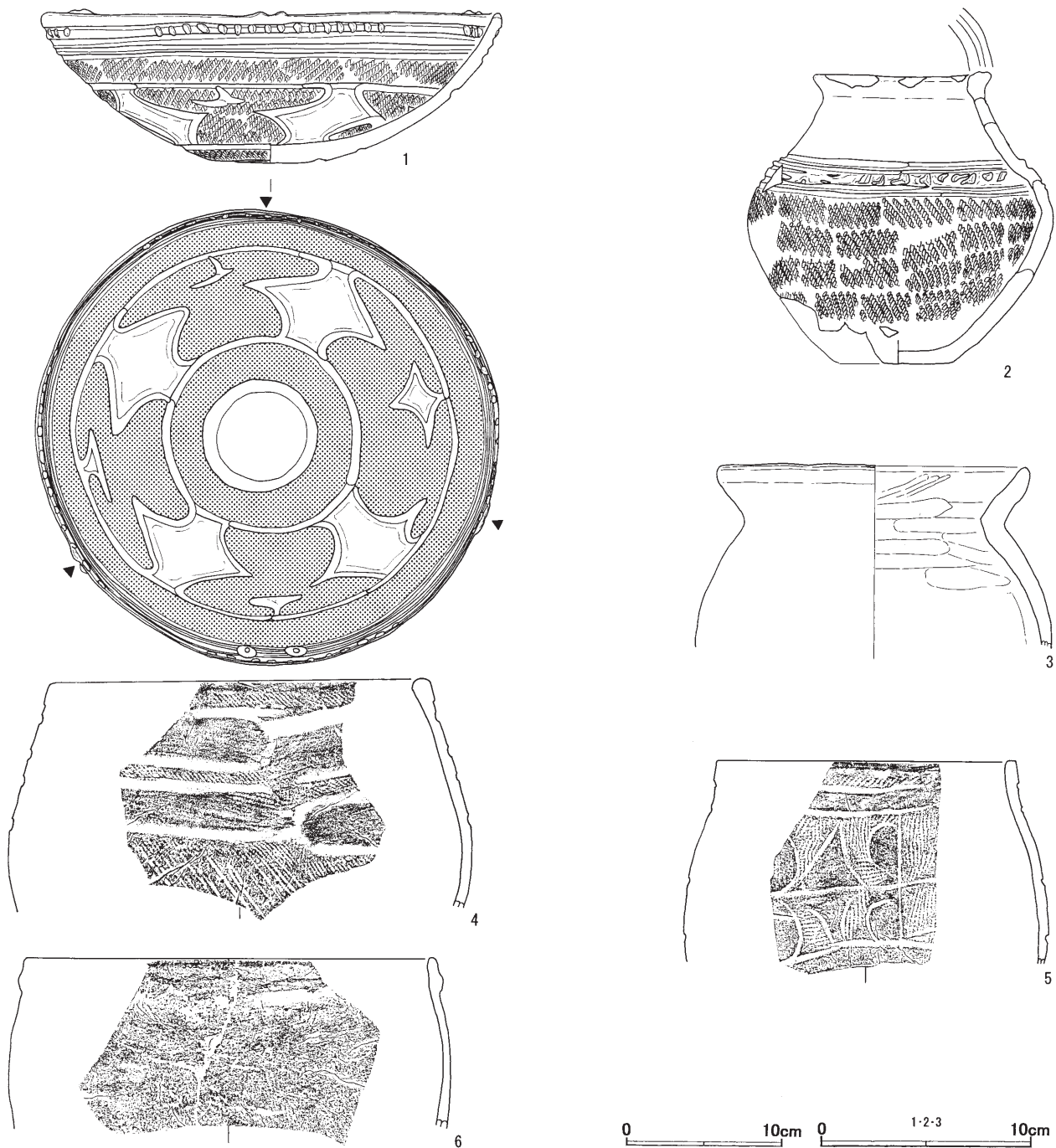
調査区南部E7・8グリッドに位置する、長軸1.5m、短軸1.1m、深さ0.3mほどの隅丸方形の土坑である。底面はほぼ平坦で壁は、湾曲しながら立ち上がる。

土器 第21図5は、単節LR縄文の施される胴部破片、6は、右下がりの浅い条線文の施される胴部資料である。

石器 第23図30は、中央に明瞭な稜を持つ縦長剥片を素材とし、先端部を中心に2側縁に調整加工を施すものである。

●第24号土坑 (第10・21・23図)

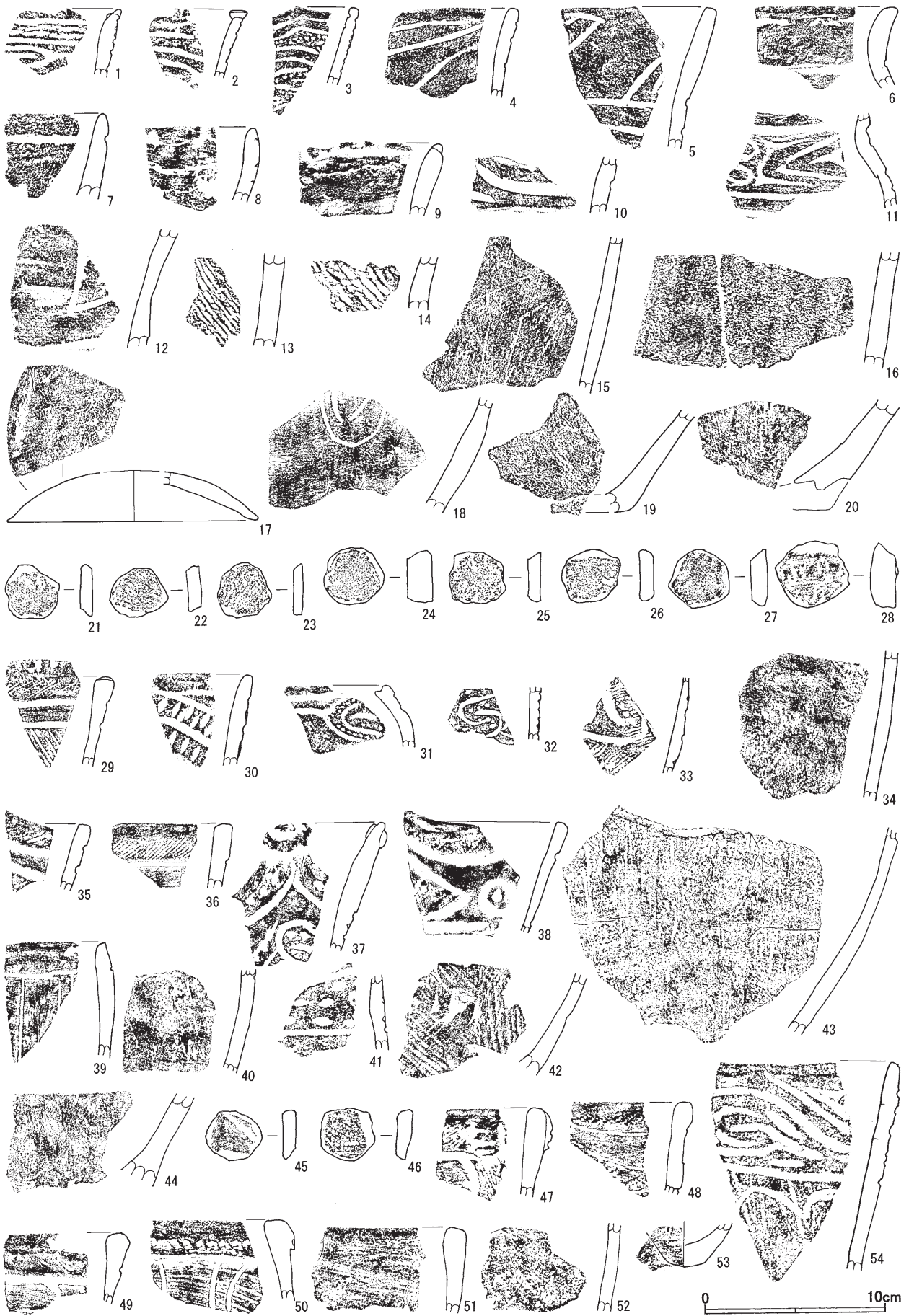
第23号土坑と接するようにE8グリッドに位置しており、第1号住居跡を切って構築されたものと思わ



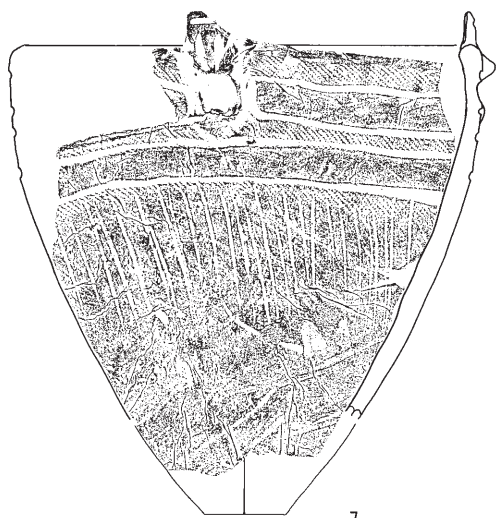
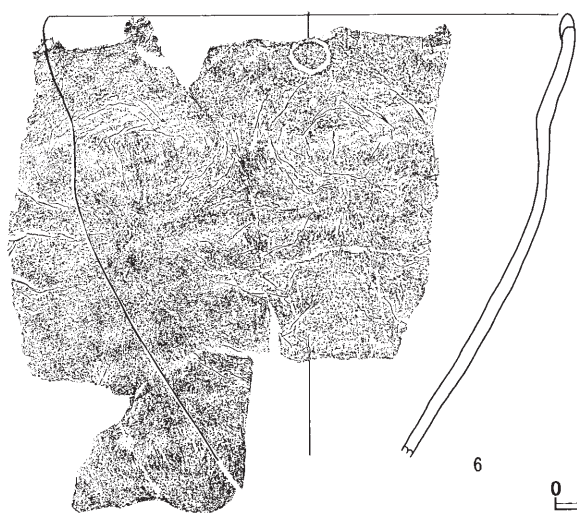
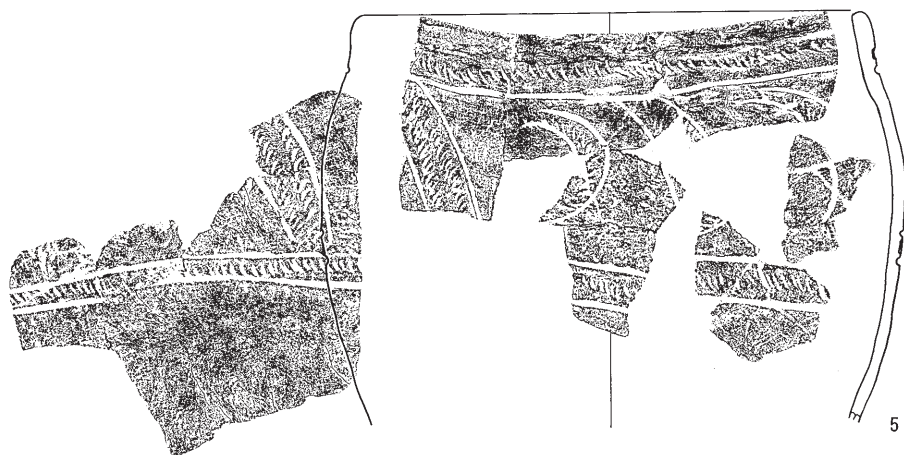
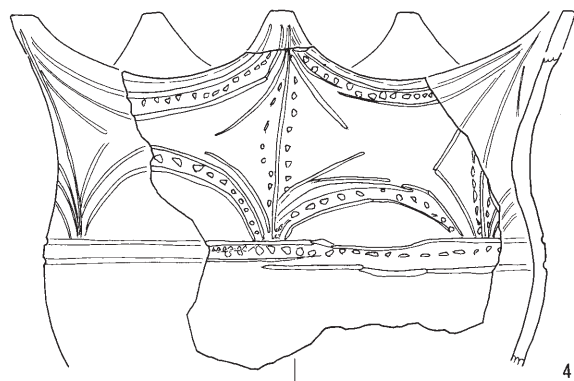
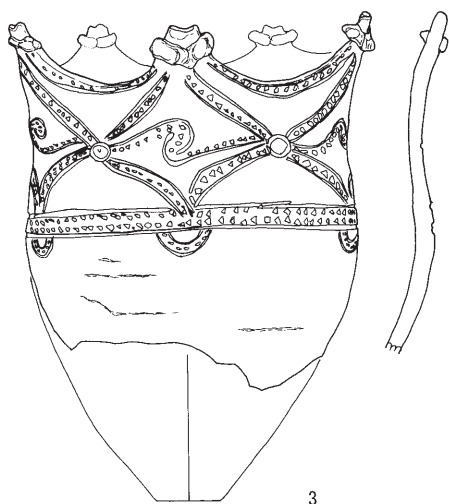
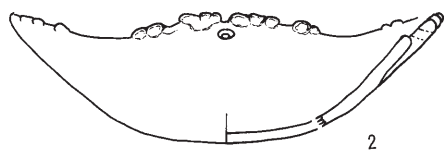
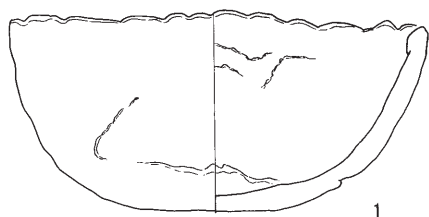
第18図 土坑出土遺物 (8)

れる。径1.1m、深さ0.8mを測る円形の土坑で、底面中央に径0.3m、深さ0.25mほどの小穴が穿たれる。底面は平坦で、壁は、やや湾曲しながら一部オーバーハング気味に立ち上がる。出土遺物は本址が切っている第1号住居跡からの流れ込みと思われる中期の遺物が主体をなすが、形状から後期前葉の所産と思われる。

土器 第21図7は、口縁部に連弧文のみられるキャリパー形深鉢土器で、地文は単節RL縄文を斜位回転させている。8は、渦巻文のみられる緩波状縁の資料、9・10は角押文のみられる中期前葉の資料、11～13は縦横の沈線と縄文のみられる胴部資料である。



第19图 土坑出土遗物 (9)



6

0 1-2 10cm

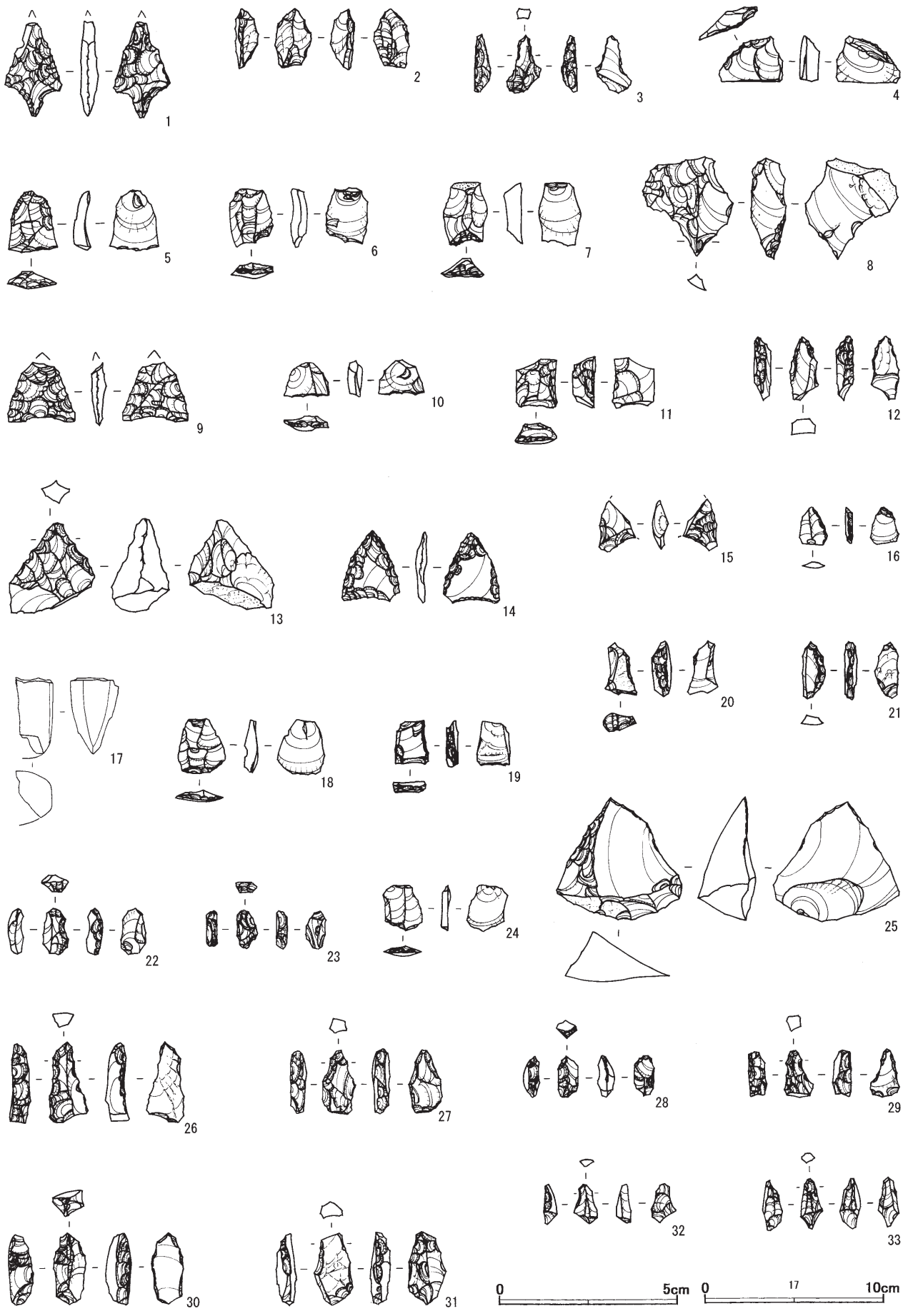
7

0 10cm

第20图 土坑出土遗物 (10)



第21図 土坑出土遺物 (11)・溝出土遺物



第22图 土坑出土遗物 (12)

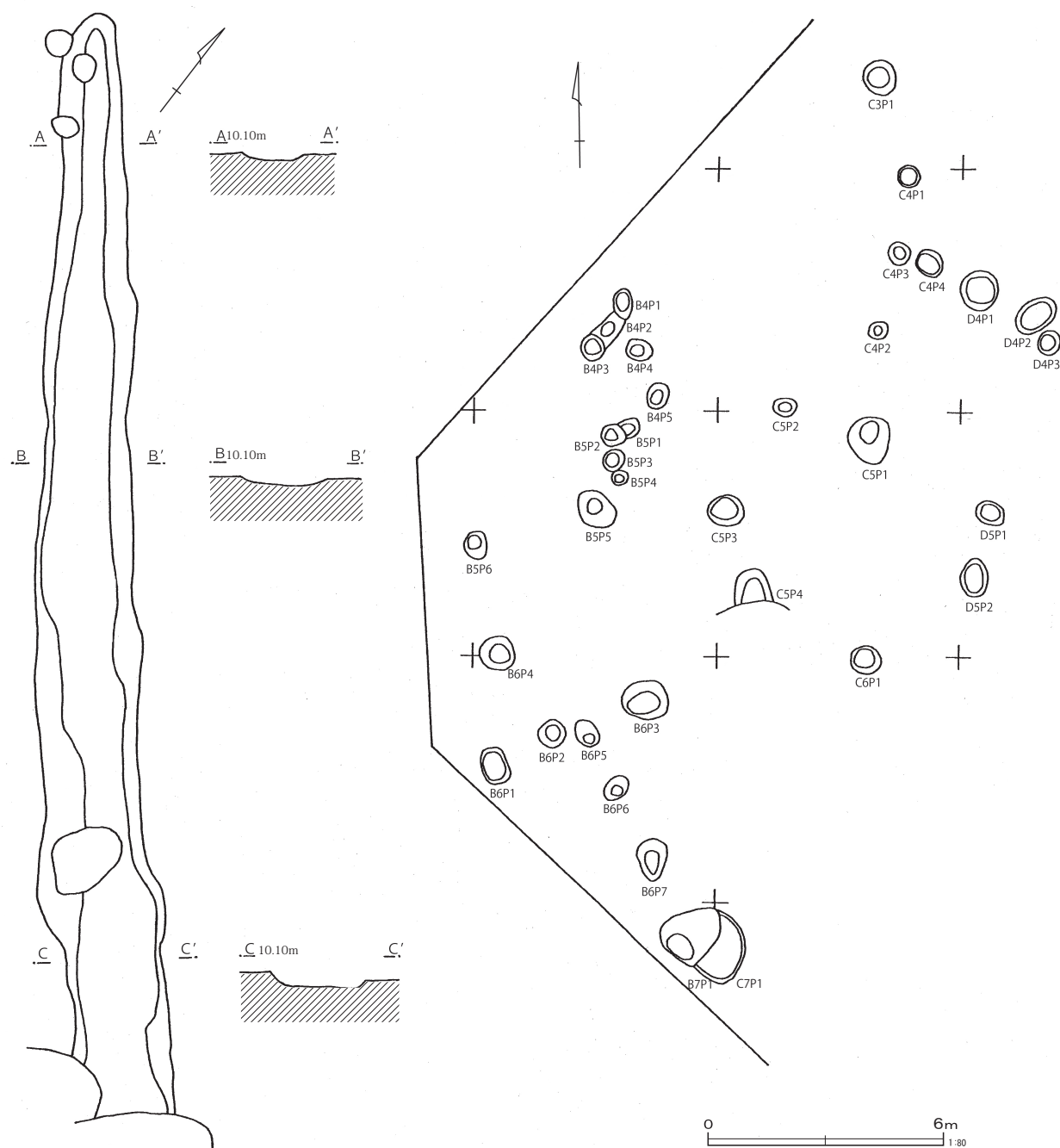


第23图 土坑出土遗物 (13)

挿図番号	種別	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
22図1	石鏃	SK2	(2.6)	1.6	0.5	(1.5)	黒色安山岩	先端部欠損
22図2	石鏃様石器	SK2	1.6	1.0	0.6	0.8	チャート	
22図3	石鏃様石器	SK2	1.5	0.8	0.3	0.5	チャート	
22図4	2次加工剥片	SK2	1.3	1.8	0.5	1.0	チャート	
22図5	2次加工剥片	SK3	1.7	1.3	0.5	0.8	チャート	
22図6	2次加工剥片	SK5	1.5	1.2	0.4	0.8	チャート	
22図7	2次加工剥片	SK5	1.7	1.2	0.5	0.9	チャート	
22図8	石錐	SK5	2.7	2.4	0.3	4.8	チャート	
22図9	石鏃	SK5	(1.5)	1.9	0.4	(1.1)	チャート	先端部欠損
22図10	2次加工剥片	SK6	0.9	1.3	0.4	0.5	チャート	
22図11	2次加工剥片	SK6	1.3	1.2	0.6	1.2	チャート	
22図12	石鏃様石器	SK6	1.8	0.8	0.5	0.7	チャート	
22図13	2次加工剥片	SK7	2.3	2.3	0.6	6.1	チャート	石錐未成品か
22図14	石鏃	SK8	1.9	(1.6)	0.3	(0.8)	チャート	
22図15	石鏃	SK8	(1.4)	(1.0)	(0.4)	(0.5)	チャート	脚部残欠
22図16	石鏃様石器	SK8	1.0	0.8	0.2	0.2	チャート	
22図17	磨製石斧	SK8	(4.2)	(2.1)	(2.3)	(23.3)	硬砂岩	残欠
22図18	2次加工剥片	SK9	1.5	1.3	0.4	0.7	チャート	
22図19	2次加工剥片	SK9	1.2	0.9	0.3	0.5	チャート	
22図20	石鏃様石器	SK9	1.4	0.8	0.5	0.5	チャート	
22図21	石鏃様石器	SK9	1.5	0.7	0.3	0.4	チャート	
22図22	石鏃様石器	SK9	1.3	0.7	0.4	0.4	チャート	
22図23	石鏃様石器	SK9	1.1	0.6	0.3	0.3	チャート	
22図24	2次加工剥片	SK10	1.2	1.1	0.2	0.4	チャート	
22図25	2次加工剥片	SK10	3.2	3.5	1.5	13.2	チャート	
22図26	石鏃様石器	SK10	2.2	1.0	0.5	1.2	チャート	
22図27	石鏃様石器	SK10	1.7	0.8	0.4	0.8	チャート	
22図28	石鏃様石器	SK10	1.1	0.6	0.4	0.3	チャート	
22図29	石鏃様石器	SK10	1.3	0.8	0.4	0.6	チャート	
22図30	石鏃様石器	SK10	1.9	0.9	0.9	1.4	チャート	
22図31	石鏃様石器	SK10	1.9	1.0	0.4	1.2	チャート	
22図32	石鏃様石器	SK10	1.0	0.7	0.4	0.2	チャート	
22図33	石鏃様石器	SK10	1.4	0.5	0.2	0.4	チャート	
23図1	2次加工剥片	SK10	1.5	1.7	0.4	0.9	チャート	
23図2	2次加工剥片	SK10	1.3	1.6	0.5	1.0	チャート	
23図3	石鏃様石器	SK10	1.3	0.7	0.3	0.5	チャート	
23図4	石鏃様石器	SK11	1.6	0.8	0.5	0.6	チャート	
23図5	2次加工剥片	SK13	1.5	1.0	0.2	0.4	チャート	
23図6	2次加工剥片	SK13	1.6	1.3	0.3	0.8	チャート	
23図7	磨石	SK13	(7.5)	(4.1)	4.3	(175.1)	硬砂岩	残欠
23図8	2次加工剥片	SK14	1.5	1.3	0.4	0.8	チャート	
23図9	石鏃様石器	SK14	2.5	1.2	0.4	1.7	チャート	
23図10	石錐	SK15	2.6	0.7	0.4	0.9	チャート	
23図11	石鏃様石器	SK15	1.2	0.6	0.5	0.4	チャート	
23図12	2次加工剥片	SK15	1.8	1.0	0.3	0.5	チャート	
23図13	石鏃様石器	SK15	1.3	0.6	0.4	0.3	チャート	
23図14	石鏃様石器	SK18	1.1	0.7	0.3	0.3	チャート	
23図15	石鏃様石器	SK18	3.6	1.2	0.7	3.0	チャート	
23図16	石鏃様石器	SK18	0.9	0.6	0.4	0.2	チャート	
23図17	石鏃様石器	SK18	1.4	0.6	0.4	0.4	チャート	
23図18	石鏃様石器	SK18	1.2	0.6	0.4	0.3	チャート	
23図19	石鏃未成品	SK19	2.3	2.0	0.9	5.2	チャート	
23図20	敲石	SK19	(8.9)	(4.2)	(5.5)	(284.9)	硬砂岩	
23図21	石鏃様石器	SK20	2.3	0.7	0.2	0.7	チャート	
23図22	石錐	SK20	1.5	1.1	0.4	1.0	チャート	錐部欠損
23図23	石鏃様石器	SK20	1.2	0.7	0.4	0.3	チャート	
23図24	石鏃様石器	SK20	2.7	1.3	0.3	1.5	チャート	
23図25	2次加工剥片	SK21	1.5	1.8	0.3	1.2	チャート	
23図26	石鏃様石器	SK21	1.5	0.7	0.4	0.4	チャート	
23図27	石鏃様石器	SK22	1.1	0.7	0.4	0.3	チャート	
23図28	石鏃様石器	SK22	1.7	1.0	0.4	1.0	チャート	
23図29	軽石製品	SK22	4.0	3.6	3.1	21.8	安山岩	
23図30	石鏃様石器	SK23	1.6	1.0	0.5	0.7	チャート	
23図31	石鏃	SK24	2.1	1.0	0.5	0.8	チャート	
25図1	2次加工剥片	SD1	1.3	1.0	0.2	0.4	チャート	
25図2	2次加工剥片	SD1	1.7	1.2	0.3	0.9	チャート	
25図3	石鏃	SD1	3.4	2.2	1.2	4.3	チャート	
25図4	打製石斧	SD1	(5.2)	7.3	1.8	(112.0)	硬砂岩	胴部残欠
25図5	打製石斧	SD1	(7.7)	6.1	2.6	(193.9)	ホルンフェルス	刃部欠損
25図6	敲石兼磨石	SD1	(9.7)	5.5	(3.5)	(279.3)	硬砂岩	
25図7	石皿転用敲石	SD1	(8.9)	9.2	2.2	(347.3)	緑泥片岩	
25図8	磨石兼用敲石	SD1	(5.9)	(4.4)	3.9	(120.8)	安山岩	残欠
25図9	磨石兼用凹石	SD1	(8.0)	(5.6)	(2.6)	(178.7)	砂岩	残欠
25図10	磨石	SD1	(5.3)	(8.9)	(3.1)	(210.8)	花崗岩	残欠
25図11	磨石兼用凹石	SD1	5.7	5.1	3.8	139.3	安山岩	
51図1	石核	SK10	6.1	5.9	2.2	107.4	チャート	

第2表 土坑出土石器計測表

SD1



第24図 溝・ピット実測図

石器 第23図31は、有茎石鏃である。裏面中央に素材剥片の主剥離を残す。

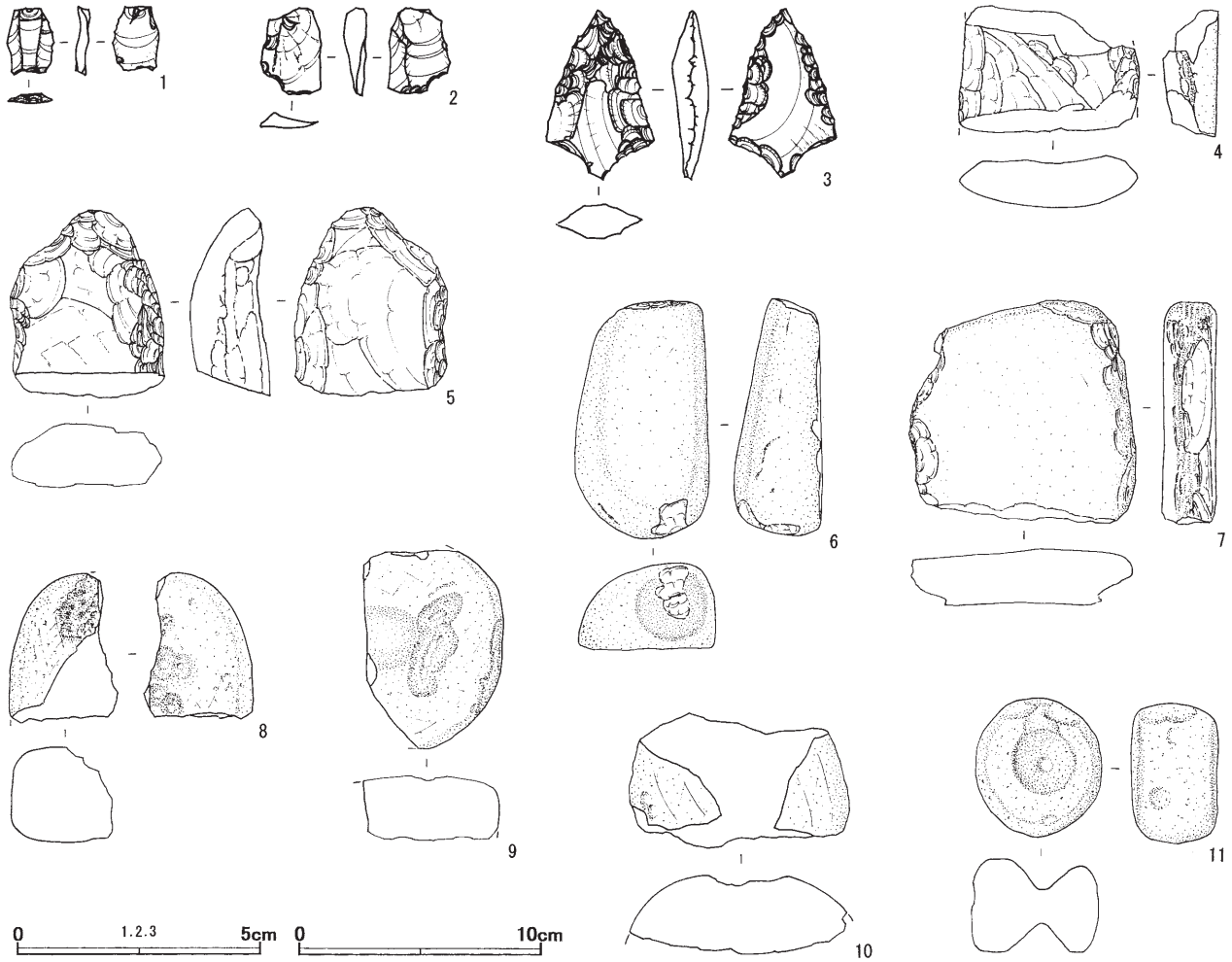
●第25号土坑（第10・21図）

調査区南西部D8グリッドに位置する。上層を第1号溝に切られる。長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.6mほどの不整楕円形土坑である。底面は概ね平坦で壁は、直線的に立ち上がる。

土器 第21図14は、内傾する壺形土器の肩部付近の資料と思われる、外面は丁寧な横位のなでが施される。

●第26号土坑（第7・15図）

調査区南端E9・F9グリッドに位置し上層を第19号土坑に切られる。規模は長軸1.2m、短軸1.0m、確認面からの深さ0.4mほどである。中央に径0.3m、深さ0.25mほどの小穴が穿たれている。底面はこ



第25図 溝出土遺物

の小穴に向かって漏斗状に窪む。壁はやや湾曲しながら立ち上がるが、上部が失われており、第24号土坑のように袋状となるかどうかは不明である。図示に耐えうる出土遺物はないが、形状などから縄文時代後期の所産であるものと思われる。

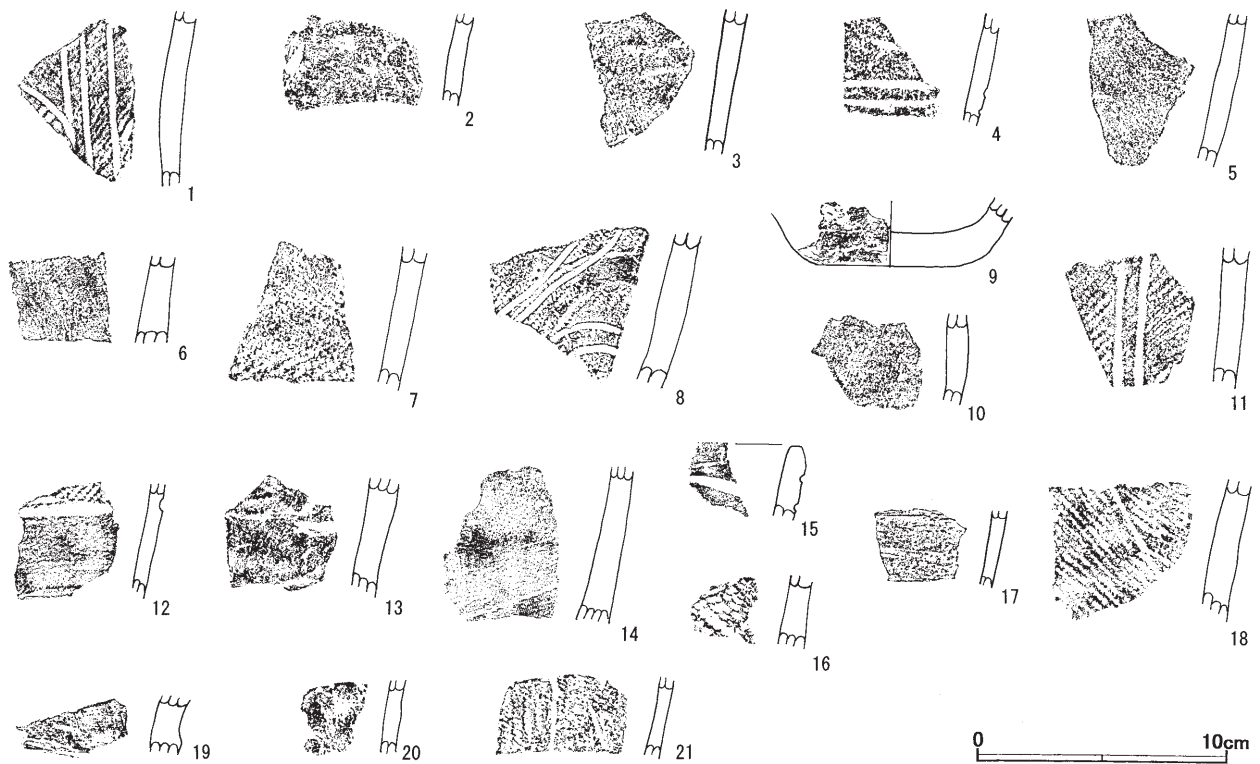
(3) 溝

調査区の南西辺に沿うように1条の浅い溝が確認された。

●第1号溝 (第21・24・25・47図)

確認された溝の延長は13.6mを測り、さらに調査区外へ続くものと思われる。幅は、北西端で狭く、0.6mほどであるが、徐々に広がり最も広い部分では1.3mほどを測る。深さは0.1~0.2mほどで、だらだらとした立ち上がりを示す。近世期の所産と思われる。

土器 第21図15~40が本址出土資料であるが、包含層からの流入資料であるものと思われる。15は縄文地文上に階段状にクランクする沈線が観察されるもの、16は、不規則な刺突を伴う横走沈線の観察される資料、17は、縄文地文上に刺突を有する隆帯が横走するもの、18は、口縁部に「8」字状の貼付文を持つもの、19は、双刺瘤のみられる肥厚する波状口縁の資料、20は、肥厚する帯縄文の下に三叉文のみられる資料、21は、太めの沈線による三叉状入組文のみられる資料、22は、口縁部に刺突文帯と磨消文帯



第26図 ピット出土遺物

が交互に配される資料、23は、外反する波状縁の資料で、口唇端面にスリット状に沈線が施される大洞系の資料、24は、口縁部に紐線文の施される粗製土器である。25・30は、2個1対の丈の高い貼瘤の付される胴部資料、26は、雲形となる磨消文のみられる大洞系の胴部資料、27は、太めの沈線による縄文帯のみられる前浦系の胴部資料、28は、縄文の充填されるブロックを沈線でつなぐもの、29・31は、曲線化した刺突文帯が器面を埋める胴部資料、32は、連弧文の窺われる胴部資料、33は縄文の施されるもの、34は、条線文の施される資料、35～40は無文の底部である。

土製品 第47図7は、土偶の頭部破片と思われる。眉毛から鼻へつながるラインを隆起線で強調し、目を刺突状に表現している。

石器 第25図が本址出土資料である。1・2は、打点に対向する1辺に調整加工を施す2次加工剥片、3は、大型の有茎石鏃で、裏面に素材剥片の主剥離面を残す。4・5は打製石斧で、前者は基部、刃部とも欠く。後者は刃部を欠く。6は、敲石で、下端の小口面に敲打痕が残される。7～9は磨石兼敲石で、7は側縁に敲打痕が顕著である。8は、磨石としての利用は両面に及び、正面上部や裏面中央部に敲打痕が残される。9は、正面中央や側面に敲打痕が残される。10は磨石残欠、11は表裏の中央部に大きな凹みを持つ磨石兼凹石である。

(4) ピット (第24・26図)

調査区の北西部を中心に土坑その他の遺構に帰属しないピットが検出されている。ピット同士が組み合わされて別の遺構を構成する傾向もみられないことから、それぞれ単体のピットとして認識しグリッド単位で番号を付した。

土器 グリッドピット出土の土器は第26図に示した。1はB3ピット7出土で、垂下する3条の沈線とこれに向かって左右から傾斜する沈線がみられる。後期前葉の資料であろう。2は、B4ピット1出土で、無文の胴部資料、3・4はB4ピット4出土で、前者は無文の、後者は横走する2条の沈線が観察できるものである。5はB5ピット6出土の無文の胴部資料、6～9はB6ピット3出土の資料で、8は単節縄文地向きの異なる2条1対の沈線が引かれるもの、9は、底径7cmほどの無文の底部資料である。10・11は、B6ピット6出土の資料で、前者は無文、後者は縄文地に垂下する2状の沈線が引かれるもの、12～14は、C3ピット1出土資料で、12は単節LR縄文と縄文帯下端区画線の窺われる資料、13・14は無文の胴部資料である。15・16は、D4ピット1出土資料で、前者は波状縁となる口縁部資料で、右下がりとなる2条の沈線が観察される。後者は、縄文の施される資料である。17・18は、D7ピット2の資料で、前者は薄手無文の、後者は縄文地にやや右下がりとなる沈線が垂下するものである。19・20は、F9ピット1出土資料で両者とも無文の胴部資料である。21はF8ピット5出土資料で条の縦走する単節縄文とこれを縁取る沈線が観察される。

(5) グリッド出土遺物 (第27～53図)

既述のとおり、本調査地点では、西隅を頂点に東方向へ向かう傾斜があり、南東方向へ進むにつれて遺物包含層は厚くなるが、調査区中央付近以東の盛土保存区に設定した南東壁沿いのトレンチでは、遺物の出土はかなり散漫となる傾向を示した。出土遺物は土坑群の集中する調査区南西側の標高の高い部分からの出土が大半を占める。

土器 (第27～45図)

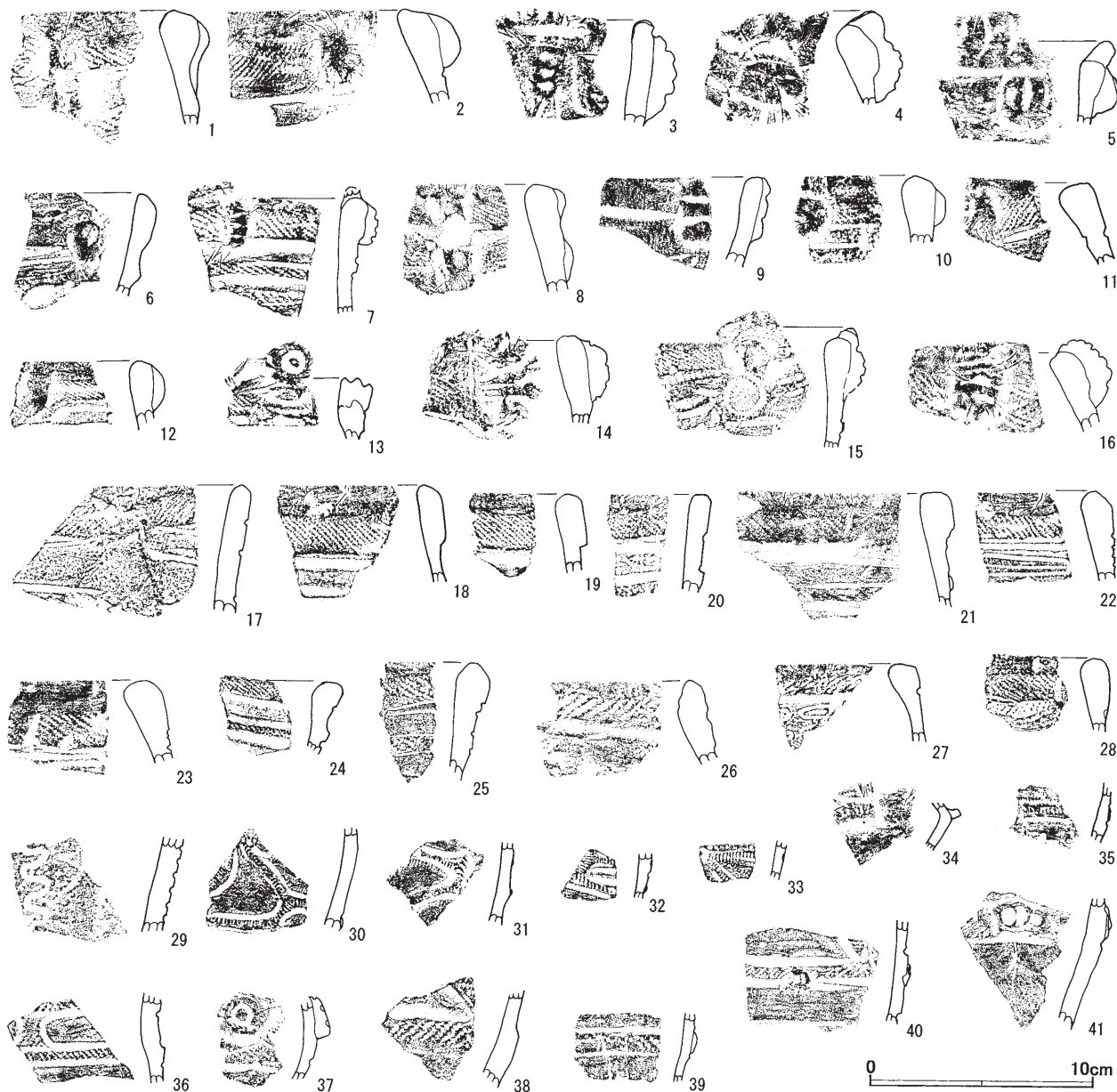
第27図1～13は、中期後葉の加曾利E式に該当する一群である。このうち1～8は口縁部資料で、1は渦巻文の両側に窓枠状の縄文区画が配置されるもの、3は口縁部外面に横位のなでを加え縄文帯との区画に微隆帯を形成するもの、4は口縁部外面に隆帯を貼り上下を棒状施文具でなで付けるもの、5・6は口縁部に横位の沈線が引かれるもの、7は緩波状縁となるもので、外面は撚糸地文上に横走沈線と鋸歯状沈線が観察される。内面には横位の条痕風の整形痕が残される。8は丈の高い隆帯で口縁部文様帯の上下を画し、その中に鋸歯状の隆帯が配されるものである。鋸歯状隆帯上には沈線が引かれる。9は両耳壺の橋状把手である。10・11・13は縄文の施された胴部資料で、10は横走する断面三角形の隆帯とこれに沿う沈線がみられる。後2者は、縄文地に曲線の描かれる資料で、11では沈線間が磨り消される。12は同種の底部資料である。

14～34は、後期前葉の堀之内式に該当する一群である。14・15・19・21は口縁部に円形刺突を施す一群である。いずれも口縁部に沿って指でなでたりこれに沈線を加えたりした幅の狭い文様帯を形成し、その要所に数個組み合わせた刺突を配する。16～18・20は、口縁部に様々な隆帯を貼付するものである。16・17では縦位に貼られた丈の高い刻みを持つ隆帯が観察される。18では、大きく捻転しながらの沈線を伴う突起として口縁部を飾る。22は無文の口縁部に横位の刺突列が観察されるものである。23は、口縁部の装飾把手の一部であろう。24～28はこれらの一群の口縁部資料である。24～27は地文に縄文を持ち沈線や刺突列が観察される。28では縦位の集合沈線が観察される。29～33は縄文地文に直曲線でモチーフを描く胴部資料である。34は、横位に整形された器面に縦横の集合沈線の引かれる資料である。

35～45は、後期後葉の加曾利B式に該当する一群である。35・36は、表裏とも丁寧に磨かれたもので、外面には横位の沈線と沈線間への充填縄文がみられる。また内面にも横走沈線が施される。小型の深鉢



第27図 調査区出土土器 (1)



第28図 調査区出土土器 (2)

と思われる。37～39は、碗形あるいは浅鉢形を呈すると思われる。丁寧に器面調整された口縁部外面に横位の沈線帯が形成されるもので、前2者では沈線間に細かな沈線が施される。後者の沈線帯は階段状を呈する。40～45は同時期の深鉢形土器の口縁部資料で、口縁内面に器面を巡る沈線を持つ点で共通する。40～43は縄文地文が施され、40では横走沈線が、42では鎖状隆帯が配される。44・45は地文を持たず、前者では3条の沈線が器面を巡り、後者では2状の沈線の下は格子目文となる。

第28図は、後期後葉安行1式から安行2式に相当すると思われる一群を一括した。1～16は、平縁土器の口縁部資料で、口縁部を肥厚させ帯縄文とし要所に貼瘤を持つ。貼瘤は1・2に代表されるように刻みのないものと3・7・9・13・15などのように横位の刻み目を持つものがある。また、貼瘤と連動して3～5のように口唇部上に飛び出る突起をもつものがある。15は突起下の円文や帯縄文下端に押引文が見られ後出的である。17～28も同様の口縁部資料で、貼瘤や突起のみられない部分である。29は垂下する蛇行

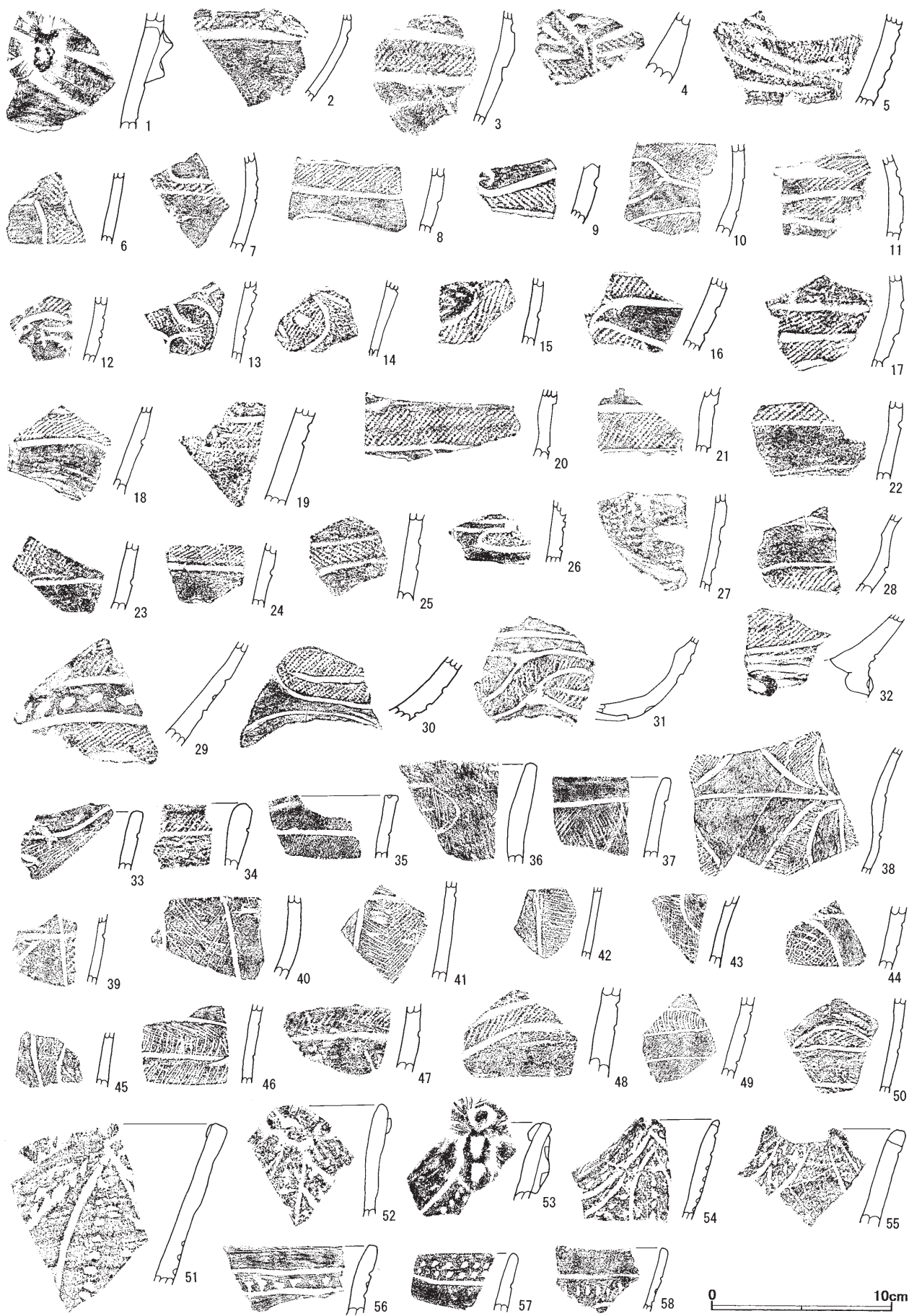


第29図 調査区出土土器 (3)

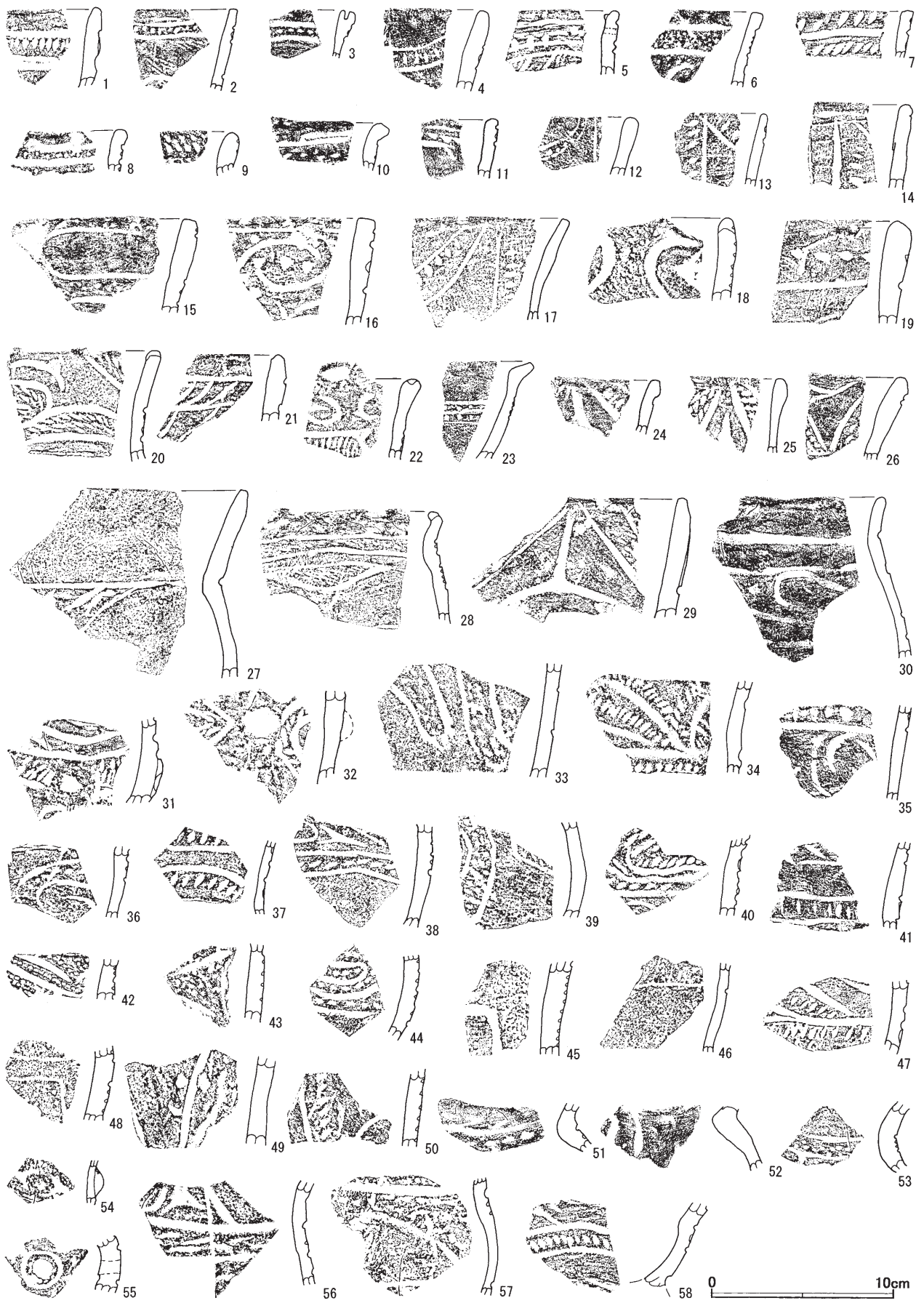
沈線のみられるもの、30～33は沈線で縁どられた細い隆帯上に細かな刻みを付すもの、34は、屈曲する胴部に丈の高い隆帯が貼られるもの、35～41は、沈線に縁どられた帯縄文の観察される胴部資料である。37では円形の貼瘤が、40・41では双刺瘤の付されるものである。

第29図1～13は、いわゆる魚尾状ないしこれに類する突起をもつ波状縁深鉢形土器の口縁部資料である。1は、波頂部に縦位の刻み3条が観察される丸い瘤状の突起が付される。波頂部外面にも縦位の刻み2条のみられる楕円形の貼付が配され、この下の文様帯には三叉文がみられる。2は、波頂部には縦位の刻みの付された魚尾状突起が付され、ここから外面に縦長で横位の刻みの付く楕円形の貼瘤が付される。この内面には中央刺突を持つ円文が配される。また、波頂下の区画内にはおそらく三叉文となる弧線が向き合って配置される。3は、上向きの弧線の引かれた魚尾状突起の下に、2段にわたりいわゆるブタ鼻状の双刺瘤が付される。4・5も魚尾状突起の下に双刺瘤の配される波頂部資料である。7は貼瘤が剥落したもの、8は、隆帯の両端を上げ魚尾状風に見せるもの、9は、あまり両端を張り出させないタイプの魚尾状突起である。いずれも突起を起点に貼瘤を垂下させる。10は緩波状縁を呈し、頂部に双頭となる小突起をもつもの、11は、鉢巻状の粘土紐をよくなでつけているもの、12は、2段の大型の双刺瘤のみられる波底部資料、13は、魚尾状突起自体に双刺瘤の付されたものである。14・15は双刺瘤の付される平縁土器である。16～18・27は、波状縁深鉢の波底部付近の資料である。口縁部は肥厚しない。18では、波底部に環状貼付が付される。20・21はごく緩い波状縁を呈する口縁部資料で、波頂部から縦位の縄文帯が垂下することがわかる。後者では刻みの付けられた隆帯が付される。22は、平縁土器の口唇部に装飾性の低い突起が付された事例である。23～26・28～36は、口縁部付近に帯縄文のみられる平縁土器である。23ではレンズ状の縄文帯が右下がりに傾斜し破片右端に三叉文の脚端が覗くもの、26・29は最上部の縄文帯が上開きの弧線を描くもの、34～36は口縁直下を無文帯とするものである。37～47は、外傾する口縁部を縄文帯とするもので、「く」の字に屈曲する括れ部には沈線が引かれるものが多い。外傾する口縁部の幅は3～5cmほどで、39・40のように幅の広いものでは1指幅の縄文を2段に施文するなどしている。また、38～40のように口唇部に刺突を施すものや、41～45のように貼付文を持つものが認められる。48は、浅い鉢形を呈すると思われる平縁土器で、丁寧に器面調整された後、1条の沈線で下端区画された口縁部には振幅の大きな波状沈線が引かれ沈線下部を縄文で埋めている。区画線下の文様帯は地文を持たず、「S」字状入組文由来と思われる横走する蛇行沈線が施される。49は、口縁部に丈の低い突起を配する平縁の浅鉢形土器である。口縁部の小突起の下端を画すように短い弧線が引かれる。口縁部の縄文帯と胴部縄文帯とを区画するように1帯の磨消文帯が形成される。胎土は細粒砂が含まれるものの洗練されており、内面整形は丁寧である。50は、比較的大ぶりの広口壺形土器の口縁部資料と思われ、「く」の字に外傾する口縁部は、上開きの弧状の磨消文帯が連なる。弧線の内側にも沈線が引かれており、さらなる加飾が施されるものと思われる。磨消文帯を含め器面調整は極めて丁寧である。

第30図1は、2段の双刺瘤のみられる胴部資料で、瘤を起点とする文様帯の展開が窺われる。2～32は帯縄文の施された胴部から底部にかけての資料である。2・3は沈線に縁取られた浮き上がるような帯縄文の観察されるもの、6・7はクランク状の展開が窺われるもの、9は「S」字状の入組文のみられるもの、10は三叉状入組文の描出されるもの、12・13は入組弧線文の窺われるもの、14は玉抱き三叉文の施される資料である。15は弧線に沿ったレリーフ状の磨消部がみられるもの、28は、内面に稜を持つ浅鉢形土器と思われ、括れ部と胴部に横走沈線がみられる。29は、浅鉢の胴下半資料で、地文となる縄文帯を上



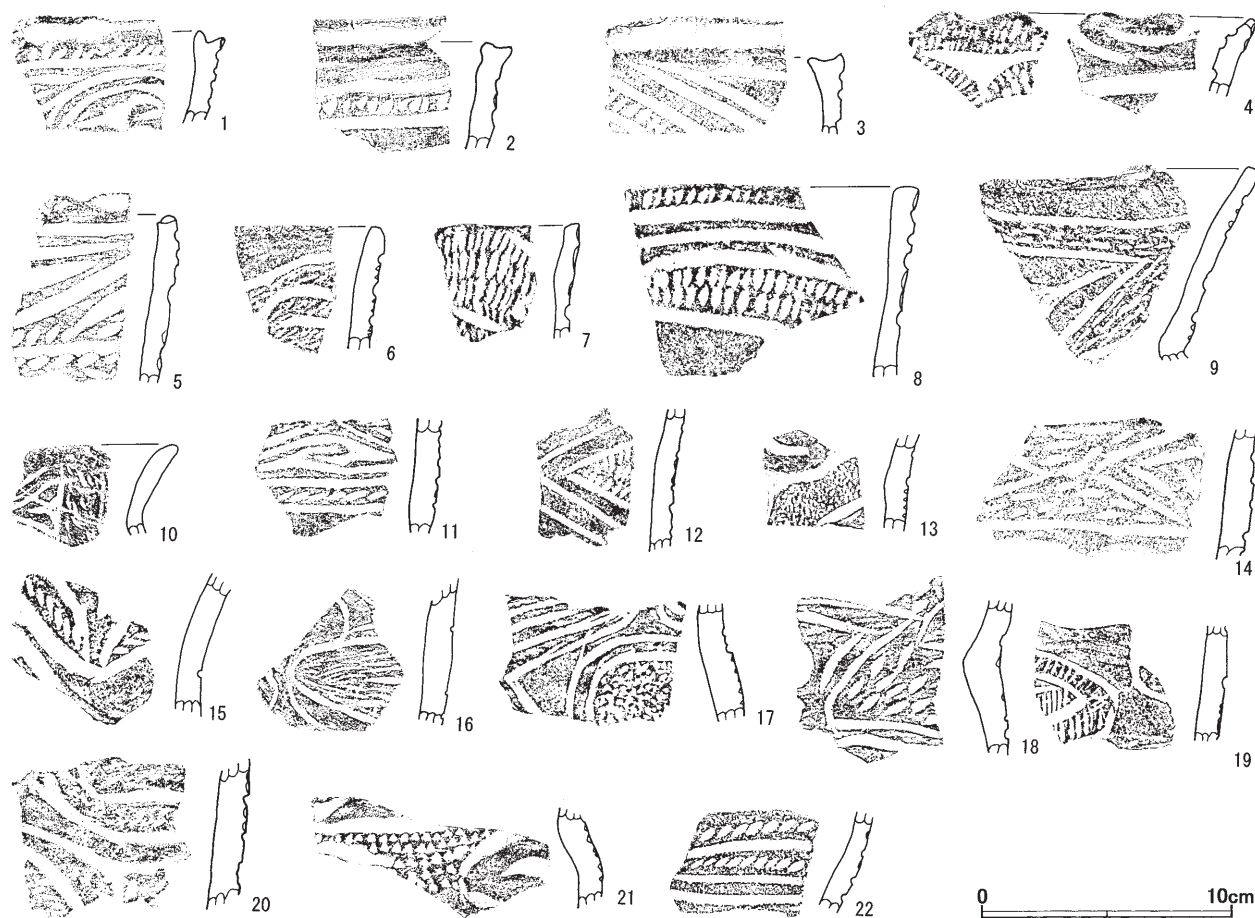
第30图 調査区出土土器 (4)



第31図 調査区出土土器 (5)

下に割るように刺突を有する磨消文帯が器面を巡る。表裏の器面調整は極めて丁寧である。30は、浅鉢形土器の胴下半部の資料と思われる、横位に大きく展開する入組弧線文が窺われる。31は頸部内面に稜を持つ浅鉢形土器の胴部資料で、胴部には三叉状入組文を「S」字展開させた縄文帯が形成される。内外面の器面調整は極めて丁寧である。32は、台付浅鉢の鉢底部の資料で、鉢底外面にはレンズ状を呈すると思われる縄文帯が看取される。また、脚台部外面には刺突を伴う円形の貼瘤が付される。33～50は、細密沈線文系の一群である。33は大振幅の波状縁を構成するもので、口縁部を無文とし、波頂下に展開すると思われる菱形区画に細密沈線を充填する。34～37は平縁となるものである。34は口縁部を細密沈線帯とするもの、35・37は口縁部に無文帯を置き口縁部縄文帯の地文を細密沈線とするもの、36は、口縁部に配された楕円区画に細密沈線を充填するものである。38～50は胴部資料で、38は、胴部に引かれた縦横の区画沈線の内側に弧線を組み合わせた細密沈線帯を設け中央には菱形の磨消部を形成するものである。39・41でも縦横の沈線が観察される。細密沈線の施文状況に着目すると、41では細密沈線は矢羽根状に施文され、43でも一部矢羽根状を呈する。40・44では格子目状に、49では曲線状に施される。51～55は刺突文帯を持つ大振幅の波状縁土器の口縁部資料である。51は口縁に沿った刺突文帯と波頂部から垂下するレンズ状の刺突文帯がみられる。波頂部には鉢巻状の粘土紐が貼られるほか、右脇にも同様の加飾が施されており、波頂部を含め3個1組の貼付装飾があるものと思われる。52・53も鉢巻状の粘土紐の張られたもので、後者では刺突を伴う2段の貼瘤が垂下する。54は双頭となる波頂部からレンズ状の刺突文帯が垂下するもの、55は、幅のある双頭の波頂部から口縁に沿う刺突文帯が形成される資料である。

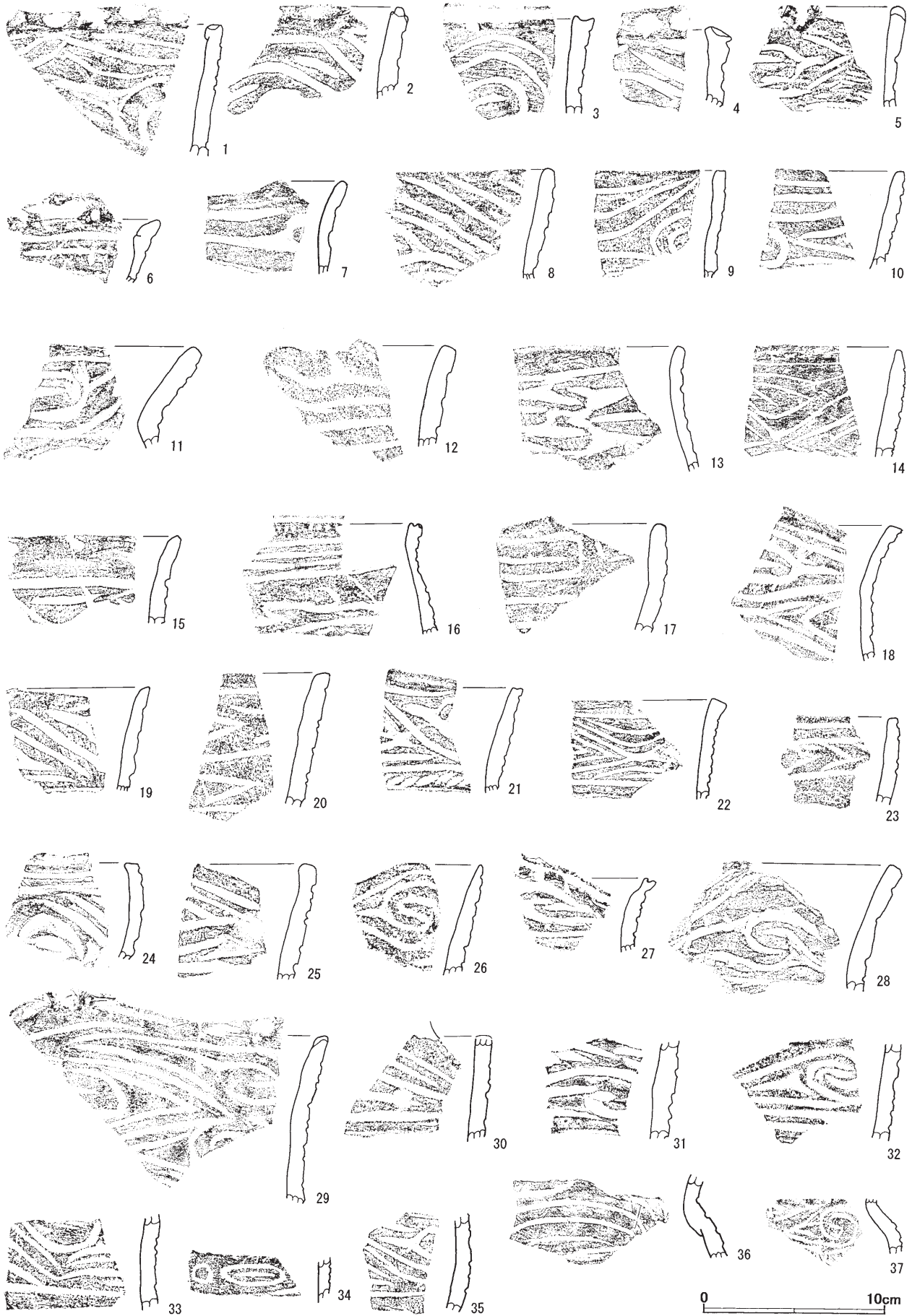
56～58・第31図26は刺突を伴う文様帯を口縁部周辺に配する平縁資料を一括した。56・58及び第31図1～3・5・6・8は、口縁部に幅の狭い無文帯を置き、その下に沈線で画される刺突文帯が横位に施されるものである。56では三角形の刺突、58・1などではやや縦長の刻み風となるもの、3・8では細い棒状施文具による円形刺突、6では細かな刺突が多数みられる。57・7・9では、口縁に沿って刺突文帯が形成される。57・9では2段に施文される。4・12～14・17では口縁部から垂下する刺突文帯や「八」の字状に開きながら垂下する刺突文帯が観察されるものである。15は、口縁部に大きな横長楕円区画が形成されるもの、16は、入組弧線文の描出されるもの、18は口縁部に小突起を持ち、磨り消しとなる弧状沈線が観察されるものである。20は、口縁部に小突起を持ち、弧状の刺突文帯が連なるもの、22は、口縁部に臼状の突起を持ち入組弧線文を構成すると思われる弧線が観察されるものである。24～26・29は口縁部から「八」の字状に垂下する刺突文帯の間隙に三叉文の施される資料である。27・28・30は口縁部が外反する広口壺形土器で、27では頸部の文様帯に左下がりの刺突文帯が、28では括れ部に横位展開の刺突文帯が形成されるとともに肩部に扁平な三角形の刺突文帯が観察される。30は「S」字状入組文の施された資料であるが刺突の施されないタイプの資料である。31～58は、刺突を伴う文様帯を胴部に配する資料を一括した。胴部に施文される刺突文帯は斉一性の高い部分と規制の弱い部分とがあるようであり、様々な変化が窺われる。31・32は円形の刺突を伴う資料、33は、斜めに垂下する2帯の刺突文帯が観察されるもの、34は土器面を巡る刺突文帯と文様帯の中に斜めに展開するとみられるレンズ状の刺突文帯が観察されるもの、36は、入組弧線文を基にした刺突文帯が観察されるもの、38は刺突文帯の間隙に三叉文が配されるもの、39は不規則な刺突が複数列施される刺突文帯がみられるもの、40・44は大きく曲がる弧状の刺突文帯が観察されるものである。42は細かな刺突が整然と列をなすもの、43は三叉状の区画内に刺突が充填されるもの、45は細かな刺突が不規則で高密度に施されるもの、46は引きずるような刺突が施されるもの、49



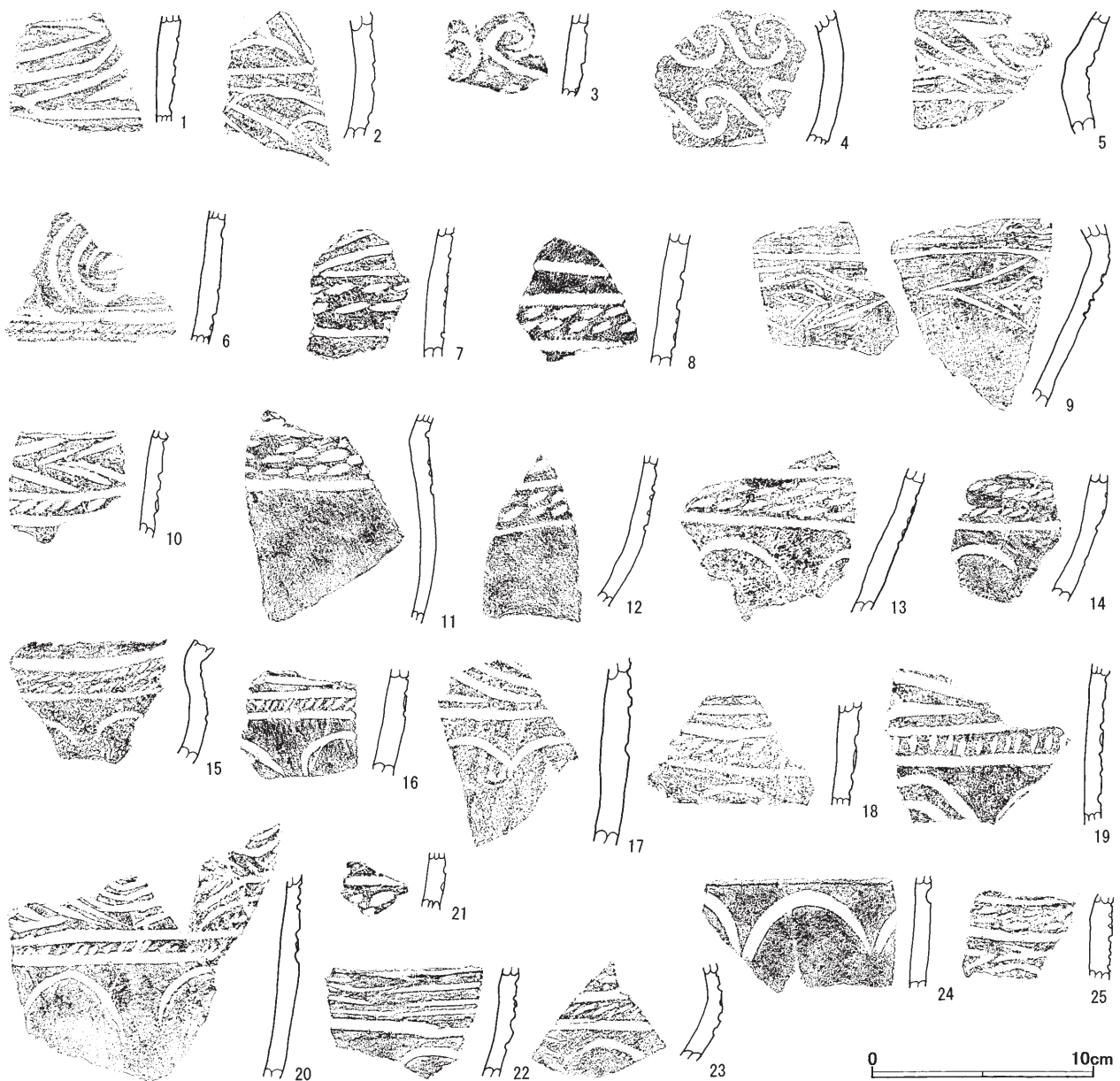
第32図 調査区出土土器 (6)

は大きな刺突が散漫に施されるもの、51~53は「く」の字に屈曲する口縁部を持つ壺形土器の括れ部付近の資料と思われる、51・53では括れ部を巡る刺突文帯が観察される。54は、中央刺突を持つ円形貼付を抱く三叉文がみられ周囲に細かな刺突が施されるもの、55は、胴部を開けられた円窓の周りを沈線で囲み、その外側に散漫な刺突が施されるものである。56は胴部文様帯に三叉文を配し、文様帯下端を刺突文帯で画すもの、57は、文様帯に鋸歯状沈線を引きその上側に刺突を充填するもの、58は、頸部内面に稜を持つ台付浅鉢の鉢底付近で、口縁部文様帯下端を区画する刺突文帯が窺われるものである。

第32図1~3は、口縁部文様帯の中に刺突文帯を持つ口縁部資料で口唇部には太めの沈線を引く。1は口唇部外縁に刻みのような刺突が施される。以下には三叉状入組文を主幹とするモチーフが窺われる。2は口縁部に横走する刺突文帯がみられるもの、3は、右下がりに傾斜する刺突文帯がみられるものである。4は、口唇部に付された双頭の突起部の資料で、外面には陰刻の三叉文が施され周囲に刺突が施される。内面には突起を取り巻く沈線と口縁部を巡ると思われるやや太い沈線とが窺われる。5は、太い鋸歯状の区画沈線と文様帯の下端を閉じる刺突文帯が観察される。6は細かな刺突の充填される三叉状入組文の観察されるものである。7・8は、レンズ状となる区画内に、爪形文風の連続刺突を多段にわたって整然と施す資料である。9は、外反する口縁部に鋸歯状または三角形を呈すると思われる区画を刺突文帯で形成しその中に三叉文を陰刻する。10は、外反する口縁部に刺突文帯による縦位区画を設け、その両脇に三叉文が取り込まれた三角形区画が配されるもの、11は刺突文帯による扁平な三角形区画内に三叉状入



第33图 調査区出土土器 (7)



第34図 調査区出土土器 (8)

組文が配されるもの、12は、菱形区画内に爪形文風の多段の刺突が施されたもの、13は三叉状入組文外縁に細かな刺突がみられるもの、14は、菱形区画の外側を刺突で埋めるもの、15は、レンズ状刺突文帯で形成される鋸歯状または三角形区画の中に三叉文が配されるもの、16は細く引っ掻くような刺突の施された扁平な楕円区画が窺われるもの、17は、2重の弧線で囲まれた区画内に刺突が充填されるもの、18は、不規則な区画内に紡錘形の刺突が充填されるもの、19は、爪形文風の刺突が充填された扁平な楕円区画がみられるもの、20は、曲線を描く刺突文帯の間隙に三叉状入組文が配されると思われるもの、21は、膨らむ胴部に太めの沈線で入組弧線文が施され、間隙を埋める三角形の刺突が整然と施されるもの、22は、横走る沈線と刺突列とが重畳するものである。

第33・34図は、口縁部文様帯に太めの直曲線を用いて鋸歯状や菱形等の区画を形成し、区画内に三叉状入組文を配する一群である。文様帯下端は刺突文帯で閉じ、区画下に連弧文を配する。1~6は、口唇部に楕円形の刺突を施す。5・6のように部分的に貼付文を付すものもある。1では右下がりの三叉状入組文

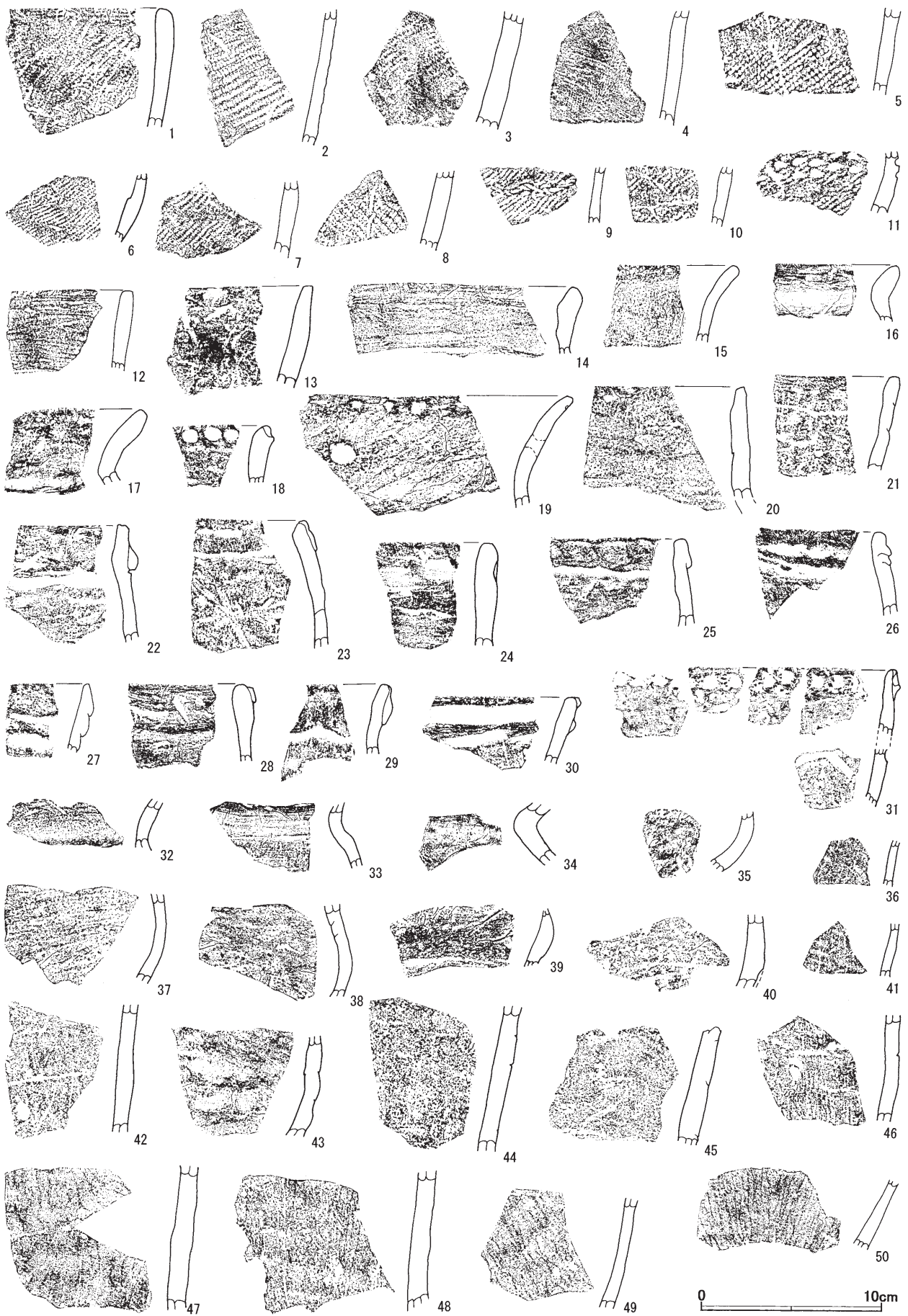
が施される。3では横位の粗い器面調整の上に渦を巻くような沈線が引かれている。中心に沈線末端が覗くことから、この部分が三叉状入組文の上枝と思われる。7・12は口縁部に三角形の小突起を持つもので、両者ともこの突起に合わせるように脚の長い三叉文が窺われる。8は多重の沈線で形成される区画中央に三叉状入組文が配されるもの、9は入組弧線文が、10は中央刺突を持つ円文が施される例である。11は口縁部が「く」の字に屈曲するもの、13は陰刻となる三叉状入組文が2段に描出されたもの、14は細かいシャープな沈線で三角形及び菱形区画を形成し、中央に区画に倣い角ばった「の」の字状のモチーフがみられるものである。16は、口唇部に1条の沈線を引き、この外縁を切るように刻目文を施す。胴部には横位に連続するステッキ状の入組文をベースとする沈線が引かれる。17は、長方形区画を入組ませるものと思われる。18は波状縁を呈するものと思われ、扁平な菱形区画内に三叉状入組文が配される。19～22は平縁深鉢の口縁部に形成された幅の狭い文様帯に鋸歯状の区画が形成され内部に三叉状入組文が配される例で、19・21は単段、20・22は2段に構成される。特に22では菱形の構成をとる。23は、口縁部に形成された矢羽根状の沈線帯である。24はやや内湾する口縁部に形成された菱形区画内に「S」字状の入組文が施される事例である。25～30は、この種の一群の内、波状縁を形成するものである。いずれも波状口縁を利用した菱形区画内に三叉状入組文を配置する。26は口縁部を薄く尖らせるもの、27は口唇部に1条の沈線の引かれるもの、29は口唇部の波頂部と波底部に円形の刺突を配し、この間を太い沈線でつなぐものである。また29では波頂下に形成された菱形区画内のほかに波底部にも2段の三叉状入組文が配される。31～37と第34図1～6はこの種の土器群の胴部資料である。31では入組弧線文の末端に別の沈線を付し三叉文に見せようとしている。32では入組弧線文を囲むように三叉文を陰刻している。34は、円文と中央に沈線の引かれた楕円文が看取される。35は、胴部に三叉文の脚が伸びる例、36・37は強く内湾する壺形となる資料と思われ、前者では菱形区画を形成するであろう下開きの弧線文が、後者では渦巻状のモチーフを縁取る三叉文が確認される。

第34図3・4は「S」字状の入組文が描かれた胴部資料、5は、屈曲する胴部に三叉状入組文が描かれるものである。6は、渦巻状となるものと思われる弧線文と文様帯下端を画す刺突文帯が観察されるものである。7～25は、文様帯下端区画となる刺突文帯やその下に形成される連弧文の描かれた資料である。9は、大きく張り出した胴部に引かれた1条の沈線の下に菱形状の入組文が形成されるものである。10は、刺突文帯の上部に矢羽根状の沈線が連なるもの、11・12は刺突文帯の下が無文となるもの、13～25は、刺突文帯と連弧文がセットとなるポピュラーな事例であるが、刺突の様子や連弧文の弧線の様子にはバラエティーがみられる。15は細かな刺突が連続して施され、連弧文同士の間隔のあくもの、17は、刺突文帯のないもの、19は連弧文の弧線が2重になるもの、22は、刺突が横位沈線化しているもの、25は刺突文帯と連弧文との間に小さな三叉文あるいは矢羽根状の沈線がみられるものである。

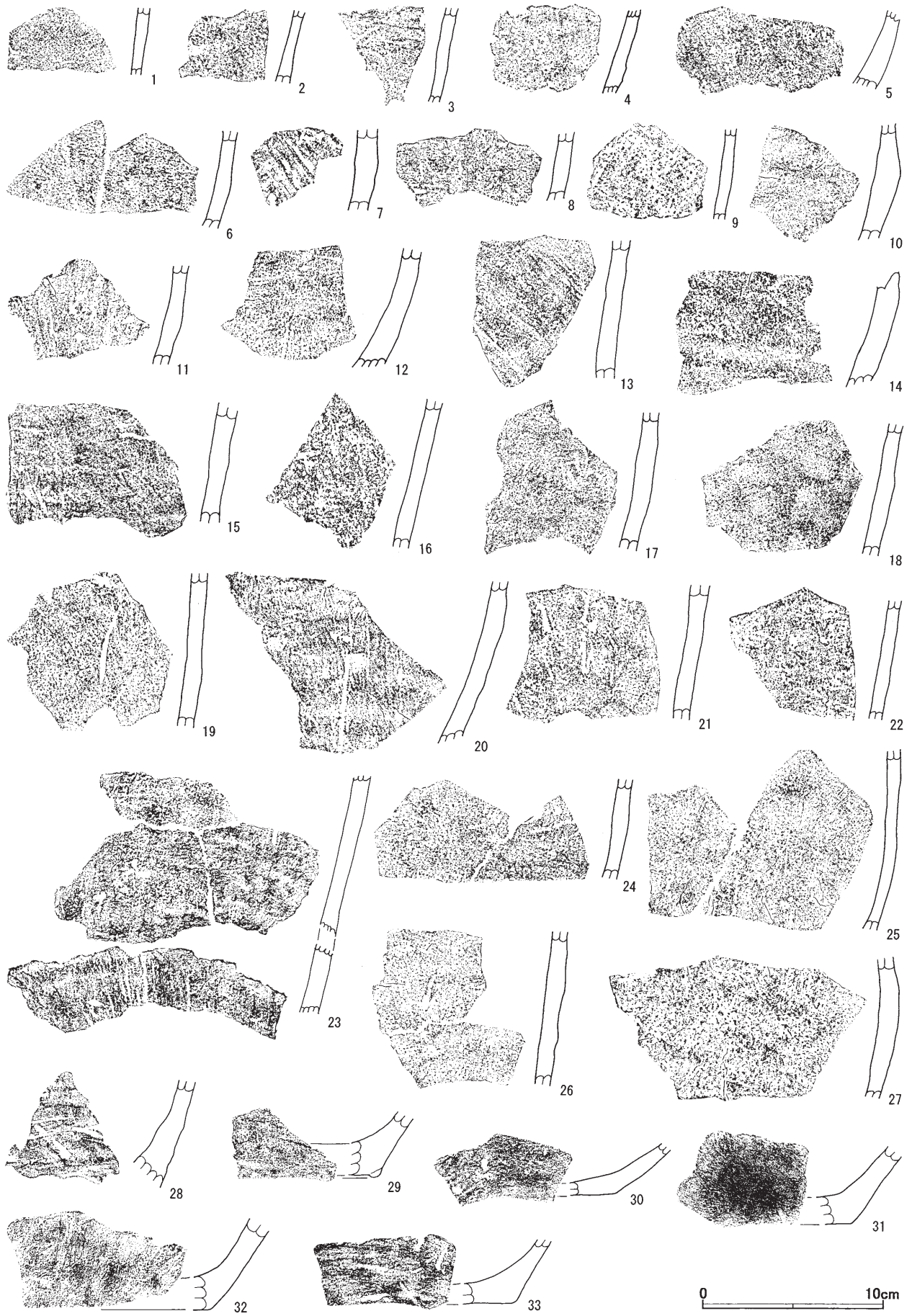
第35図1～9は、全面に条線文の施された粗製土器で、多くは口縁部が内湾する砲弾形を呈する深鉢形土器となるものと思われる。1・2・4～5は横位の条線文が観察される。3・7・8では左右に傾斜を持つ斜位の、9ではほぼ縦位の条線文が引かれる。10～39は、口縁部に刺突文帯を形成する粗製土器の一群である。口縁部を肥厚させたり、縦の高い隆帯を貼るものもみられる。10～15は、口縁部に篋状施文具による連続刺突列を配し下端を沈線で閉じるものである。口縁部の肥厚は目立つものではない。16～18は肥厚する口縁部に縄文を施すもので、前2者は口縁部文様帯内に縄文の施される弧線文区画などが観察される。20は、肥厚する口縁部に縦位の隆帯を貼り、これを起点とする横位の長方形区画を配する。21～28は、



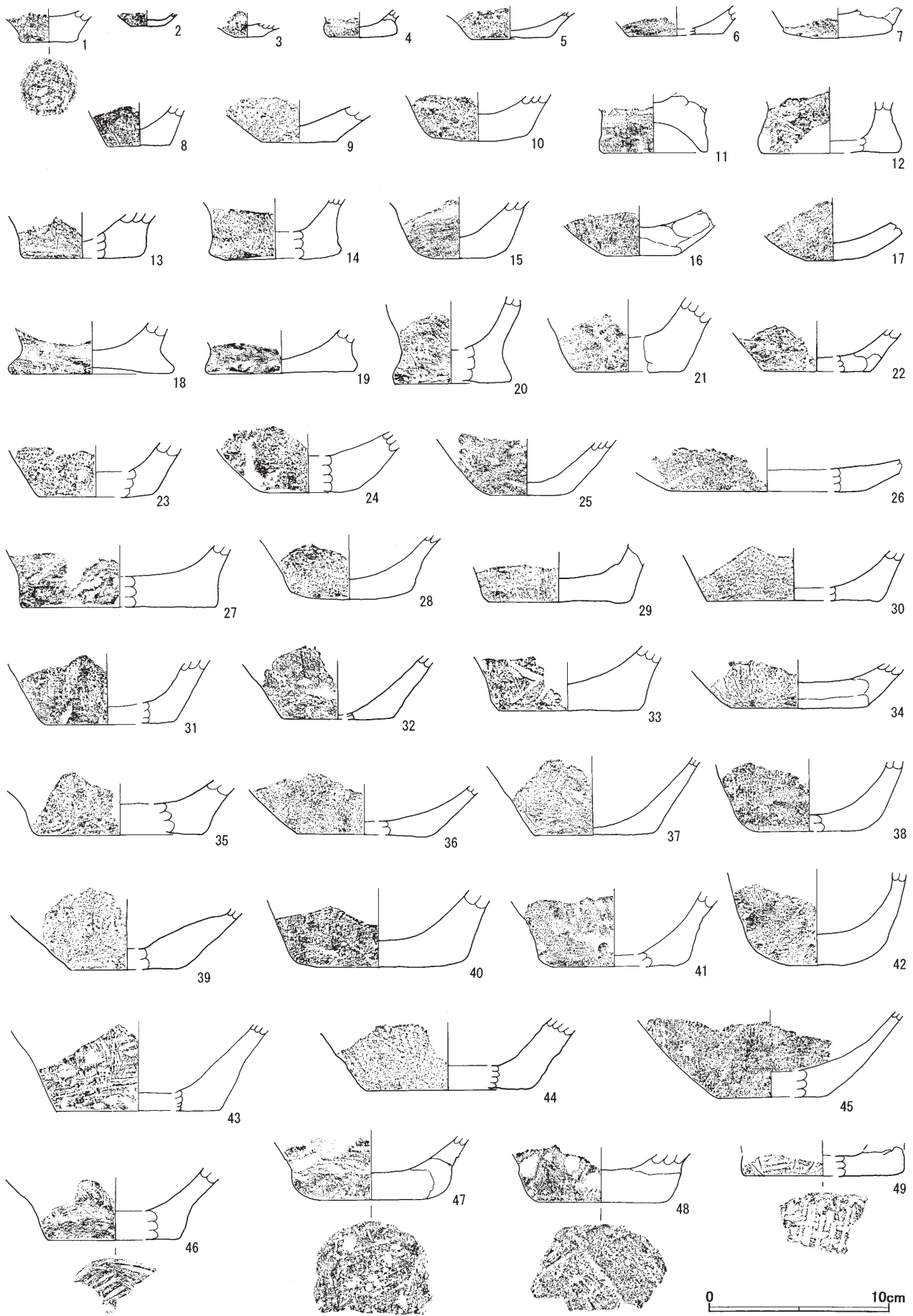
第35图 調査区出土土器 (9)



第36図 調査区出土土器 (10)



第37図 調査区出土土器 (11)



第38図 調査区出土土器 (12)

肥厚させた口縁部外縁にさらに粘土紐を貼り連続刺突を施す。以下の口縁部文様帯には横位から斜位の条線文が施される。30～39は、口縁部文様帯に様々なモチーフが描かれるものである。30は、刺突を持つ隆帯が斜行するもの、31は、縄文の充填される弧線区画がみられるもの、32は、縦位のレンズ状区画内に蛇行沈線が施されるもの、33は、肥厚口縁部から続く「C」字状の刺突を持つ隆帯が付されるもの、34は弧状沈線が配されるもの、35は、太めの沈線が斜行するもの、36は、横位の沈線が引かれるもの、37は背合わせの弧線文がみられるもの、39は、縦位の磨消文帯を垂下させ両脇に条線文を施すものである。40～48はこの種の土器群の胴部資料である。40は、2条の沈線で区画した刺突文帯で文様帯下端を閉めるもの、41は、多截竹管を押し引き上に刺突し区画帯とするもの、42・48は丈のある隆帯をつぶすように刺突を付し区画帯とするもの、43・44・46・47は丈の低い多截竹管を爪形文風に連続刺突し区画帯とするものである。

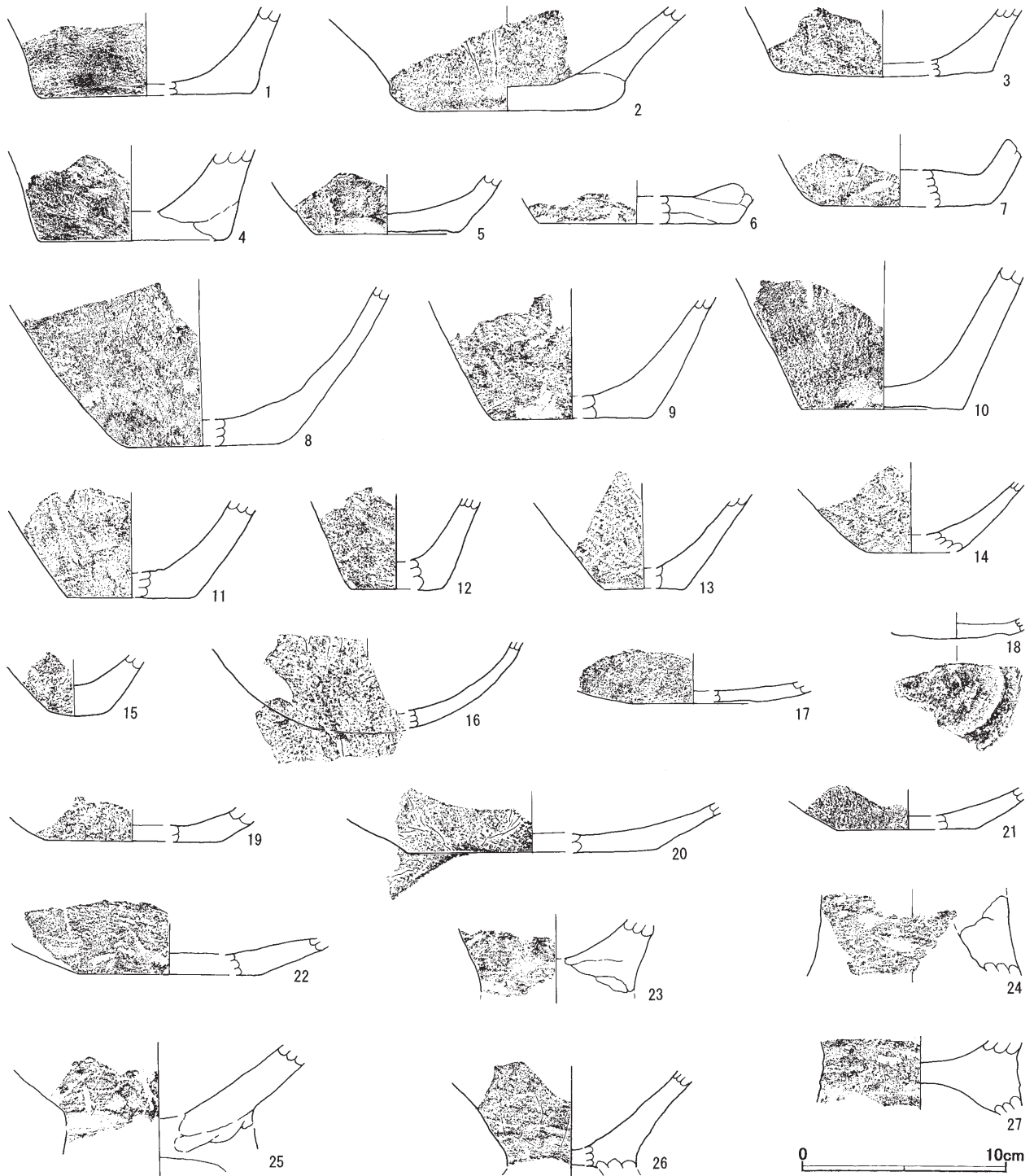
第36図1～11は地文に縄文の施される土器群である。11では、横位の刺突列が施される。12～31は無文または無文地に刺突等の施された口縁部資料を一括した。12・13は口唇部が角頭状となる外反気味の資料、19は口縁部が大きく外反するもので、斜位の整形痕を残し、口縁外縁部に刺突を施す。破片左端に焼成後穿孔の小孔が穿たれる。20・21は輪積痕を顕著に残すもの、22～29は、口縁部外面に輪積痕を意図的に残したり、隆帯を貼ったりして複合口縁化させたものである。30は、口縁部に細い粘土紐2帯を貼るもの、31は、粘土紐を貼り肥厚させた口縁部に篋状施文具で刺突を施し胴部には同様の施文具による沈線文が観察されるものである。胎土には2～5mmほどの砂粒を多量に混ぜる特徴的なものである。32～50・第37図1～27は、無文の胴部資料を一括したものである。32～34は、「く」の字に屈曲するものでいずれも横位に丁寧になでられている。35は丸くすばまる胴下半の資料、36・41は薄手の資料である。37・38は内湾傾向のあるもので、前者は丁寧な横位のなでが見られ、後者の内面には輪積痕が残される。43～46は胴部の輪積痕が残るもの、47・48・50は縦位の整形痕が顕著なものである。

第37図7・13・15などは斜位の整形痕が観察される。28～33・第38・39図は無文の底部資料を一括したものである。

第38図1～9は推定底径が5cmに満たないものである。安行式期の土器の底部は概して小さいが、とりわけ小型の一群である。1は底径3cm、2は底径2cmで器壁も薄いものである。4は、底面粘土板が張り出すもの、7はやや丸底風のもの11は底径6cmの上げ底となるものである。16は底部製作状況のよくわかる資料で底面粘土板の上にもう1枚粘土を貼り輪積みを進めたのち、外面に薄く粘土を貼り付けている。12・18～20は張り出し底となるもので、18は上げ底風でもある。20は底面の非常に厚いもので、2cmほどを測る。26は皿状のもの、36・39・45などは浅鉢であろう。46は底面に敷物と思われる圧痕が残るもの、47・48は篋削りの加えられるもの、49は網代底の例で、後期前葉のものであろう。

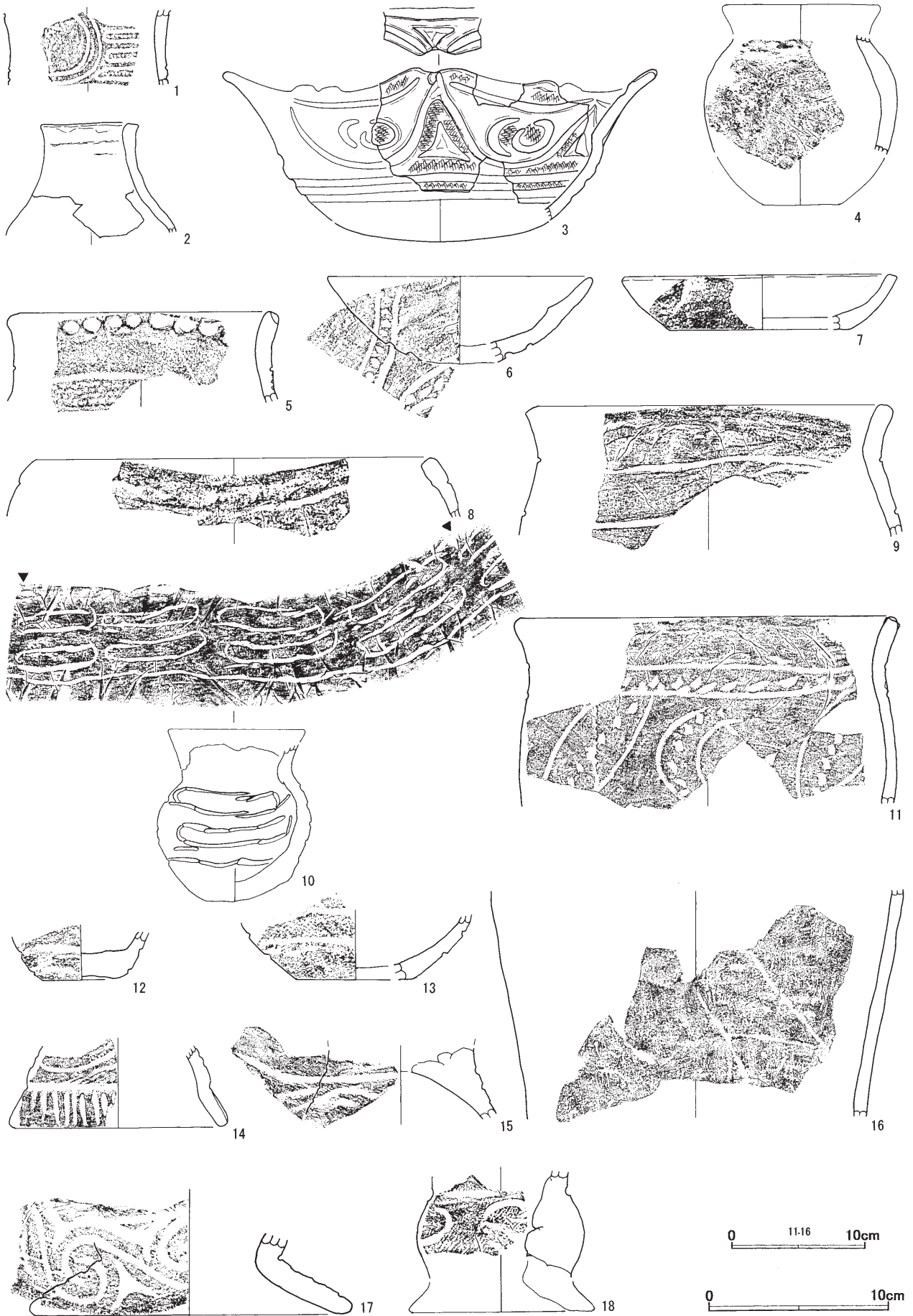
第39図6は、底面に2重の粘土板を持つもの、13・14は薄く条線文の残されるものである。16は薄手で丸底を呈するもの、17・18は底面の外周に浅く太い沈線を引くように窪ませるもので、19～22などと合わせ皿状を呈する資料であろう。20の推定底径は12.5cmほどを測る。23～27は台付鉢の鉢底部あるいは脚台部である。

第40図1は推定径9cmを測る注口土器の頸部資料である。2条の沈線で構成される円文と刺突の施される長楕円区画が重畳する。2は、推定口径5.5cm、残存高6cmほどの壺形土器である。粗い器面整形が施されるだけの無文の資料である。3は、推定口径24cm、推定高10cmほどの浅鉢形土器である。4単位の波

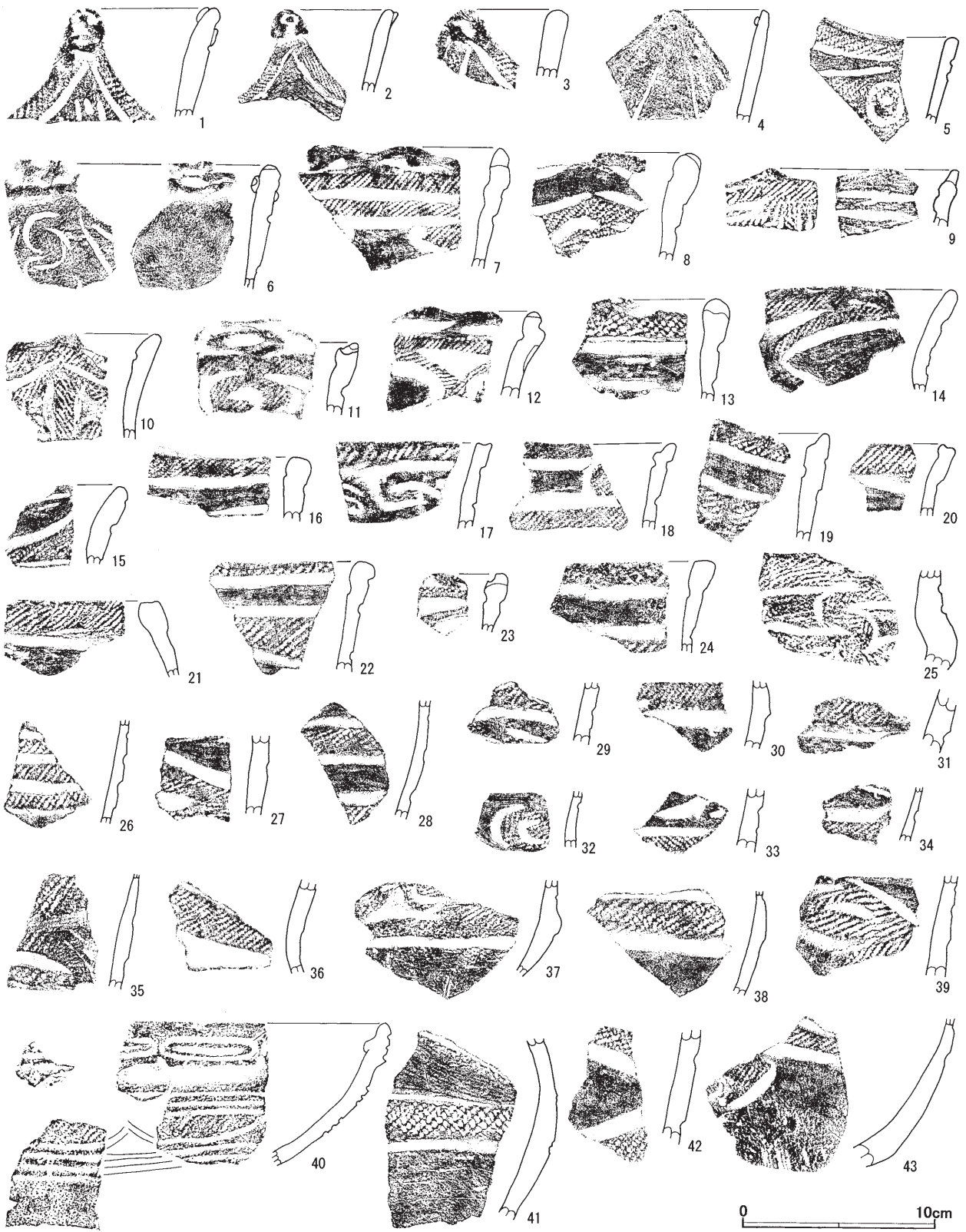


第39図 調査区出土土器 (13)

状縁を呈するものと思われ、双頭となる波頂下には縄文帯に縁取られた三叉文が陰刻される。双頭の突起の付された波底部にはいわゆる「の」の字文となる弧線が配される。波頂部内面には三叉文が配され、内面を巡ると思われる太い沈線が引かれる前浦式系譜の資料である。4は、球胴となる無文の小型の壺形土器で、推定胴径10.5cmほどを測る。5は、推定口径15cm、残存高5.5cmの広口壺形土器である。口唇部外縁に指頭で押し込むような大きな刺突列が配され、緩い括れ部には横位の刺突文帯が施される。6は、推定口径15cm、推定高5cmの浅鉢形土器で、よく整形された器面上に開きの刺突文帯と底部を巡る刺突文帯



第40図 調査区出土土器 (14)



第41図 調査区出土土器 (15)

とが観察される。7は、推定口径15cm、器高3cmほどの皿形の土器である。全体に無文で粗いので整形が加えられる。8は、推定口径22cmの大きく内湾する口縁部を持つ無文の粗製土器である。口縁部には輪積痕を意図的に残す。9は、推定口径20cm、残存高8cmの広口壺形土器である。括れ部と胴上半に引かれた2条の沈線が器面を巡る。10は、胴径8.5cm、残存高9cmほどの小型の壺形土器である。球形となる胴部に横位の長楕円形区画が2段4単位で巡り、この文様帯の下端区画線が器面を1周する。楕円区画を引く沈線は小刻みに切られ、楕円区画の両側から描き真ん中で合わせている様子が窺われる。調査着手間もなくF9グリッドから出土したものであり、第20a号土坑に帰属する可能性が高い。11は、推定口径28cm、残存高14cmを測る広口壺形土器である。外傾する口縁部を無文とし、括れ部に刺突文帯を置く。胴部にはレンズ状や三日月状の刺突文帯が配される。12・13は縄文帯のみられる底部資料で、やや上げ底となる前者の底径は5cm、後者の推定底径は7cmほどである。14・17は、台付浅鉢の脚端部である。前者は推定底径12cmを測る。脚端部を巡る1条の沈線の下は縦位の単沈線帯となる。後者は、推定底径18cmを測る裾の広いもので、「S」字状入組文とその間隙を埋める三叉文が観察される。焼成はやや甘く軟質である。15・18は、台付浅鉢の脚台部で、前者は、鉢底に接する付近である。推定径8cmほどを測る。後者は最大径9cmほど、器厚は厚い部分で3cmを測るもので、2段の脚である可能性が高い。縄文地に弧状の沈線が観察される。16は、推定胴径30cm、残存高16cmほどを測る無文の深鉢形土器である。全体に縦位の整形痕が顕著に残される。

第41図1～6は、姥山式系譜の大振幅の波状縁深鉢である。1～3は波頂部に鉢巻状の隆帯を付し口縁部に沿って帯縄文を置く。1は波頂部から刺突文帯を垂下させる。4は波頂部に小さな貼瘤を配するもので、「八」の字状の帯縄文を垂下させる。5は、波底部に中央刺突のある円文を配するもの、6は、鉢巻状の点部を持つ波頂部から入組弧線文が垂下するものである。7～39・41～43は帯縄文の施される一群で、その特徴から前浦式系譜の土器群であると思われる。7～24は口縁部資料である。このうち7～13では口縁部に2個一対の突起が付される。また9に顕著のように口縁内面に幅のある沈線が引かれる例が多い。9・10では突起付近から帯縄文が垂下するもの、8・11ではいわゆる「の」の字状文が形成されるもの、12・14は磨消部をやや削るようにして縄文帯を浮き立たせるものである。17は口唇部に沈線を引くように窪ませるもので口縁部文様帯にはやや角ばった三叉状入組文が看取される。18～24でも幅の広い沈線で縁取られたよく磨かれた磨消文帯と縄文帯とのコントラストの強い土器群である。25以降は胴部資料である。25は入組弧線文から派生させた磨消文帯を効果的に使う例、32は「の」の字状文となるもの、37は三叉文の窺われるものである。40は、前述の一群とは異なる系譜をひく異系統の土器である。胎土には石英を含む砂粒を顕著に含むもので、内面のよく磨かれた平縁の浅鉢形土器である。やや肥厚し段を持つ口縁部には、横位の沈線が引かれる長楕円区画文が展開する。無文帯を挟んだ胴部には3条の沈線帯が設けられ、縄文の充填される上向きの弧線区画が連なるようである。口縁部内面には隆帯を貼りその上部をよくなで、浅く幅の広い沈線としている。

第42～44図は在地の安行式土器に伴出した大洞式系統の土器群を一括した。1～3は、レンズ状の縄文帯を階段状に連ねる土器群である。2では、口縁部に円形の貼付文が観察される。4は、平縁の浅鉢形土器と思われ、口縁部と頸部に横長の紡錘形の刺突を連ねる刺突文帯が形成される。5～39は、平縁の口縁部資料で、丁寧に整形された口縁部に数条の沈線を引きこれを刻むように刺突を付すものである。口唇部には小型の突起が配される。10・11・13・14・33は口唇部外縁に刻みが付けられるもの、21～23・34は相互

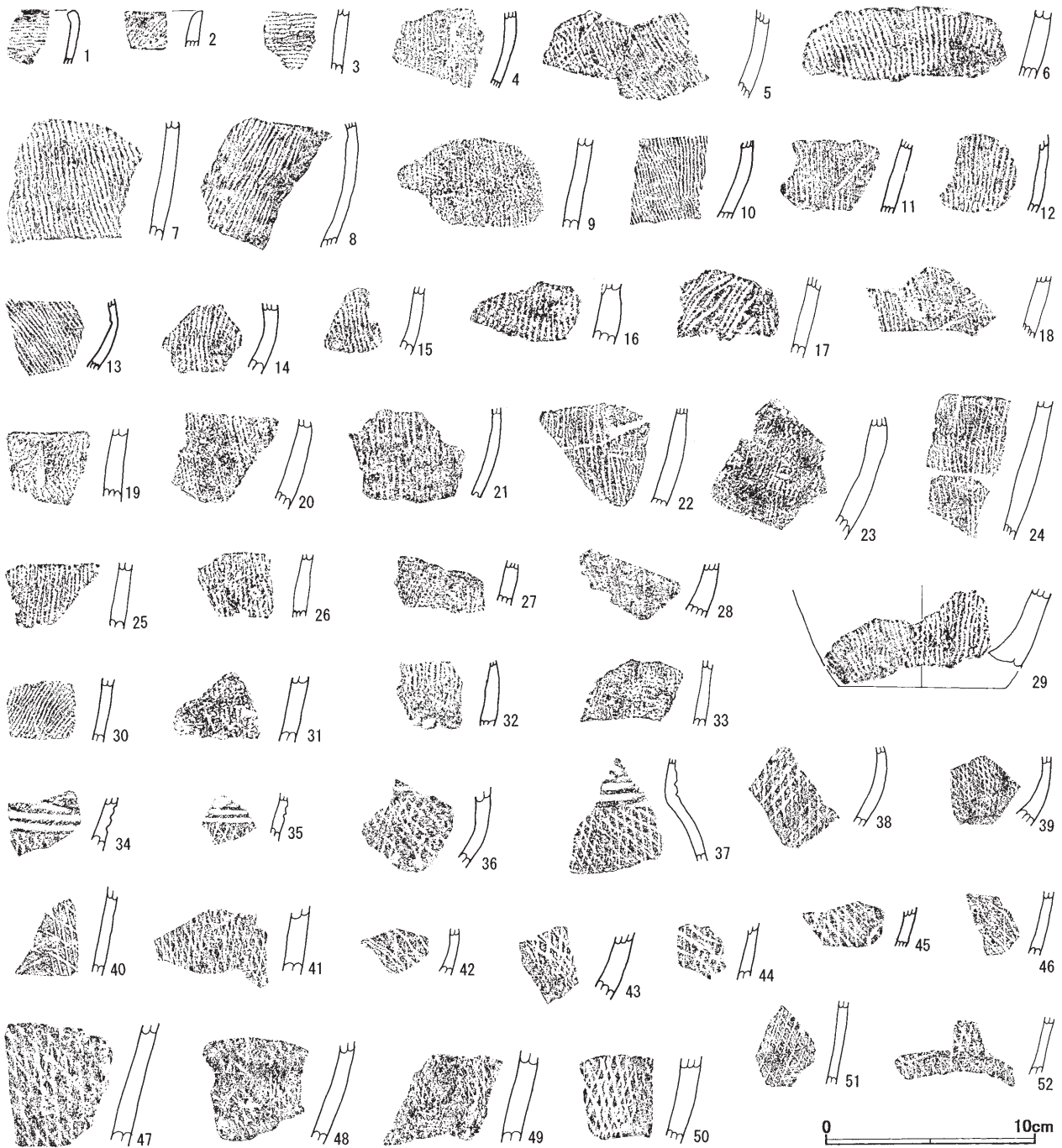


第42図 調査区出土土器 (16)



第43図 調査区出土土器 (17)

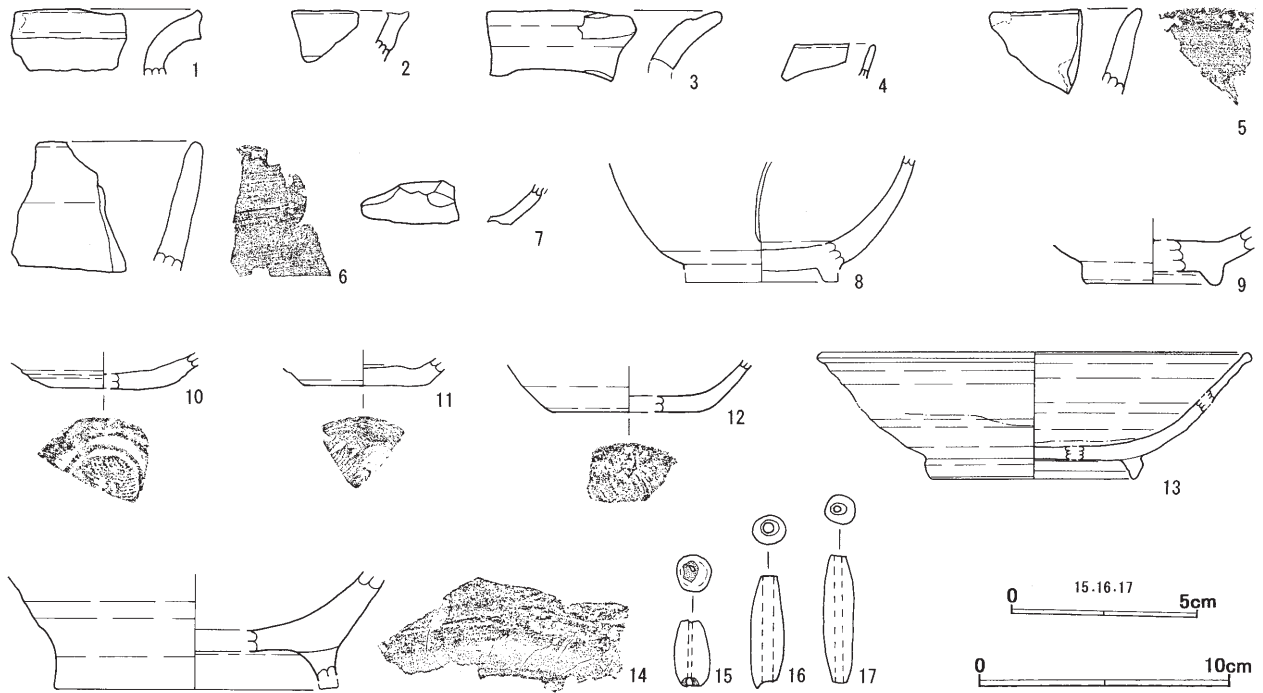
刺突風の刺突となるものである。40~46は、胴部に雲形文の観察される口縁部資料である。40・46では、口縁部に半肉彫り状の刺突文帯を持ち、以下に単節LR縄文の施された雲形文が施される。41は、深鉢形土器の口縁部資料と思われ、口唇部に三叉文を取り込む沈線が引かれる。42は外反する口縁部資料で口唇部に刺突が施されるもの、43は山形の小突起を持つ口縁部資料で口唇部には沈線が引かれる。44は、



第44図 調査区出土土器 (18)

口縁部に横位になでられた無文帯を持ち胴部文様帯の上端区画として刺突を持つ微隆帯を巡らせる。45は、口縁部文様帯の上端を画す1条の沈線を引き、以下に単節縄文の充填される曲線主体のモチーフが描出される。47は、壺形土器の口縁部資料である。48~50は磨かれた半肉彫りの施される小片、51はレンズ状の縄文帯の観察される胴部資料、52は縄文帯の中に刺突が施された資料である。53~65は、三叉状そのほかの入組文を取り込む雲形文の施された胴部資料である。

第43図は、総じていわゆるメガネ状付帯文の付される一群を一括した。1~37は口縁部資料である。1は、口縁部が屈曲する浅鉢形土器で、口縁部には2条の沈線が引かれ、屈曲部にメガネ状付帯文が観察さ



第45図 調査区出土土器 (19)

れる。胴部雲形文には単節LR縄文が充填される。2~5は肥厚する口縁部を持つ平縁土器で、口縁部直下に無文帯を置きやや張り出す屈曲部にメガネ状付帯文が観察される。6は直立する口縁部に縦横の沈線が引かれ、細かな刺突が充填される。屈曲部にはメガネ状付帯文が配されるが、連結部の突起は鋭く丈の高いものである。7~12・14・20~22は、メガネ状付帯文から連続するいわゆるA突起を持つものである。7~10・15・21・35では波頂下に三角形の陰刻がみられる。内面にも三叉状の陰刻がみられる。8・9・11では波頂部に楕円形の陰刻が付される。18~20・22では、外面のメガネ状付帯文の連結部に合わせるように口唇部と内面に三叉文を取り込んだ沈線が引かれる。24は口縁部に外側向きの楕円形の貼瘤がみられるもの、25~27は口縁外面に小型のメガネ状付帯文の付されるもの、31はメガネ状付帯文の連結部に合わせて下部の沈線から分枝させ三叉文を構成するものである。38~47は、メガネ状付帯文の観察される胴部資料である。

第44図は、前述の大洞式系統の土器群に伴う撚糸文を施されたものである。1・2は口縁部資料で、前者では横走する、後者では斜行する撚糸文が観察される。3は横走する撚糸文が観察されるが、その他の資料は概ね縦位から斜位回転される。29は、推定底径8cmほどの底部資料である。34~52は網目状撚糸文の資料である。34~37は、上部の文様帯の下端が窺われる資料である。

第45図は、調査区から出土した中世期の資料である。1~3は常滑産と思われる自然釉の付く口縁部資料である。1は甕、2・3は鉢であろうか。4は白磁、5・6は同一個体と思われる播鉢の口縁部である。7~9は青磁碗（8は前掲）、10~12はかわらけの底部資料である。13は、推定口径17cm、器高5cmを測る灰釉陶器の高台付の浅い碗である。14は、推定底径11cmを測る在地産の高台付の壺ないし甕の底部資料である。15~17は、管状の土錐である。

土製品 (第46~50図)

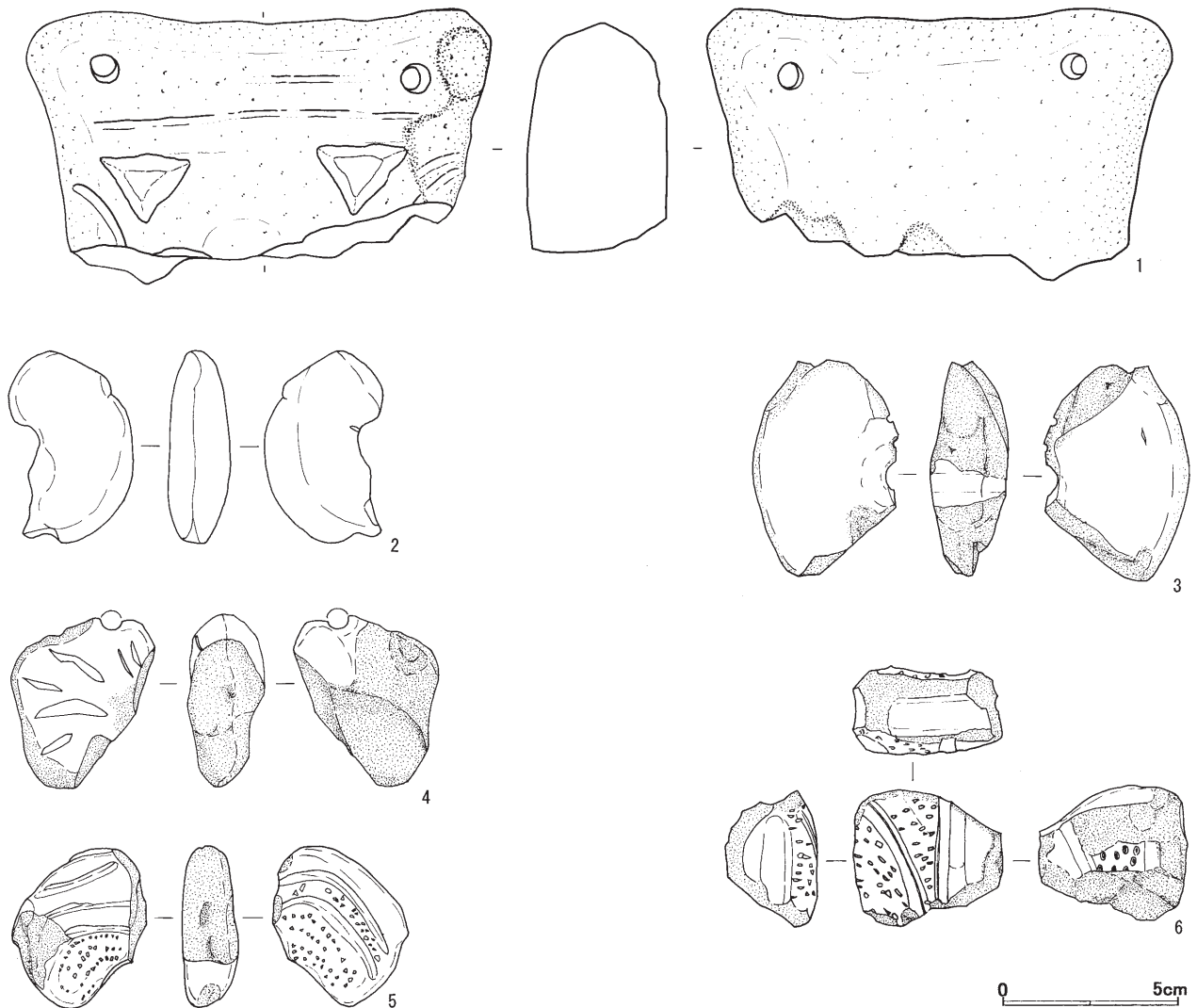
第46図1~9はミニチュア土器である（1は前掲）。いずれも無文の資料である。2は推定口径12cmを測



第46図 調査区出土土製品 (1)

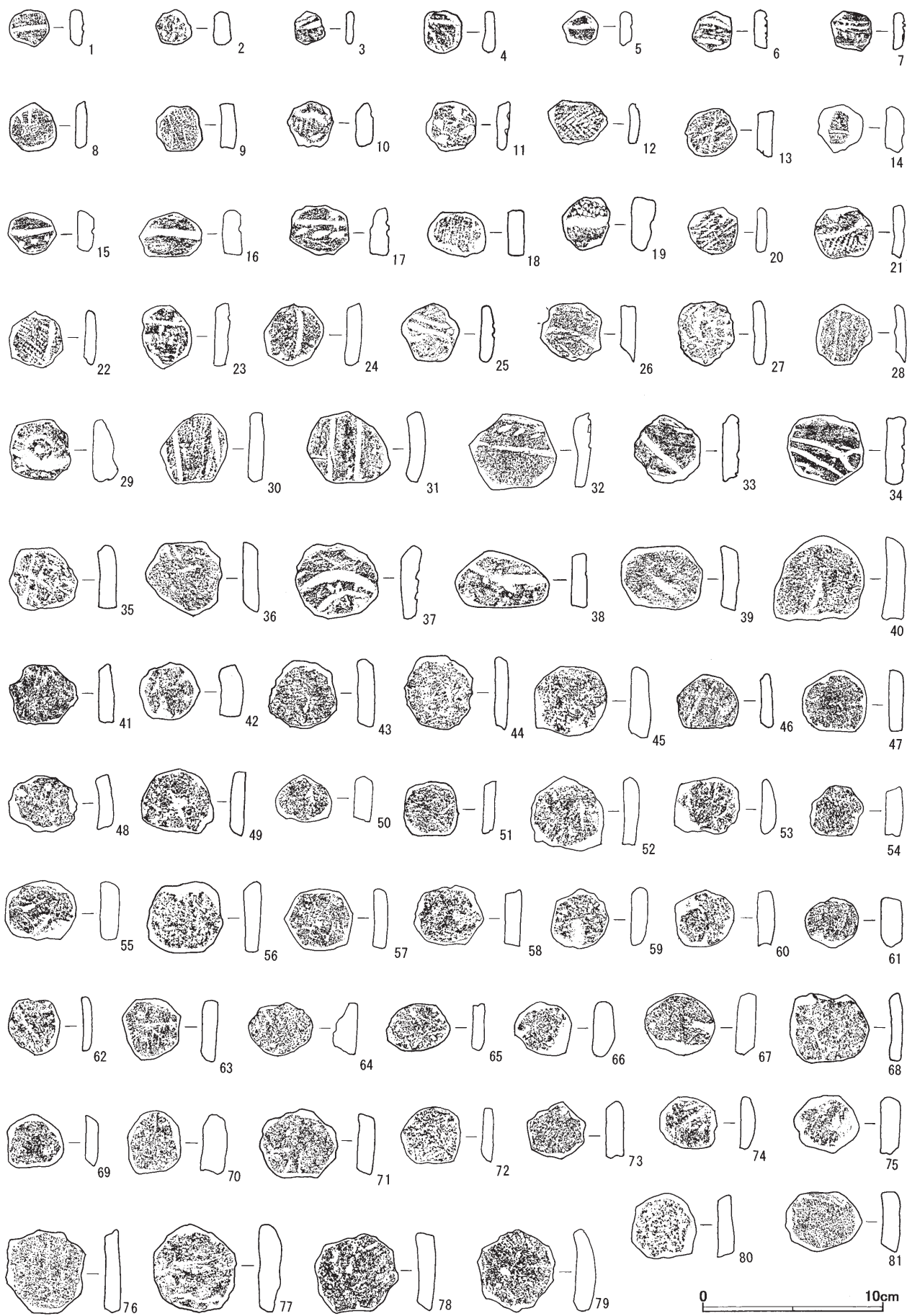


第47図 調査区出土土製品 (2)

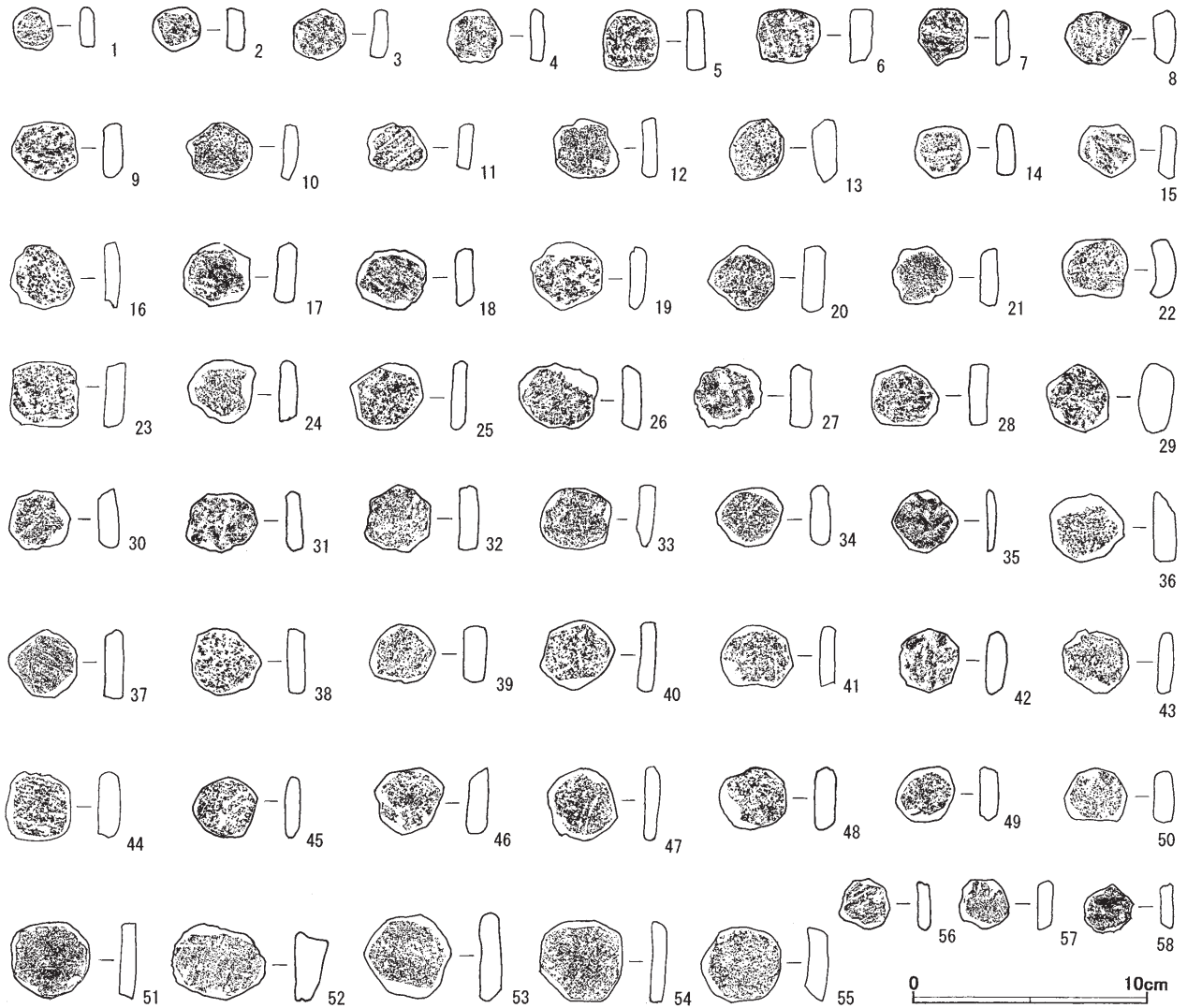


第48図 調査区出土土製品 (3)

り赤彩痕が残される。5は推定口径5cmである。6は丸底となるもので推定胴径6.5cm、7は壺形を呈するもので推定口径4cmを測る。8・9は注口土器で、前者の推定胴径は10cmである。10～13は、縄文後期段階の土器の注口部や装飾把手（11は前掲）である。10は注口下に双刺瘤の見受けられる後期安行式段階のもの、12・13は加曾利B式期の装飾把手であろう。14は、土器に付された人面装飾である。帯縄文を持つ口縁部につけられたもので、三角形の顔面の中央に欠損するが鼻が付され両脇に切れ長の刻みで目が、口は小さな刺突で表現される。15・16は垂飾である。前者は曲玉状で、上部の欠損部に貫通孔の断面が観察される。後者は不整楕円形の垂飾で、上部中央に貫通孔が穿たれる。17～19は玉類で、17は直径1.4cm、長さ2.8cmの管玉、18は直径1.1cmの小玉、19は直径7mm、長さ1.4cmの管玉である。20は環状を成すと思われる扁平な土製品で、表裏に入組弧線文が観察される。焼成前穿孔の小孔が穿たれる。21～44・第47図1～3は耳飾である。21・22は小型の糸巻形の資料で、大きさ、文様ともよく似ている。前者はD6グリッド、後者はE6グリッド出土で、近接して出土している。23はコルク栓状の中実無文の資料である。25・29～32・第47図3は、精緻な透かし彫りの施されるタイプのもので、薄く丁寧に仕上げられている。26～28・33～36・43・44・第47図2は滑車形の資料で数単位で入組文風の単位文が配されたり、周縁部に刻みが付されたりする。24・37～42・第47図1は無文の滑車形耳飾である。



第49図 調査区出土土製品 (4)



第50図 調査区出土土製品 (5)

第47図4は不整形の粘土塊、5・6は有溝土錐である。7~14は土偶である (7・11は前掲)。8は土偶の顔面の破片資料で、鼻であると思われる。9は、ミミズク形土偶の腕と思われる。10・12は無文の土偶の胴部資料で、前者は胸部から臀部付近まで、後者は頸下から腹部付近の資料である。13は脚部の資料で沈線による入組文が観察される。14は、三角形の連続刺突列の観察されるやや角ばった資料である。15~17・第48図1~6は土版である。多くは断片で本来の形状を窺うことは困難である。15は、表裏に弧線を重ねる楕円形をとると思われるもの、16は正面には刺突文区画、裏面には三叉状入組文の観察される資料で、腕を広げたように張り出す部分に円孔が穿たれるもの、17は入組文と刺突文列の観察されるものである。

第48図1は、最大幅13cm、厚さ4cmを測る資料で、風化が著しい資料である。やや張り出す両端には円孔が穿たれる。正面では、横位の沈線2条が引かれた痕跡が残され、以下には下向きの三角形陰刻文と側面に開く弧線文が観察される。2・3は無文の資料で、後者は環状を呈し中央部に円孔が穿たれるものである。4は正面に放射状の沈線が観察され、破片上部に穿孔されていた痕跡が窺われる。5・6は沈線と刺突で飾られた資料で、後者は上端面を土器の口縁部のようにやや溝状に窪めるものである。

挿図番号	出土位置	最大径(cm)	重さ(g)	挿図番号	出土位置	最大径(cm)	重さ(g)	挿図番号	出土位置	最大径(cm)	重さ(g)
11図	4 SK1	3.4	9.1	49図	27 D8	3.5	9.0	50図	3 F6	2.3	3.4
	39 SK3	2.7	4.4		28 E8	3.2	7.6		4 E7	2.3	2.7
12図	23 SK6	3.0	6.7		29 D3	3.6	16.2		5 F4	2.8	6.4
	24 SK6	3.2	8.7		30 F7	4.1	16.7		6 D4	2.7	7.9
	32 SK8	2.7	5.0		31 F4	4.6	17.8		7 D5	2.5	4.0
15図	31 SK9	3.0	9.8		32 E9	4.9	19.6		8 D6	2.7	5.1
	32 SK9	2.9	10.7		33 D4	3.7	14.6		9 G4	2.8	6.2
16図	5 SK10	2.8	6.2		34 D4	4.2	19.1		10 C3	2.8	3.6
	6 SK10	2.5	3.4		35 E6	3.9	15.1		11 D3	2.5	3.9
	7 SK10	2.5	4.4		36 E6	4.2	16.7		12 E8	2.9	5.0
	8 SK10	2.3	5.1		37 E5	4.4	21.2		13 C3	2.7	5.7
	9 SK10	2.4	3.2		38 表土	5.1	18.0		14 E5	2.4	4.2
	10 SK10	4.3	32.4		39 E6	4.6	20.1		15 F9	2.5	3.6
	11 SK10	2.8	10.3		40 E7	4.7	35.1		16 D3	2.8	4.7
	12 SK10	3.0	7.2		41 D7	3.8	11.7		17 D2	2.8	7.8
	13 SK10	2.7	7.4		42 E1	3.2	14.2		18 D4	3.0	6.9
	14 SK10	2.4	4.6		43 D6	4.0	14.3		19 F6	3.1	5.4
	15 SK10	2.5	5.3		44 D8	4.0	13.2		20 F9	2.8	8.7
	16 SK10	2.8	7.1		45 D3	4.4	21.8		21 E8	2.5	5.3
	17 SK10	2.7	4.2		46 D6	3.5	9.8		22 G7	2.9	7.0
	41 SK16	2.7	6.1		47 D3	3.7	13.1		23 D3	3.3	8.8
19図	21 SK18	2.9	6.5		48 D6	3.7	11.4		24 D3	2.5	6.0
	22 SK18	3.1	7.7		49 D3	4.0	11.0		25 F5	3.1	6.3
	23 SK18	3.0	4.5		50 D3	3.1	9.1		26 D8	3.3	9.4
	24 SK18	3.1	15.6		51 D3	3.0	7.5		27 D4	2.9	7.7
	25 SK18	3.1	7.9		52 D3	4.3	15.7		28 F6	3.0	8.3
	26 SK18	3.2	8.7		53 D3	3.8	10.9		29 D2	2.9	9.8
	27 SK18	3.2	9.5		54 D3	3.1	8.5		30 E5	2.6	6.7
	28 SK18	3.8	19.6		55 D3	4.0	17.2		31 D4	3.1	6.7
	45 SK20	3.0	6.9		56 F9	4.3	19.5		32 D6	3.1	7.5
	46 SK20	3.2	7.9		57 F7	3.7	13.8		33 D2	3.1	6.3
49図	1 E5	2.2	3.4		58 F7	3.7	14.2		34 E7	2.8	6.3
	2 D4	2.0	3.6		59 F7	3.4	8.6		35 D4	2.8	3.4
	3 D5	1.8	1.6		60 C3	3.3	11.1		36 D3	3.2	9.2
	4 C3	2.4	3.9		61 D4	2.9	10.2		37 E7	3.0	6.4
	5 E6	1.9	2.8		62 D2	3.3	5.9		38 F9	3.0	7.4
	6 D5	2.3	3.8		63 E7	3.4	11.7		39 E1	2.7	7.3
	7 D4	2.4	3.2		64 D3	3.5	12.1		40 H7	3.2	7.5
	8 E2	2.7	4.5		65 F3	3.6	7.5		41 F6	3.0	5.3
	9 E6	2.7	6.6		66 D2	3.2	12.2		42 D7	2.7	5.5
	10 D4	2.5	5.5		67 C4	3.8	16.6		43 C3	2.9	5.5
	11 E3	2.8	6.1		68 D8	4.6	15.6		44 D3	3.1	8.9
	12 D4	3.2	5.6		69 F6	3.3	8.7		45 F2	2.6	4.8
	13 E2	2.6	8.7		70 E7	3.3	18.6		46 F6	3.0	9.8
	14 E6	2.6	6.1		71 E2	4.2	16.8		47 D2	3.1	5.8
	15 E9	2.6	5.4		72 C3	3.3	6.6		48 D5	2.8	7.5
	16 F6	3.4	9.9		73 D7	3.3	10.1		49 E2	2.6	4.9
	17 E2	3.1	10.6		74 D3	3.2	7.0		50 F6	2.6	6.2
	18 G8	3.1	8.7		75 E5	3.6	13.6		51 C3 P1	3.5	9.0
	19 D4	2.9	9.7		76 E6	4.8	21.3		52 D6	4.0	17.5
	20 D3	2.7	4.5		77 E4	4.7	32.4		53 E7	3.7	11.4
	21 C3	3.2	6.2		78 G8	4.5	22.6		54 C4	3.7	10.0
	22 D3	3.0	6.2		79 D3	4.6	22.3		55 E8	3.4	12.8
	23 D2	3.4	8.1		80 E9	4.1	14.2		56 D6	2.2	2.8
	24 D2	3.4	10.2		81 E6	4.2	16.1		57 D7	2.2	3.5
	25 D6	3.2	6.8	50図	1 E1	1.8	1.7		58 D4	2.1	2.6
	26 E8	3.3	11.1		2 G8	2.1	3.9				

第3表 土製円盤計測表

第49・50図は、土製円盤を一括した。いずれも土器片を素材とするもので、円形に打ち欠き敲打を加えるなどして形状を整えている。大きさは最も小さいものは直径1cmほど、大きいもので3cmほどである。素材剥片の文様を残すものは少なく、もともと無文の資料を用いている例が多いようである。素材剥片の文様をとどめるものを第49図1~40に集めた。1~6や16などに顕著な沈線が観察されるものをはじめ、

挿図番号	種別	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
51図 2	石核	C7	4.5	4.8	4.6	125.5	チャート	
51図 3	石核	C5	2.3	4.4	1.6	15.5	チャート	
51図 4	石核	F3	2.0	4.4	2.3	19.3	黒曜石	
52図 1	石鏃	E7	(4.5)	1.2	0.4	(2.7)	チャート	基端部欠損
52図 2	石鏃	一括	3.8	1.2	0.4	2.9	チャート	
52図 3	石鏃	G7	2.7	(1.1)	0.6	(1.4)	チャート	
52図 4	石鏃	H6	3.5	1.6	0.5	1.9	チャート	
52図 5	石鏃	C5	(3.9)	(1.2)	0.5	(2.5)	チャート	先端部・脚端部欠損
52図 6	石鏃	一括	2.4	1.6	0.4	1.4	チャート	
52図 7	石鏃	E9	2.4	1.4	0.4	1.0	ホルンフェルス	
52図 8	ドリル	一括	(4.3)	0.8	0.7	2.5	頁岩	
52図 9	垂飾	E3	3.0	2.2	0.4	3.7	砂岩	
52図 10	曲玉	E7	3.5	0.9	0.8	5.1	滑石	
52図 11	小玉	D3	0.8	1.1	1.1	1.2	滑石	
52図 12	小玉	G7	1.4	(0.9)	1.3	(1.1)	滑石	
52図 13	玉未製品	C6	1.7	1.2	0.7	2.3	滑石	
52図 14	玉未製品	D3	1.5	1.4	0.7	1.9	滑石	
52図 15	玉未製品	E4	1.3	1.0	0.4	0.4	滑石	
52図 16	玉未製品	E7	1.3	1.1	0.6	1.2	滑石	
52図 17	打製石斧	D6	8.9	5.3	1.5	104.1	緑泥片岩	
52図 18	磨製石斧	E6	(2.6)	1.1	1.1	(3.9)	不明	刃部欠損
52図 19	磨製石斧	C4	(5.9)	5.5	3.3	(165.9)	砂岩	敲石に転用
52図 20	打製石斧	一括	(6.6)	6.3	1.9	(118.1)	ホルンフェルス	基部欠損
52図 21	打製石斧	B6	12.3	6.8	1.9	187.0	緑泥片岩	
52図 22	磨製石斧	一括	(7.8)	(3.2)	1.3	(41.7)	緑色凝灰岩	
53図 1	打製石斧	F9	9.2	4.8	1.6	109.9	緑泥片岩	
53図 2	砥石	D4	(8.7)	6.1	1.3	(104.5)	砂岩	
53図 3	砥石	E6	(4.5)	3.7	0.9	(16.5)	砂岩	
53図 4	敲石	一括	5.8	4.5	1.2	(49.8)	不明	
53図 5	敲石	E2	5.4	3.5	1.1	26.6	砂岩	
53図 6	敲石	F9	5.4	2.9	2.2	(49.7)	硬砂岩	
53図 7	敲石	G8	6.8	2.6	1.5	41.5	砂岩	
53図 8	敲石	E7	6.0	2.8	2.0	48.7	閃緑岩	
53図 9	敲石	F3	7.1	2.4	1.3	35.3	砂岩	
53図 10	敲石	E7	7.6	2.4	1.9	49.5	砂岩	
53図 11	石製円盤	D4	5.7	5.1	1.3	63.8	安山岩	
53図 12	石製円盤	E6	5.4	3.4	1.4	36.3	砂岩	
53図 13	石製円盤	D6	(6.2)	6.7	1.6	(95.8)	砂岩	
53図 14	石製円盤	I5	9.2	6.0	0.9	99.4	緑泥片岩	
53図 15	磨石	D8	6.1	6.2	4.1	(197.9)	安山岩	
53図 16	磨石兼敲石	G7	6.1	5.7	3.3	194.0	花崗岩	
53図 17	磨石兼凹石	F7	5.3	4.9	3.3	131.6	安山岩	
53図 18	軽石製品	D8	9.2	4.6	3.4	34.8	安山岩	
53図 19	石皿	C4	(14.0)	(8.4)	7.1	(725.0)	安山岩	
53図 20	独鈷石	F2	(14.8)	4.3	3.0	(319.3)	緑色凝灰岩	
53図 21	石棒	E5	(9.6)	3.4	1.5	(91.2)	緑泥片岩	

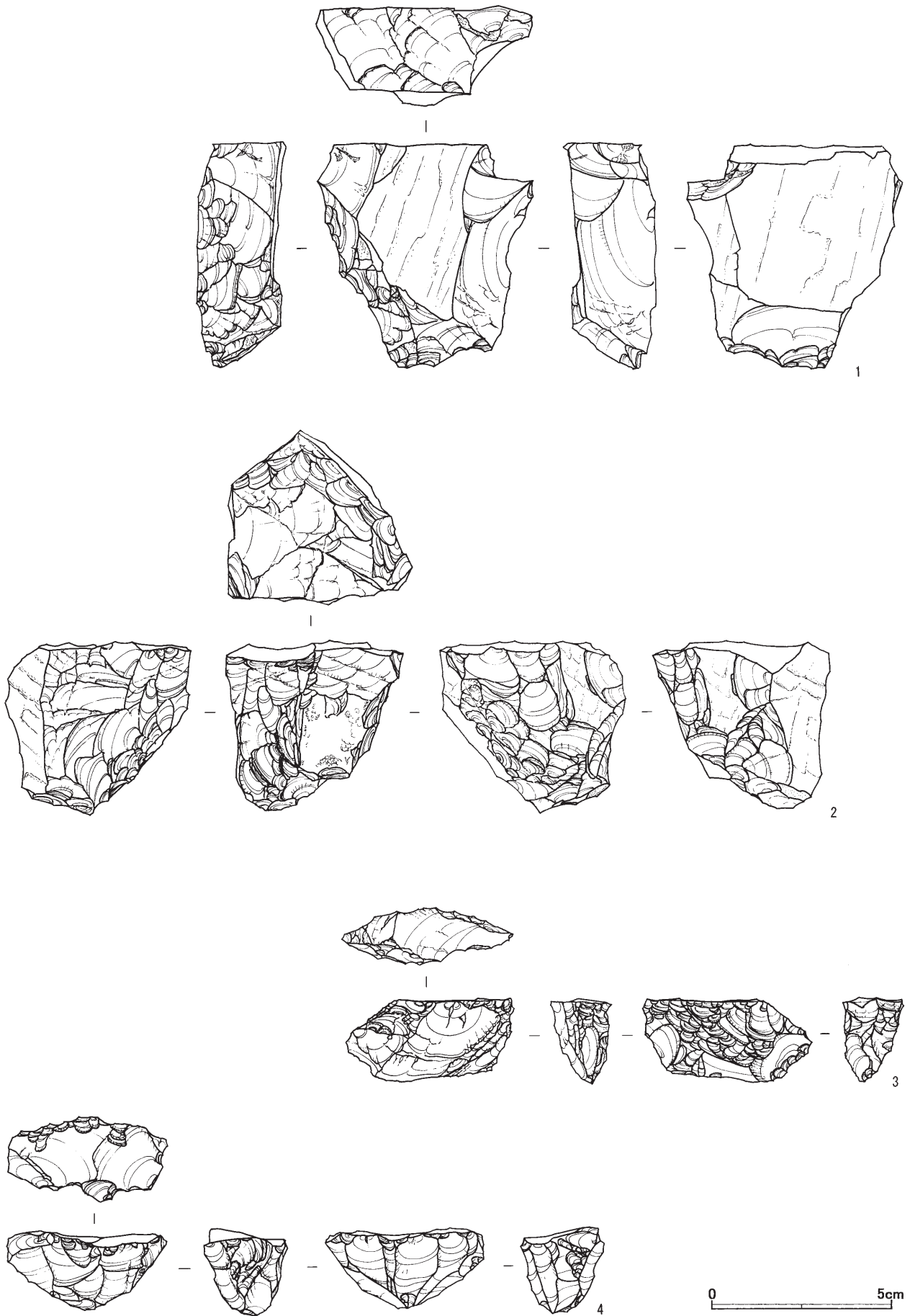
第4表 調査区出土石器計測表

11・15・17・32など刺突のみられるもの、12・19～22などのように縄文のみられるもの、29のように刺突文の窺われるもの、34のように三叉文の観察されるものなどがある。26では素材土器片に開けられていた焼成前穿孔の円孔が残される。

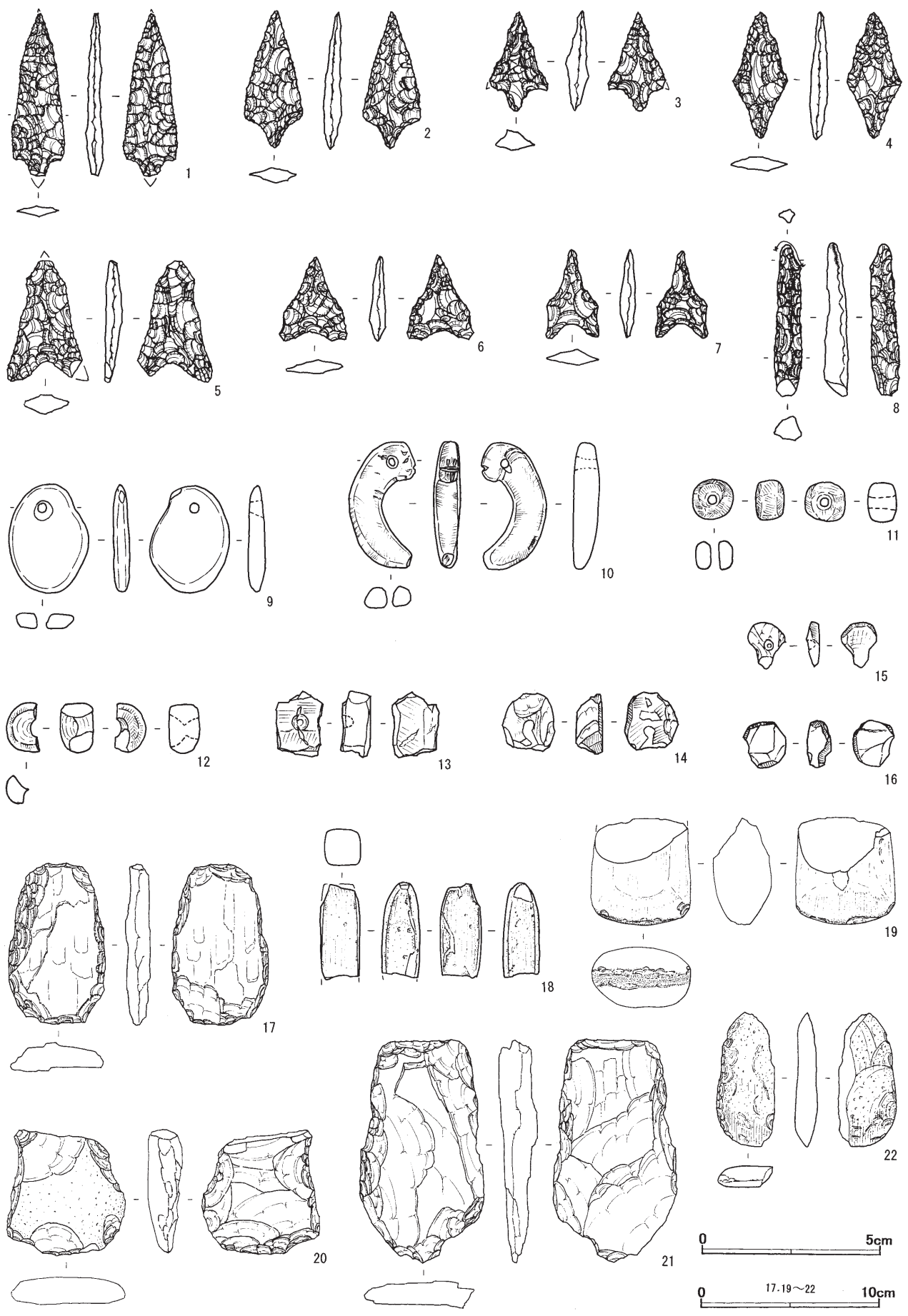
石器 (第51～53図)

第1地点の調査でもそうであったが、今回も非常にたくさんのチャートの剥片やこれを素材とした石器が出土している。それにつれて石核も大量に出土したが、その多くは剥片剥離作業を終えた残核と思われる資料である。石核としての形状をとどめるもののうち、4点を報告する。

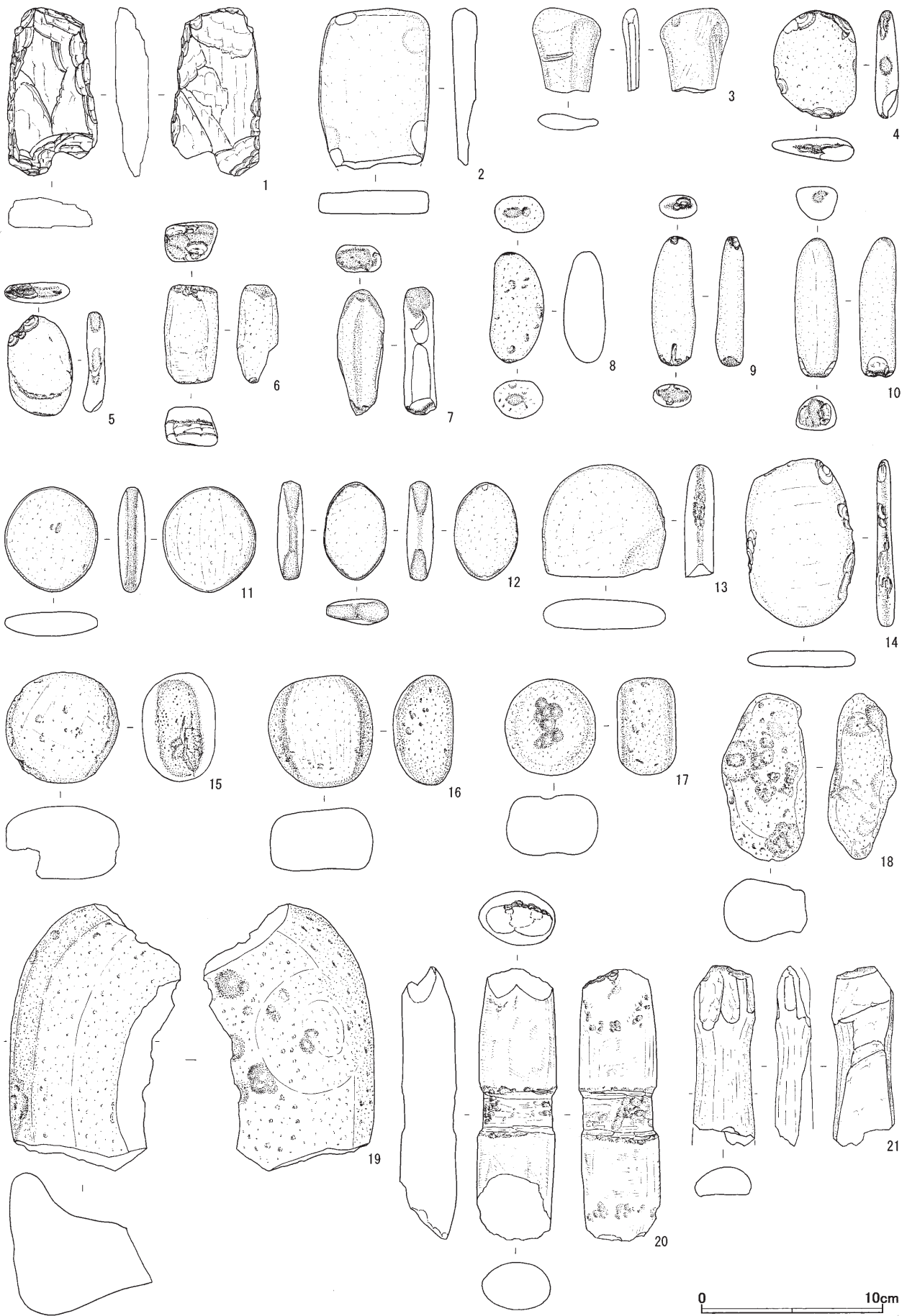
第51図1～4は石核である(1は前掲)。2はチャート製の石核で烏帽子形を呈し、平滑に打面成形を行った後不規則な剥片剥離を行っている。打面は上部に限られず、正面右側の節理面も打面として使用している。125.2gを測る。3は茶色のチャート製の船底形を呈する石核で15.5gを測る。打面は右方向からの



第51图 調査区出土石器 (1)



第52図 調査区出土石器 (2)



第53图 調査区出土石器 (3)

剥離で成形され、基本的にこの打面を用いて剥片剥離作業を行っている。正面中央には、やや横長の扇形の剥離面が、裏面側には細かく不規則な剥離痕が残される。4は、黒曜石製の船底形を呈する石核である。正面両側からの剥離で打面を成形し、周辺に規則的な剥片剥離作業の痕跡が残される。

第52図1～7は石鏃である。整った形状の石鏃も多数出土しているが、その中から優品7点を報告する。1～4は比較的大型の有茎石鏃である。いずれもチャート製で、1はあたかも有舌尖頭器を思わせる。先端部と基端部をわずかに欠く。両面とも両側縁から丁寧な押圧剥離による調整加工が施される。裏面は規則的であるが、正面はやや不規則な剥離となる。2は、均整のとれた形状を示すもので、両側縁から丁寧な押圧剥離を加えている。3は、正面左脚端をわずかに欠く。裏面中央には主要剥離面を残す。正面は周縁部からの深い剥離が繰り返し施されるが、中央に剥ぎきれなかった部分が残される。4は、かえしのない菱形の石鏃である。正面中央部に素材剥片の主要剥離面が細長く残る。先端は左側縁がわずかに膨らむ。5～7は凹基無茎の石鏃である。5は正面右脚端を欠く。両側縁からの丁寧な押圧剥離による調整加工が観察される。先端部付近の両側が僅かに張り出すが、意図的なものかどうかは不明である。6は丁寧で規則的な調整加工が施されるもので、裏面中央付近に素材剥片の主要剥離面を残す。基部付近の両側縁がやや張り出す傾向がみられる。7は、脚部両側縁が平行するように整形され、そこから先端に向かって挟り込むように整形する資料である。8は、石錐である。基部をわずかに欠く。表裏とも両側縁から丁寧で規則的な調整加工を施している。その結果両面の中央には不規則ながら稜が形成され、断面も菱形に近い台形となる。先端部は使用により丸く磨れており、特に右側縁には横方向の摩擦痕が顕著であり、ある程度の硬さのあるものに穿孔していたことを窺わせる。9～16は石製装飾品である。9は、扁平な楕円形の自然石の中央上部に正面方向から穿孔している。10は、滑石製の曲玉状の垂飾で上部中央に両側から穿孔している。穿孔部の内側に1条の刻みが観察される。11・12は小玉、13～16は小玉の未成品である。このうち13・15では正面から穿孔を開始している。図示したもののほかにも滑石の断片が複数出土しており、少量ながら玉の製作を窺わせる。17・20・21・第53図1は打製石斧である。17・1は緑泥片岩製で、表裏に節裏面を残し周縁部を敲打しながら調整している。20は撥形を呈したものであるが基部を欠く。正面に自然面を残し、楕円礫の大型剥片素材であることがわかる。21は円刃となる短冊形の資料である。18・19・22は磨製石斧である。18は、断面四角形を呈する小型で細長い資料で刃部を欠く。基部はソケットに装着するものと思われ緩やかにカーブしながらすぼまる。石斧というよりも鑿等の工具であろう。19は、比較的厚みのある蛤刃の磨製石斧で基部を欠く。基部を欠損したのち敲石に転用されたものと思われ、刃部に敲打痕が観察される。22は、扁平な局部磨製石斧である。縦位に欠損している。

第53図2・3は砥石である。前者は扁平で方形に近いもの、後者は扁平で不整形のもので正面右側には浅い溝状の使用面が認められる。4～10は、細長い礫の両極に敲打痕が残される敲石で、前回調査に引き続き多数の出土を見た。この石器自体を手にとって何かを敲くには小さすぎることや多量に出土したチャート製の石核や剥片類から、剥片剥離時に間接打撃に使われたものではないかと考えられる。11～14は楕円形に整形された円盤状の石器である。程度の差はあれいずれも側縁に敲打による調整加工が施される。15～17は磨石で、小型で円形に整形されたものである。今回の調査地点では磨石の出土は非常に少ない。形状の窺われる資料は3例のような小型のもので、そのほかは残欠である。18は、不整形の軽石製の石製品である。19は石皿の残欠である。裏面に作り出しの脚が認められる。20は緑泥片岩製の石製品で独鈷石と思われる。両端を欠く。21は石剣の頭部残欠である。緑泥片岩製で、無文の頭部が作り出される。

IV 調査のまとめ

1 墓壙群の調査

前田遺跡第2地点の発掘調査では、縄文時代晩期の墓壙群が検出された。検出された27基の土坑の内、少なくとも18基が墓壙であるものと思われる。市域では、清左衛門遺跡第7地点でほぼ同じ時期の墓壙群を検出しており、将来的には両者を対比して検討することが可能である。

これらの墓壙群は、概ね長軸2m程度の長楕円形から隅丸長方形を呈し、調査区南西に帯状に展開することがわかる。墓壙内には、複数の遺存度の高い土器が残される例が多く、出土土器の一括性をよく保っている事例としても重要であることはもちろん、当時の墓制や葬制を知るうえで極めて重要な資料であるといえる。本章では、墓壙相互の位置関係や主軸方向の視点からこれらをいくつかに分類検討して調査のまとめに代えたい。

なお、今回の報告で扱う面積は墓壙群全体の恐らくごく一部でしかないものと思われ、本章での分類は、前田遺跡における縄文時代晩期墓壙群を把握する上での現段階での予察という性格を超えるものではない。今後周辺の調査事例が増加した段階で、再考が必要となることを予めご承知置き願いたい。

主軸方向に視点を置いた墓壙群の分類

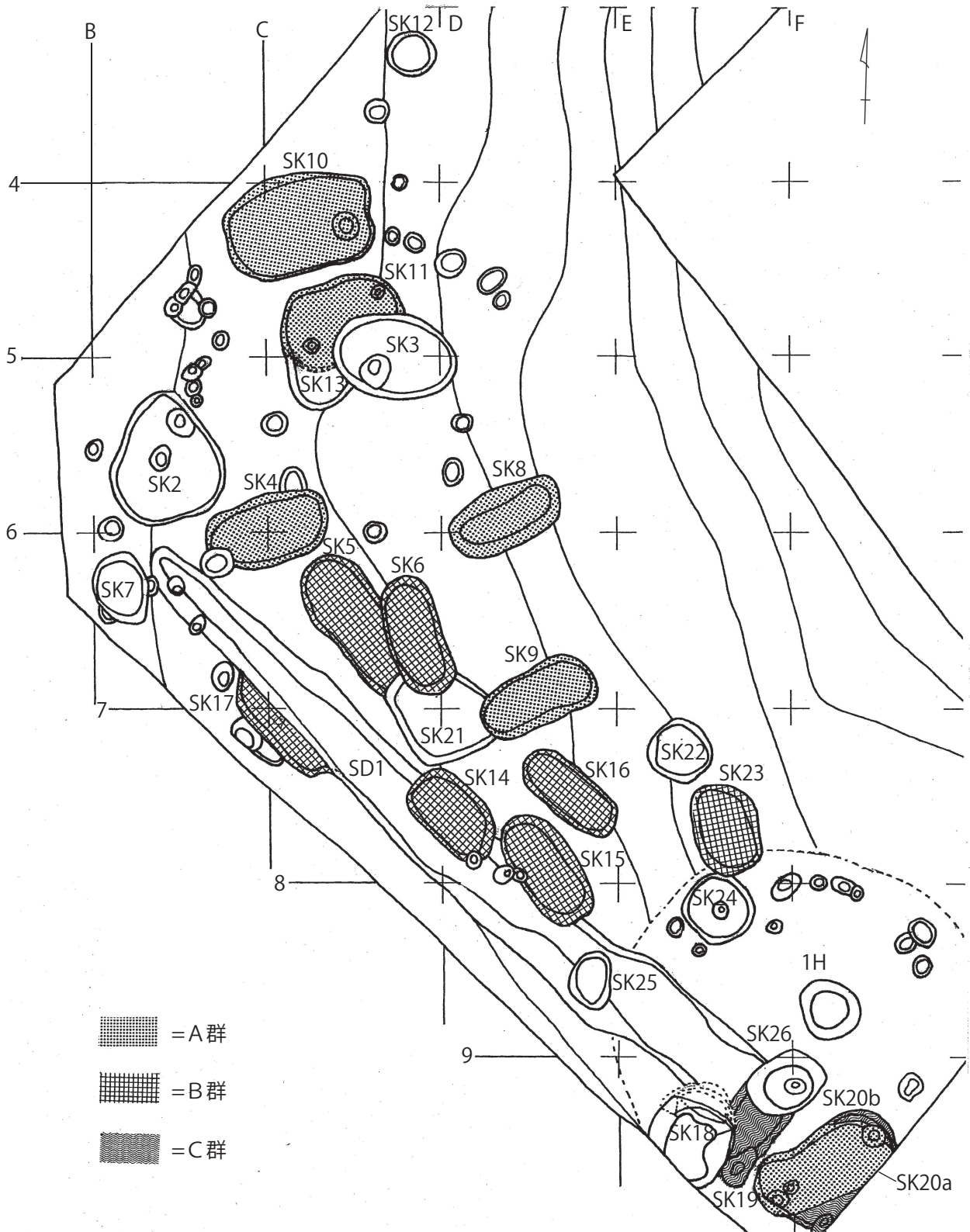
今回検討対象とする15基の墓壙を観察すると、主軸の向きによっていくつかグルーピングできるとわかる。

まず、主軸が南西から北東を向く一群（A群）、次に主軸が北西から南東を向く一群（B群）と、数は少ないがもう一つ北東から南西をむく一群（C群）の3つがあることが窺われる。以下、各群ごとに検討したい（第5表参照）。

A群：第4・8～11・20a号の6基が該当する。20a号を除き、調査区の北半部に集中する傾向を示す。この6基の主軸方向を見ると、4号・10号・11号の3基が東西方向から 10° ～ 12° 南に軸の振れるものであることがわかる。また、8号・9号・20a号の3基は、東西方向から 23° ～ 24° 南に軸の振れるものである。前3者と後3者とは主軸方向の差が約 10° あり、主軸方向だけをみると両者をそれぞれ1つのまとまりとして捉えることも可能であるが、平面的分布を見たときに10号・11号の2基がほぼ隣合う位置関係を示すということ以外、両者を小グループとして括る積極的根拠は見当たらない。 10° の主軸方向の差は図上で見ても大きな差とは捉えられないため、両者を分けず一群として扱うこととした。

また、本群土坑間の水平距離であるが、9号と20a号とは約9m離れており、この間にA群の土坑は存在しない。しかし、9号と10号との距離もほぼ9mであることを考えると、20a号だけが孤立したものとも言い難く、墓壙群全体を調査したものではないことを考え合わせると、現時点では20a号を含めA群として捉えておくこととした。

B群：第5・6・14～17・23号の7基がこれにあたる。いずれも調査区の中央付近に集中する。7基の主軸方向は南北方向から 40° 程度西に振れるものを基本とする（5号・14号・15号・17号）。これよりさらに 10° 程度西に振れる16号や、より南北軸に近い23号まで振幅はA群と比べると広い。最も西に振れる16号と最も振れの小さい23号との差は 26° あることになるが、A群との対比という視点で見たとき、これら



第54図 墓墳群分類図

A 群						B 群					
遺構	主軸方向	長軸	短軸	深さ	時期	遺構	主軸方向	長軸	短軸	深さ	時期
SK4	W-12°-S	2.15	1.17	0.33	3c ?	SK5	N-40°-W	2.17	1.18	0.29	3b・BC
SK10	W-10°-S	2.44	1.71	0.33	前浦・3d	SK6	N-18°-W	2.17	0.94	0.36	3b
SK11	W-12°-S	2.16	(1.41)	0.18	BC	SK14	N-40°-W	1.75	1.00	0.39	3b ?
SK8	W-23°-S	1.99	1.04	0.27	3b ?	SK15	N-39°-W	2.09	1.06	0.32	3b・BC ?
SK9	W-24°-S	2.09	1.00	0.35	3b	SK16	N-50°-W	1.88	0.84	0.35	3b
SK20a	W-23°-S	2.54	(1.07)	0.39	3b	SK17	N-42°-W	(2.20)	(0.44)	0.15	3d ?
C 群						SK23	N-14°-W	1.52	1.11	0.29	?
SK19	N-37°-E	2.40	1.01	0.28	3b・3c ?						
SK20b	N-37°-E	2.20	(1.26)	0.18	3b ?						

第5表 前田遺跡墓壇一覧表

全体を本群の中で考えたほうがよいものであると感じられる。また、16号については密集する14～16号の重複を避けるように、意図的に主軸をずらしている可能性も考慮する必要がある。

反面、A群では見られなかった、同一群内での土坑の重複事例が、本群では、5号と6号との間で生じている点に注意を払う必要がある。6号土坑と5号土坑の軸方向の差は12°であり、A群の中の主軸方向の差とほぼ同じであることを考えると、5号と6号の重複関係をもって初めから6号を本群から外して検討することには慎重であらねばなるまい。

C群：第19号と20b号の2基が挙げられる。両者は、調査区南端に並んで検出されたもので、主軸方向はともに南北軸から37°東に振れるものである。

2基のみで一群を設けることにいささかの抵抗を感じ、墓壇群の東側に展開する窪地と墓壇群の主軸の関係性を考えた場合、A群の範疇で捉えるということも考えられるが、墓壇群のさらなる広がりや考慮して、現時点では別の一群として捉えておくこととしたい。

墓壇群の位置関係からの推論

A～Cそれぞれの墓壇群内には、対を成す、あるいはグループの存在を想起させる位置関係をとる墓壇が存在する。

例えばA群の10号と11号やC群の19号と20b号などは、2基ほぼ並行するように近接して造営される。

また、B群の14～16号は、近接する範囲に重複せずに営まれている。これらは、互いの存在を承知の上で造営されたものとみるのが自然であろう。そうした推論が正しいとすれば、葬られた人物の関係も浅からぬものであると考えるのが今日的には常識的な見方といえよう。人骨等の出土がない状況では隣接する墓に葬られた人物の関係性を知るすべはないし、考古学的に実証することもできないが、墓壇造営の状況は、相互の墓壇の存在を認識できる時間幅の中での継続的な造営や、主軸を考慮した複数集団の存在などをあぶりだしているともいえよう。

また、重複しない継続的な墓壇の造営や主軸の大きくずれない墓壇の造営には、墓壇がどこに、どのような向きで存在するのかをある程度正確に把握しておく必要があったものと思われる。そのために、何がしかの「目印」が存在したことは想像に難くない。河川上流部の遺跡ならば墓標として石を置くなり、囲む方法が考えられようが、石器の材料となる石材の調達にも苦労していた当地域にあっては、何が

その役割を果たしていたのだろうか。木製の墓標等の存在が想起されるが、積極的にこれを裏付ける構造は認められなかった。例えば、10号・11号土坑などにみられるピットがこうした「墓標」を支えた構造であったかどうか、今後の類例の増加を待って検討する必要があるだろう。

墓壙出土土器の規則性

本項では、墓壙からの土器出土状況から窺われることをまとめておきたい。

第三章で述べた各墓壙の遺物出土状況の内、複数個体の土器が出土した事例や象徴的な出土状況を示した事例について検討し、墓壙からの土器出土のあり方の規則性を探りたい。

A群：8号土坑では、土坑の中央よりも東側で口縁の内湾する無文粗製の深鉢形土器が出土している（14図1）。この土器は口縁部から胴下半まで遺存するものの、残存径は1/3程度であり、当初から全周しない「破片」として墓壙に入れられた可能性が高い。

9号土坑でも、土坑中央西寄りの底面近くから大ぶりの丸底の底部資料が出土している（15図27）。この底部資料も初めから胴部以上のない状態で副葬された可能性が高い。土坑は30cmを超える深さがあり、器形を窺うことのできる資料であれば、もう少しよい状況で出土しても不思議はない。

10号土坑では、土坑西端からまとまって土器が出土した。土器は、口縁部から底部まで復元できた前浦式系の大ぶりの壺形の土器（14図5）と、安行Ⅲc～Ⅲd期の胴部大破片（14図4）、Ⅲd期の口縁部を含む大破片（16図1）、入組弧線文の浅鉢形土器（14図2）などである。

11号土坑では、土坑西寄りの壁際底面直上から、算盤玉状を呈する浅鉢形土器が完形で出土した（17図1）。本址からはこのほかには目立つ遺物はないが、遺存度の高い小型の土器が出土する好例の一つである。

20b号土坑では、土坑南西端から口縁部の開く深鉢形土器の大破片が出土している（20図6）。この資料も残存径は1/3から1/4程度である。ただしこの土坑は完掘できておらず調査区外に遺物が残された可能性も否定できない。

B群では、まず5号土坑が挙げられる。土坑中央やや北西寄りから平縁広口壺形の口縁部を含む大破片が出土している（13図5）ほか、土坑中央やや北東寄りから小型の深鉢形土器が出土している（13図4）。この資料は覆土上層から正位で出土しており、残存径3/4程度であり、もともと完形であったものと思われる。覆土から出土したことに関して、遺骸に副葬されたものではなく埋葬後に供献された可能性等について検討する必要があるものと考えている。

6号土坑からは、器形を窺える資料3個体が出土している。土坑中央西壁際から口縁が内湾する無文粗製の深鉢形土器が出土している（13図7）。これと並ぶように刺突文列が口縁部文様帯の上下を区画する深鉢形土器（13図6）が、また反対東壁際からは口縁外反の無文の広口壺形土器が出土した（13図8）。3個体はいずれも大破片で残存径は1/4程度である。

15号土坑の出土例は、一つのモデルとして検討材料になるものと思われる。土坑北側の壁際底面から完形の浅鉢形土器（18図1）が、そのやや東側壁際から無文の広口壺形土器の大破片（18図3）と、帯縄文を持つ大破片（18図4）が出土している。2点の大破片の残存径は1/4程度である。さらに、土坑南寄りの覆土上層から大洞系の小型壺形土器が出土している。この壺形土器は、口縁部は僅かに欠損するものの、頸部では全周し、元来完形であったものと思われる。覆土上層からの出土は5号土坑の事例と通じる

ものが窺われる。

C群：19号土坑では、2個体の浅鉢形土器が出土した（20図1・2）ほか、刺突文帯の窺われる砲弾形の粗製土器（20図5）が出土している。砲弾形の深鉢は土坑西端から出土した残存径1/4程度のものである。20図1の浅鉢形土器は土坑中央北側の壁際覆土上層から横倒しの状態で出土した。底部は完存し口縁部が2割程度欠損する。元来完形のものであった可能性が高い。

20b号土坑では、土坑南西端近くから4単位波状縁深鉢の口縁部大破片（20図4）が、北東端近くからこれも4単位波状縁深鉢（20図3）が出土した。前者は残存径1/4程度、後者は残存径は6割程度である。

これらの出土事例から、土坑長軸端部の底面近くや中央壁際などからの出土例が多いことや、覆土上層からの供献具としての出土が窺われる事例が目立つことがわかる。また、15号土坑例のように、長軸端部に浅鉢形土器を入れる事例と同様の意味で、初めから破片である深鉢や底部資料などが代用される例があるものと思われる。

このほか、本市清左衛門遺跡第7地点（平成23年発掘調査：未報告）では、完形または遺存度の高い小型の壺形土器や注口土器をかなり積極的に副葬している事例があり、こうした事例とともに総合的に検討する必要が高い。

出土土器から見た墓壙の造営時期

本項では、出土土器から墓壙の時期や先後関係等を探りたい。

A群で、主軸方向の近いもの同士を比較すると、8号・9号・20a号の3基は概ね安行3b期前後の時間幅の中で納まりそうであるが、4号・10号・11号はやや時間幅がありそうである。4号は遺物量自体が少ない難点があるが、11図41で代表させると安行3c期、10号は、出土遺物自体にやや幅がありそうであるが、14図5に代表させると前浦系でも古い段階と思われ、安行3d期まで下がるかどうかと思われるが、14図10や15図41・16図1などを採用すれば3d、14図2や16図2は流れ込みと判断せざるを得ない。11号土坑17図1は、安行3b・大洞BC期としておきたい。A群全体で見たときには、8号・9号・11号・20aの4基はほぼ同時期で、4号・10号がやや後出という結果となる。

B群では、重複関係を持つ5号・6号は安行3b期の幅の中で納まるものと思われる。近接して設けられた14～16号の3基は、14号・16号の遺物量が少なく判断に迷うが、前者の16図23・24、後者の18図5は、とも3b期に下がる資料と考えられる。15号の18図1・2は、相当に関東的色彩の強い大洞BC段階と判断した。1号溝に切られる17号は遺物量の少ないものであるが、16図42に代表させるとすれば安行3d期であろう。23号は、決め手となる資料に欠け時期判断は保留したい。

C群の2基であるが、19号の20図1・2はともに無文の浅鉢形土器であり時期判断は難しい。2の鉢巻状となる口縁部突起を姥山Ⅱ式系譜であるとみれば、安行3b期と思われる20図5の粗製土器とほぼ同時期と判断されるが、同図1のぼってりとしたつくりや輪積みを残す整形は、やや後出的なものと受け止められる。20b号の20図6もあまり見なれない土器で、時期判断には窮する。調査段階の所見として20a号が20b号を切っているという事実を大切にすれば、安行3b期の20a号より古いこととなるが、安行3a期に遡る資料と見るには抵抗がある。やはり3b期の中での切り合いとみるのが妥当であろう。

個別の土坑の時期判断を総合すると、前田遺跡の墓壙群は安行3b式期に時期的中心があり3d式期まで継続すると考えられる。この傾向はA～Cの各群とも共通するものと思われる。

また、隣接したり密集して造営される土坑の時期差に関しては、B群の14～16号はほぼ同時期と判断されるのに対し、A群の10号・11号やC群の19号・20b号はやや時期差がある可能性が窺われた。この事例だけをもって結論を急ぐ必要はないが、14～16号などの近接状況はやはり相互の存在を承知し得る近接時期に造営されたとみるのが自然であると思われる。反対に、10号・11号や19号・20b号が時期差を持ちながら近接し同軸を保つのは、やはり墓壙の存在をある一定の時間継続して認識できる仕組みの存在を浮き彫りにしているといえよう。

以上、雑駁ながら前田遺跡の墓壙群に関する所見を述べてきた。それにつけても、土器型式の持つ時間幅とはどれほどのものなのか、改めて考えさせられた。同一型式の中に納まる墓壙が同時に多数造営されたということは考えにくく、同一土器型式内の時間差を持って造営された、しかも何基もの墓壙が近接して営まれるほどの時間幅を持っていたということなのだろうか。あるいはたまたま近接時期に不幸の重なった集団（家族）があっただけなのであろうか。

今回は、墓壙と土器型式の対応関係には触れなかったが、何かしらの関係の存在を予感させる。僅か15基の土坑をみただけでも、在地の安行系の土器以外に、大洞式系譜、姥山式系譜など多系統の土器の存在が窺われる。こうした系統の違う土器群がなぜ墓壙内では共伴するのかとか、同一墓壙群の中で異系統の土器を持つものと持たないものなどさまざまな視点が浮かび上がる。また、副葬と思われる出土形態と供献と考えられる出土形態についても解決できない問題として残った。

今後に残された課題は多い。前述のとおり、市内では日川低地を挟んだ対岸に立地する清左衛門遺跡でも類似の墓壙群が検出されている。また、加須市長竹遺跡（埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査例）などとの対比も行いながら時間をかけて検討を続けたい。

付編 内田重郎氏寄贈資料

前田遺跡範囲内に耕作地を持つ内田重郎氏から継続的に耕作中に出土した資料の寄贈を受けた。資料は出土した範囲がほぼ特定されており、大型資料の出土時の状況も聞き取りできることや、前回、今回の報告に含まれない時期の資料も多く、前田遺跡の性格を知るうえで貴重な資料であることから、この機会に資料紹介を行い、併せて、寄贈者である内田氏の埋蔵文化財への深いご理解とご協力に感謝の意を表すものである。

資料出土の経緯

内田氏所有の耕作地、白岡市実ヶ谷180番地付近を知人に植木畑として貸していたが、貸借期間の満了に伴い返還を受け、残った植木の処分を行った折、多量の縄文土器が出土したとのことである。その後、通常の畑として耕作を継続する傍ら、多量に散布する土器や石器の収集を行っていただき、これをご寄贈いただいたものである。

以下代表的な事例を紹介する。

1 土器（第55～60図）

第55図及び第58図1は縄文時代中期後葉加曽利E式の一群である。該期の資料は、今回の調査区でも1軒の住居跡が検出されており、近辺での集落展開が予想されていた。1～5はキャリパー形深鉢土器の口縁部資料である。第55図1は隆帯による渦巻文が窺われるもの、2は、隆帯を貼る口縁部から右下がりに斜行する隆帯が観察される資料、3は渦巻文を形成すると思われる隆帯が覗くもの、4は口縁部に2条の沈線が巡るもの、5は円形刺突列が口縁部を巡るものである。6は、口縁部に橋状把手が付されるもの、7は肥厚する無文の口縁部下端に幅広の沈線が巡るもの、8は縄文の施される柱状の突起が付されるもの、9は、器厚の薄い小型の資料で、口縁部を巡る隆帯が看取される。10は無文となるものである。11～13は口縁部文様帯の下端を画する隆帯部分である。14は、磨消文帯の垂下するキャリパー形深鉢の口縁部付近の資料、15は、口縁部から胴部文様帯にかかる資料で、胴部に垂下する磨消文帯がみられる。16は算盤玉状に屈曲する浅鉢形土器で、縦位の集合沈線の引かれる口縁部窓枠状文が観察される。17は円形刺突列の看取されるもの、18は磨り消しとなる連弧文の施される資料である。19～33は縄文を地文とする胴部資料で、垂下する沈線や蛇行沈線などが窺われる。34・35は縦位の鎖状隆帯と縦位の集合沈線のみられるもので、中部地方の曾利式の影響を受けたものであろう。36は、ランダムな条線文の観察される胴部資料である。

第58図1は、推定口径49cm、残存高34cmを測る大型のキャリパー形深鉢で、胴上半部に隆帯による大型の渦巻きの配されるいわゆる梶山類型といわれる一群に該当する。本資料は住居跡の炉体土器であったと思われる。

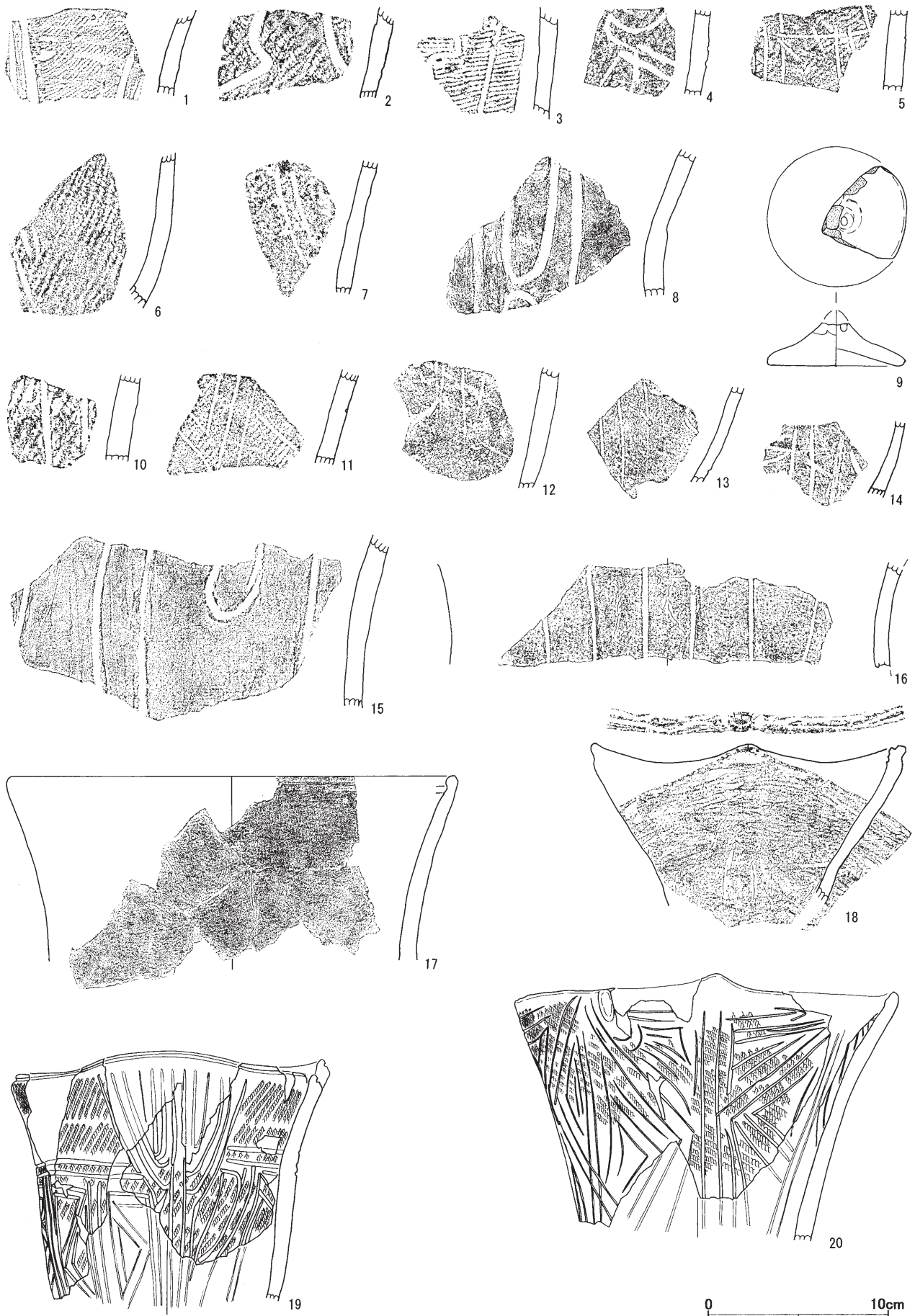
第56・57図及び第58図2・第59図は、縄文時代後期前葉の資料群である。該期の資料は第1地点で堀之内1式期の住居跡1軒が検出されているほか、今回の調査区でも少なくとも2基の土坑が検出されているが、全体量に占める遺物量は決して多いものではなく、この資料群の確認を持って、前田遺跡が後期前葉の集落を含むことがあらためて把握された。1～6は、称名寺式期のもので、1・4は口縁部外側に1条の沈線が



第55圖 内田重郎氏寄贈資料(1)



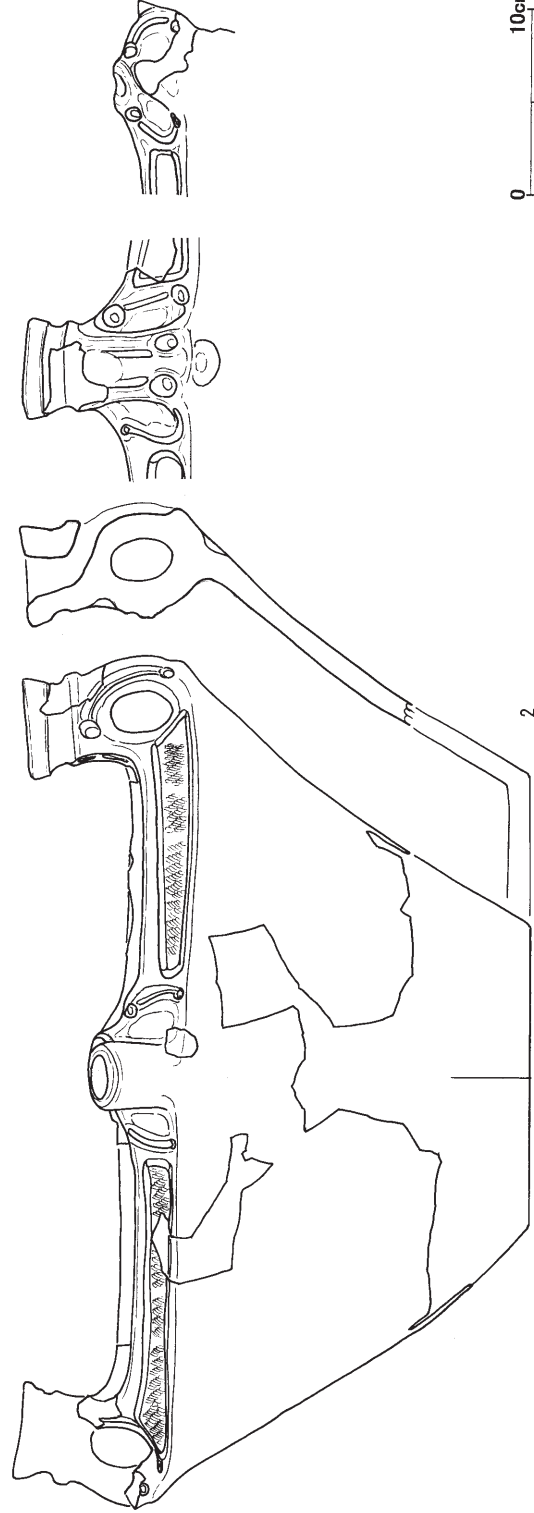
第56圖 内田重郎氏寄贈資料 (2)



第57図 内田重郎氏寄贈資料 (3)



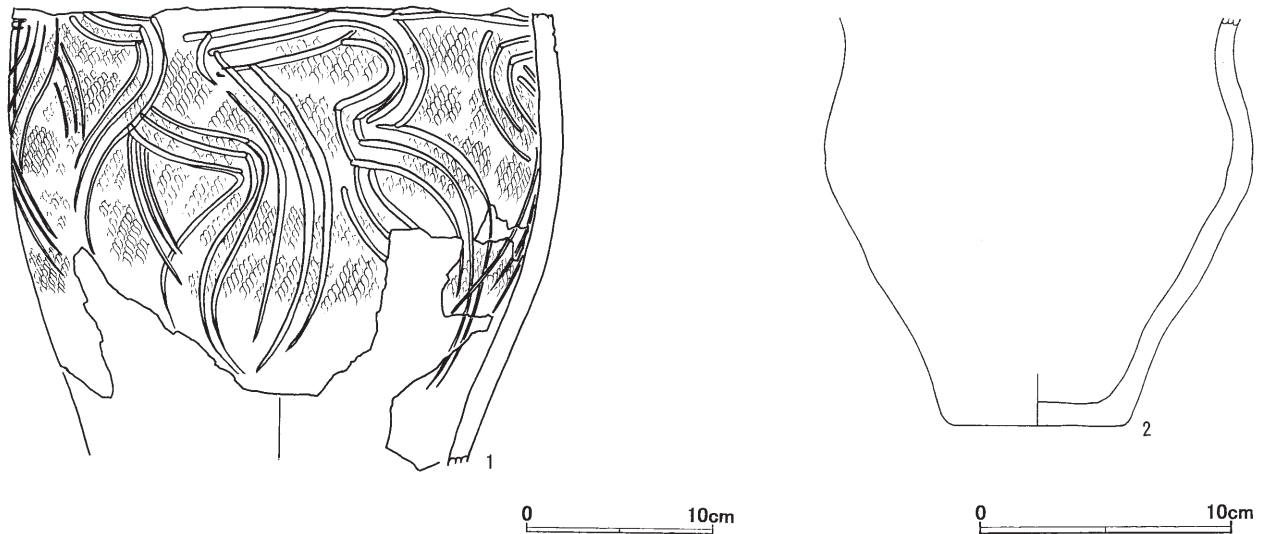
0 10cm



0 10cm

2

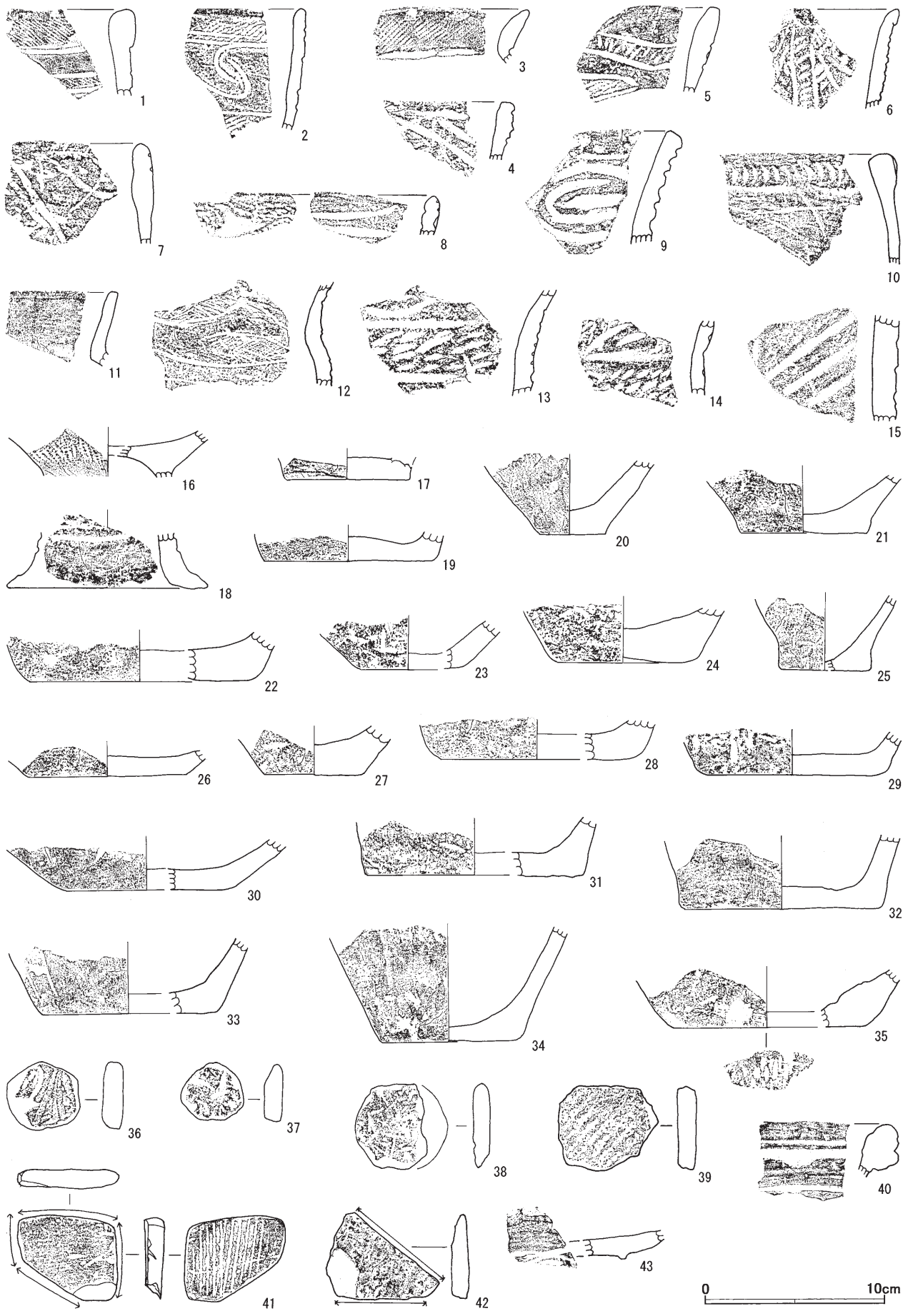
第58図 内田重郎氏寄贈資料(4)



第59図 内田重郎氏寄贈資料 (5)

みられるもので、後者では沈線文帯の中に紡錘形の刺突が施される。2・3は波状縁となるもの、後者は波頂部から隆帯が垂下し両脇に縄文帯が観察される。5・6は、「J」字や鉤の手状などの文様が描出される胴部資料である。7～第57図・第58図2・第59図は、堀之内式期の資料である。第56図7～20は口縁部に隆帯や刺突を施すもので、7・8は口縁部に沈線を伴う「C」字状の貼付を持ち、これを起点とした刺突列と沈線が口縁部を飾る。9は、5つの円形刺突を持つ波頂部間を2条の沈線で結ぶもので、波頂部から沈線を伴う隆帯が垂下する。12では3個の円形刺突から5条の沈線が垂下するもの、13は「8」字状の貼付から蛇行沈線が垂下するものである。24は口縁部に細い鎖状隆帯が貼られ、これに沿う縄文帯のみられるもので、堀之内2式期該当しよう。25・26は様相は異なるが無文の口縁部資料である。27は、内湾する壺形土器の肩部と思われ、橋状把手が付されたようである。28は縄文地文上に直曲線の沈線文が施された資料、30は、鎖状隆帯が垂下する資料、31・32は、櫛状施文施文具による曲線主体の文様が器面を埋めるもの、33は縄文地文に蛇行沈線の施される資料である。

第57図1・6・10は縄文地文上に垂下する沈線のみられるもの、8・15は無文地に「H」状の沈線文の施された資料、12～14・16は無文地に縦位の沈線の施されるもので、16は、推定胴径25cmを測るもので、5cmほどの輪積みで欠損している。9は無文の蓋で、推定径7.8cmを測る。刺突を伴う紐が付いたものと思われる、中央部が高く残る。17は、推定口径25cm、残存高10cmを測る平縁無文の深鉢形土器である。口縁内面に1条の沈線が引かれる。18は、推定口径17.5cm、残存高10cmの口縁部が大きく開く4単位波状縁を呈すると思われる深鉢形土器で、波頂部口唇に楕円形の沈線文が引かれ、これをつなぐように口唇部には2条の沈線が引かれる。胴上半は丁寧な横位のなで整形が顕著である。19は、推定口径17.5cm、残存高14cmを測る緩波状縁を呈すると思われる深鉢形土器である。全体に単節縄文の地文を施し、波頂部から2条の沈線を垂下させ器面を縦位に分割する。波頂下には縦位分割線に集約するように箒状の沈線が引かれる。頸部も2条の沈線で分帯し、胴部はさらに短冊状に縦位分割され、縦位の鋸歯文が形成されたり、三角形区画が形成されたりする。20は、推定口径21cm、残存高14cmを測る深鉢形土器で、口縁部に小突起を持つ部分と、口縁外面に縦長の貼瘤を持つ部分とが看取される。口縁部から、2条の沈線を垂下させ器面を縦



第60図 内田重郎氏寄贈資料 (6)



第61図 内田重郎氏寄贈資料 (7)

位6分割させ、その中を鋸歯状あるいは三角形に仕切り、間隙に短沈線を充填している。

第58図2は、注口付の浅鉢形土器で、口径45cm、推定高23cmほどである。「く」の字に内屈する口縁部文様帯4か所に突起を付し、これをつなぐ横長の沈線区画を設け単節縄文を充填する。口縁部の突起は、注口となる部分の両脇に上部に筒型となる装飾を持つ橋状把手を1対持ち、注口と対を成す小突起は向かい合う「C」字状隆帯と頂部に円形刺突を持つ捻転する隆帯によって加飾される。また、注口右側の橋状

把手直下には楕円形の窪みが付けられる。胴部から底部にかけては無文となる。

第59図1は、胴径29cm、残存高24cmを測る甕型ないし深鉢形土器である。頸部を横位の沈線で区画し胴部には単節縄文の地文上に3条1組の沈線で曲線を組み合わせたモチーフが描かれる。2は、推定胴径17cm、残存高17cmを測る胴部の括れる深鉢形土器である。全体に無文で粗いなで整形が施される。

第60図1～15は縄文後期後葉から晩期にかけての一群である。1は、肥厚する口縁部に帯縄文の施されるもの、2は上下を縄文帯で画された口縁部文様帯に入組弧線文のみられるもの、3は、外傾する口縁部に単節縄文の施されるものである。5～7は口縁部に刺突文帯がみられる一群で、6は大波状縁の深鉢形土器の波頂部から刺突文帯が垂下するものである。8は、口縁外面に三叉文を陰刻し周囲に細かい刺突を施すもの、4・9は太めの沈線で口縁部に弧線や三叉文の入組文を施すもの、13～15はその胴部資料である。10は口縁部に爪形の刺突の施された紐線文土器、11は、「く」の字に外傾する無文の口縁部資料、12は、細密沈線文の胴括れ部資料である。16～35は、底部資料を一括したもので、16は縄文の施された後期後葉の台付浅鉢形土器、18は横位沈線のみられる晩期の台付浅鉢形土器である。29は、底部まで縦位沈線のみられる中期後葉の資料であろう。35は底面に網代痕が残るものである。40は中世末から近世期の播鉢と思われるもの、43は、高台の付く皿である。41・42は中世陶器で転用砥石として使用されている。

2 土製品 (第60図36～39・第61図1～4)

第60図36～39は、土器片素材の土製円盤である。36は、刺突文とその区画と思われる沈線の観察されるもの、39は単節縄文が観察される。

第61図1は、中空となる土偶の脚部資料である。大きく開く脚部に両足をまたぐようように2条1組の沈線を施す。脚部側面には同様の沈線で半円状の区画を設け、脚の付け根に下向きの三叉文を形成する。側面下部にも上向きの三叉文が表現される。胴部は刺突の付される沈線で画され、体部には「I」字文を思わせる細長い陰刻風の沈線と三叉文が観察される。2は、中実土偶の腕の残欠と思われる。腕を巡る沈線3条とこの沈線間に並行して施された沈線が観察される。3は、ミミズク土偶の脚部と思われ、表裏に横位の沈線が観察される。4は、長軸4.5cmを測る有溝土錐である。楕円形で側縁を巡る溝と短軸を巡る溝が切られる比較的大型の資料である。

3 石器 (第61図5～10)

5～7・10は、磨製石斧である。5・7は定角式の資料で前者は表裏が剥落し左側縁も欠く。緩い円刃を呈するもの、後者は、刃部を一部欠くものの基部まで残存する小型の資料である。6は、刃部を欠く資料で、一度は刃部の再生を試みたようであるが、再度欠損したものとみられる。1は、基部の残欠で、基端部に敲打痕が残される。8・9は打製石斧である。前者は短冊形の資料であるが、偏刃となりややバランスが悪い。刃部右側縁欠損後再生したものかもしれない。9は、横長の大型剥片を素材とするもので、分銅型となる。刃部、基部のほか括れ部にも顕著な使用痕、着柄痕が残される。裏面には素材剥片の表皮が大きく残される。

写真図版



調査区遠景

图版2



第1号住居跡



住居内土坑遺物出土状況



炉跡



第1号土坑



第1号土坑遺物出土状況



第2号土坑



第11号土坑遺物出土状况



第3·11·13号土坑



第5号土坑遺物出土状况

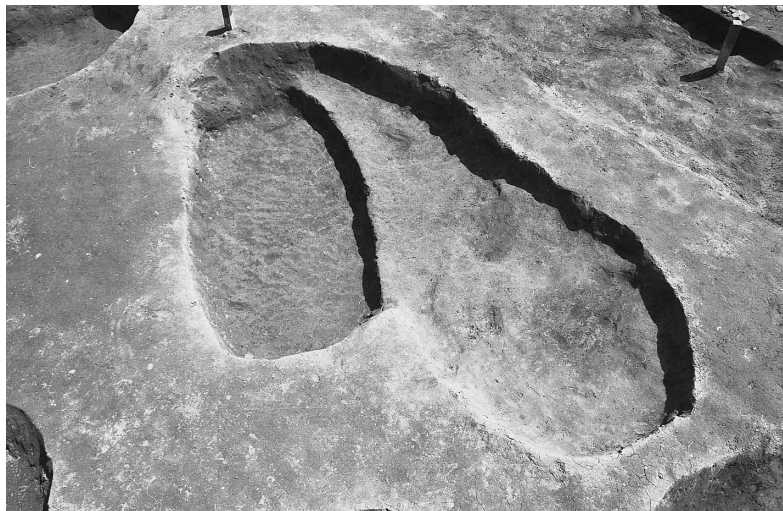


第6号土坑遺物出土状况

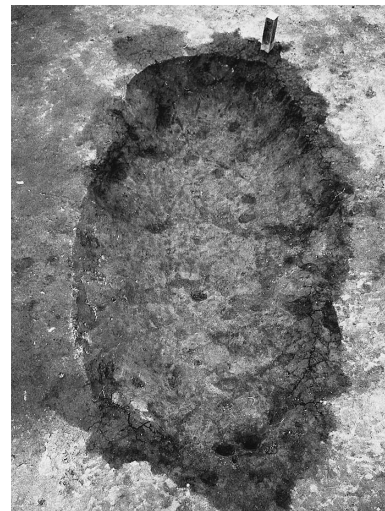


第4号土坑

图版4



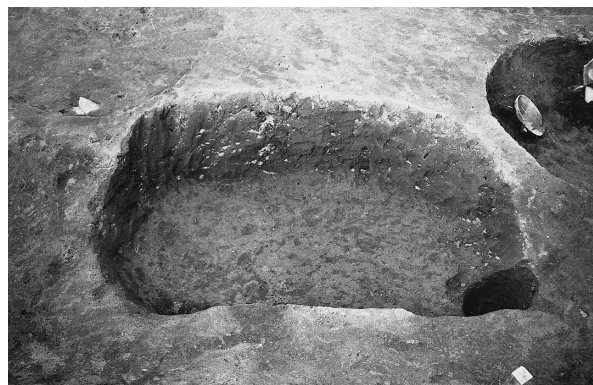
第5·6号土坑



第8号土坑



第7号土坑



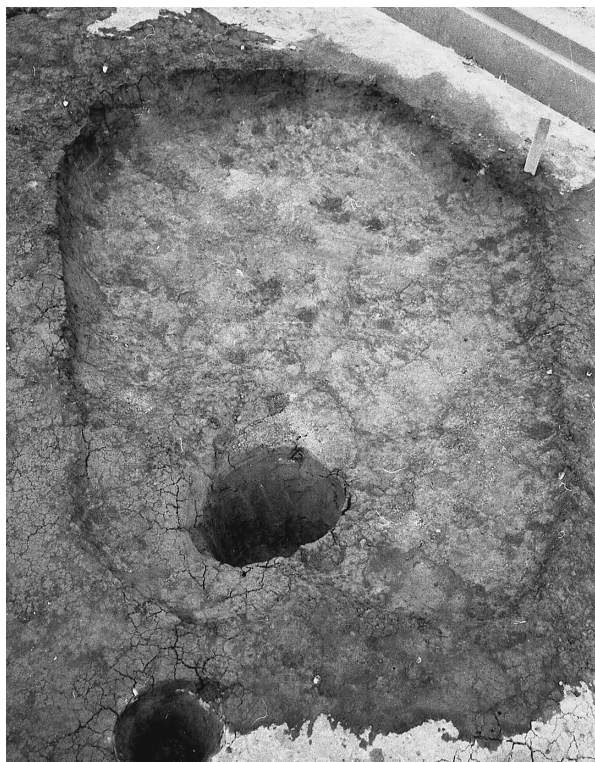
第14号土坑



第9号土坑遺物出土狀況



第9号土坑



第10号土坑



第10号土坑遺物出土狀況



第15号土坑遺物出土狀況 (1)



第15号土坑遺物出土狀況 (2)



第15号土坑

图版6



第15号土坑遺物出土状况(3)



第18号土坑



第16号土坑



第19号土坑遺物出土状况



第19号土坑



第19号土坑遺物出土状况



第20a·20b号土坑遺物出土状况



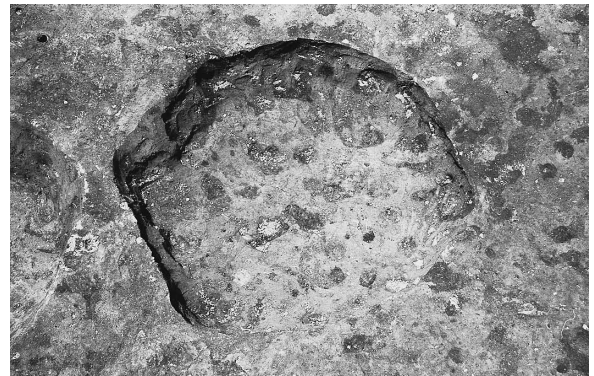
第20a号土坑遺物出土状况



第21号土坑



第21号土坑遺物出土状况



第22号土坑



第24号土坑



第23号土坑

図版8



第25号土坑



調査風景



墓壇群分布状況



第1号住居跡出土土器 (1)



第1号住居跡出土土器 (2)



第1~4号土坑出土土器



第1号土坑出土土器



第2号土坑出土土器



第5号土坑出土土器



第1·5号土坑出土土器

图版 10



第5~8号土坑出土土器



第6号土坑出土土器 (1)



第6号土坑出土土器 (2)



第8号土坑出土土器



第9·10号土坑出土土器



第9号土坑出土土器



第10号土坑出土土器



第11~17号土坑出土土器

图版 12



第10号土坑出土土器



第11号土坑出土土器 (1)



第11号土坑出土土器 (2)



第11号土坑出土土器 (3)



第15·16·18号土坑出土土器



第15号土坑出土土器 (1)



第 15 号土坑出土土器 (2)



第 15 号土坑出土土器 (3)



第 18 号土坑出土土器



第 19~21 号土坑出土土器

图版 14



第19号土坑出土土器 (1)



第19号土坑出土土器 (2)



第20a号土坑出土土器 (1)



第20a号土坑出土土器 (2)



第19号土坑出土土器 (3)



第20b号土坑出土土器



第21号土坑出土土器



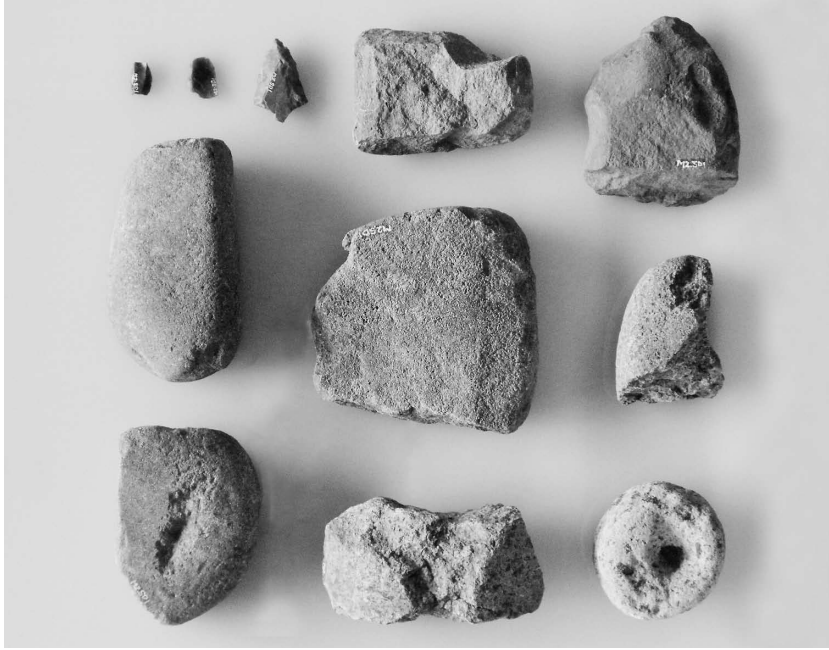
第22~25号土坑·第1号沟出土土器



土坑出土石器 (1)



土坑出土石器 (2)



第1号溝出土石器



調査区出土土器 (1)



調査区出土土器 (2)



調査区出土土器 (3)



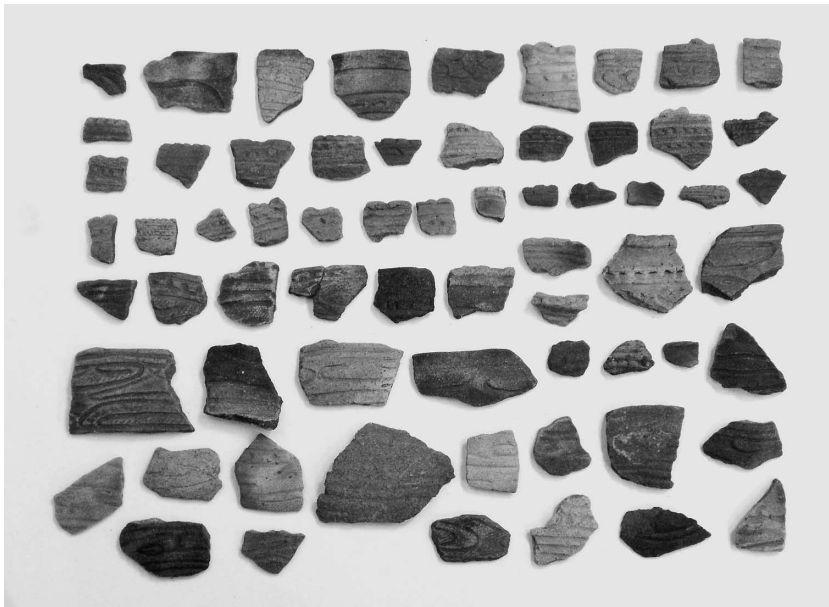
調査区出土土器 (4)



調査区出土土器 (5)



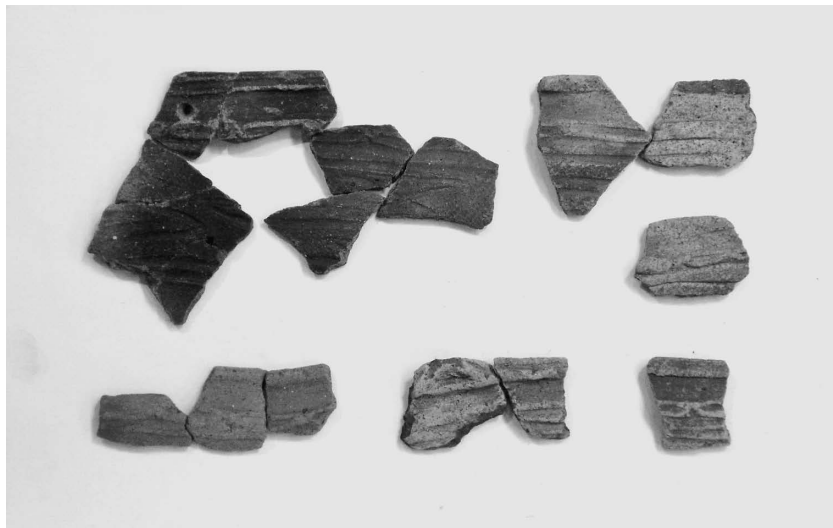
調査区出土土器 (6)



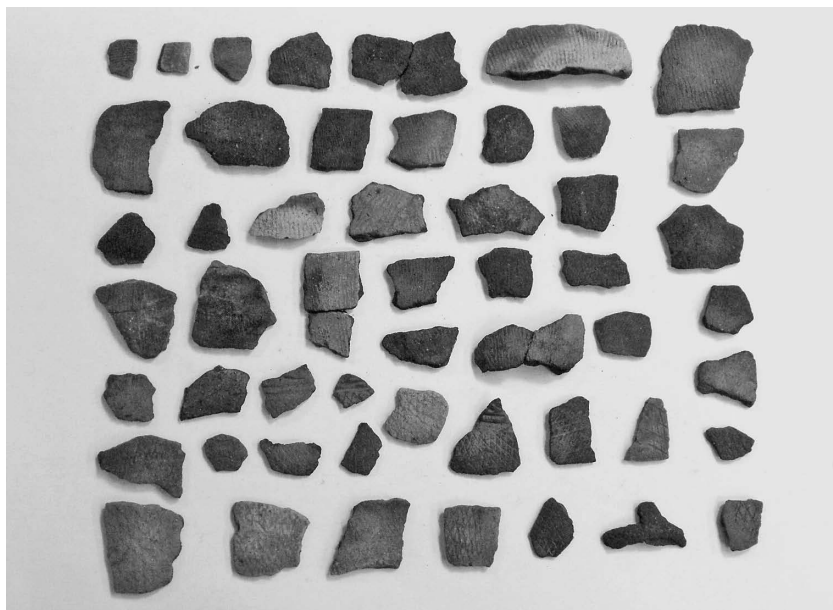
調査区出土土器 (7)



調査区出土土器 (8)



調査区出土土器 (9)



調査区出土土器 (10)



調査区出土土器 (11)



調査区出土土器 (12)



調査区出土土器 (13)



調査区出土土器 (14)



調査区出土土器 (15)



調査区出土土製品 (1)



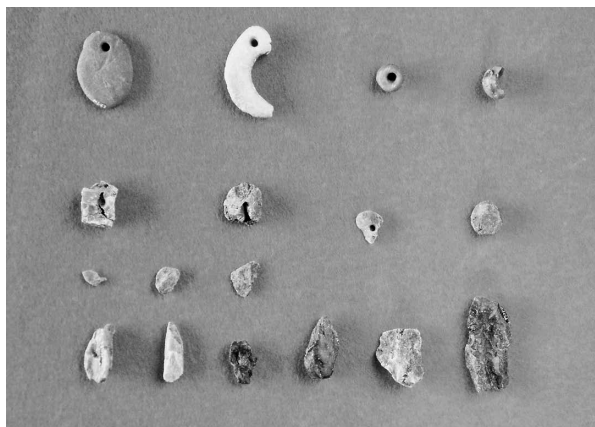
調査区出土土製品 (3)



調査区出土土製品 (2)



調査区出土土器 (1)



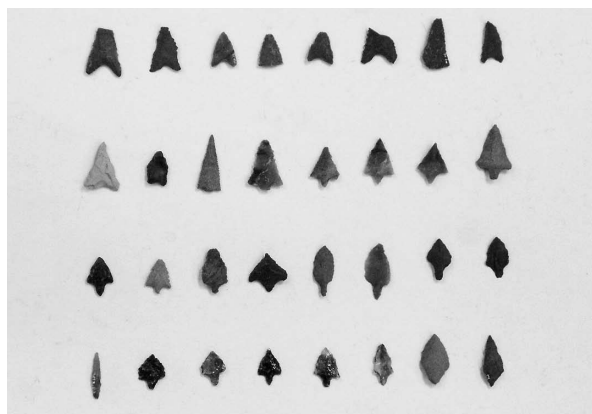
調査区出土石器 (2)



調査区出土石器 (3)



調査区出土石器 (4)



調査区出土石器 (5)



内田氏寄贈資料 (1)



内田氏寄贈資料 (2)

図版 22



内田氏寄贈資料 (3)



内田氏寄贈資料 (4)



内田氏寄贈資料 (5)



内田氏寄贈資料 (6)



内田氏寄贈資料 (7)



内田氏寄贈資料 (8)

報 告 書 抄 録

マエダイセキ (ダイニチテン)									
書 名	前田遺跡 (第2地点)								
副 書 名	市内遺跡群発掘調査報告書 XXI								
シ リ ー ズ 名	白岡市埋蔵文化財調査報告書第23集								
編 著 者 名	奥野 麦生 杉山 和徳								
編 集 機 関	白岡市教育委員会								
所 在 地	〒349-0292 埼玉県白岡市千駄野432 TEL 0480-92-1111								
発 行 年 月 日	2014 (平成26) 年3月31日								
フ リ ガ ナ 所 収 遺 跡	フ リ ガ ナ 所 在 地	コ ー ド		世 界 測 地 系		調 査 期 間	調 査 面 積 (m ²)	調 査 原 因	
		市 町 村	遺 跡	北 緯	東 経				
マエ 前 田 遺 跡	サナガヤアザマエダ 実ヶ谷字前田186-3	11445	036	36° 00′ 09″	139° 40′ 52″	19990524 ~ 19990629	349.81	個人住宅	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
前 田 遺 跡	集落	縄文時代中期～晩期 中近世		住居跡1軒 土坑27基 溝跡1条		縄文土器・土製品・石器		墓壙と考えられる土坑 から数多くの完形～半 完形土器が出土した。	
<p>遺跡の概要</p> <p>前田遺跡は蓮田市と境を接する実ヶ谷地区に所在する。蓮田市の雅楽谷遺跡とは、7～800mしか離れていない。今調査地点では27基の土坑を検出した。土坑の大半は晩期の墓壙群と考えられ、完形～半完形土器が数多く出土した。また、出土土器には、在地の安行系の土器群のほか、東関東系の前浦式、東北の大洞式、中部系の氷式など多様な異系統土器群が出土している。</p>									

白岡市埋蔵文化財調査報告書第23集

前田遺跡（第2地点）

市内遺跡群発掘調査報告書XXI

平成26年3月25日 印刷

平成26年3月31日 発行

発行 白岡市教育委員会

印刷 朝日印刷工業株式会社